

U TO
宇都第3遺跡
YOKO ICHI NAKA HARA
横市中原遺跡

農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

U TO
宇都第3遺跡
YOKO ICHI NAKA HARA
横市中原遺跡

農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設工事に伴い、緑資源公団都城建設事業所長からの依頼を受け、平成13年度に宇都第3遺跡、平成14年度に横市中原遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、宇都第3遺跡では掘立柱建物跡・道状遺構などの遺構や9世紀から10世紀代の平安期の土師器・須恵器などの遺物が確認されたほか、15世紀末の桜島文明軽石により埋没した中世の溝状遺構なども検出されました。中でも今回の調査で確認された平安期の遺構・遺物は、該期の遺跡周辺の地域的様相や都城盆地における古代集落の展開を研究する上で貴重な情報を提供するものとなりました。

また、横市中原遺跡では縄文時代晩期と古墳時代中期を中心にした遺構・遺物が確認されたほか、桜島文明軽石の降下後に耕起されたと考えられる小溝状遺構も検出されました。当遺跡の周辺では、母智丘原第2遺跡や上牧第2遺跡などの調査を当センターがすでに実施しており、それらの遺跡との比較検討により当該地域の各期の様相がさらに明らかになりつつあります。

本書が学術資料として、あるいは学校教育や生涯学習の資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する認識や理解を深めるための一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、地元の皆様方に心より厚くお礼申し上げます。

平成16年2月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米 良 弘 康

例 言

- 1 本書は、農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路の建設に伴う事前調査として、宮崎県教育委員会が実施した宇都第3遺跡と横市中原遺跡の発掘調査報告書である。調査は、緑資源公団都城建設事業所の依頼を受け宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 2 各遺跡の発掘調査期間はそれぞれ次のとおりである。
 - 宇都第3遺跡 平成14年1月21日～平成14年3月20日
 - 横市中原遺跡 平成14年11月13日～平成15年3月18日
- 3 本書で使用した位置図および地形図はそれぞれ次の地図を基に作成した。
 - 宇都第3遺跡 周辺遺跡位置図 → 国土地理院発行の2万5千分の1図『都城』・『山王原』
周辺地形図 → 三股町作成の2千5百分の1図
 - 横市中原遺跡 周辺遺跡位置図 → 国土地理院発行の2万5千分の1図『都城』
周辺地形図 → 都城市作成の2千5百分の1図
- 4 現地における遺構等の実測図の作成は、宇都第3遺跡を福田泰典、柳田晴子が担当し、丹俊詞、古屋美樹が補助した。また、横市中原遺跡は久保春夫、重留康宏が担当し、福田泰典、田中光、甲斐貴充、柳田晴子が補助した。
- 5 遺物・図面の整理は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、図面作成、遺物実測およびトレースを福田、久保が整理作業員の補助を得て行った。また、横市中原遺跡の石器実測は重留が主に担当した。
- 6 本書の執筆は宇都第3遺跡を福田、横市中原遺跡を久保が担当し、編集は福田が担当した。また、使用した写真については、宇都第3遺跡の現地における遺構等の写真を福田・柳田が、横市中原遺跡については久保・重留が撮影した。

なお、遺物写真については福田と久保が撮影した。
- 7 調査に際しては両遺跡ともに国土座標第II系に準拠した10mグリッドを設定し、その杭にアルファベットと整数で名称を与え、その座標杭を基準として遺構等の図化作業を行った。
- 8 本書で使用した方位は、座標北および磁北である。座標北を用いた場合は『G.N.』、磁北を用いた場合には『M.N.』と明記し両者を区別してある（宇都第3遺跡および横市中原遺跡が位置する宮崎県北諸県郡三股町大字宮村付近と都城市横市町付近では磁針方位はともに西偏約5°20′である）。

なお、レベルの表示は海拔絶対高である。
- 9 遺物観察表中の土器等の色調および土層注記内の土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の「新版 標準土色帖」に準拠した。
- 10 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。
 - SA……………竪穴住居跡 SB……………掘立柱建物跡 SC……………土坑
 - SG……………道状遺構 SE……………溝状遺構
- 11 宇都第3遺跡、横市中原遺跡に関する遺物・実測図等は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1

第II章 宇都第3遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と環境	3
第2節 調査の経過	5
第3節 基本層序	6
第4節 調査の記録	8
1 古代の遺構と遺物	8
2 その他の時代の遺構と遺物	32
第5節 宇都第3遺跡のまとめ	37

第III章 横市中原遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と環境	57
第2節 調査の経過	61
第3節 基本層序	61
第4節 調査の記録	63
1 遺構	63
(1) A区の遺構	63
(2) B区の遺構	73
(3) C区の遺構	76
2 包含層出土の遺物	83
(1) 縄文土器	83
(2) 弥生土器	95
(3) 土師器	95
(4) 石器	101
(5) 鉄器	102
第5節 横市中原遺跡のまとめ	119

挿 図 目 次

【宇都第3遺跡】

第1図	宇都第3遺跡および周辺の遺跡位置図 (S=1/25,000)	3
第2図	宇都第3遺跡 周辺地形図 (S=1/4000)	4
第3図	宇都第3遺跡 グリッド配置図 (S=1/600)	5
第4図	宇都第3遺跡 基本層序 (G5グリッド東壁, S=1/20)	6
第5図	宇都第3遺跡 遺構分布図 (古代、S=1/300)	7
第6図	宇都第3遺跡 掘立柱建物跡実測図1 (SB1・SB2、S=1/60)	9
第7図	宇都第3遺跡 掘立柱建物跡実測図2 (SB3・SB4、S=1/60)	10
第8図	宇都第3遺跡 1号道状遺構実測図 (SG1、S=1/80)	11
第9図	宇都第3遺跡 2号溝状遺構実測図 (SE1、S=1/80)	12
第10図	宇都第3遺跡 2号溝状遺構実測図 (SE2、S=1/80)	13
第11図	宇都第3遺跡 3号溝状遺構実測図 (SE3、S=1/60)	14
第12図	宇都第3遺跡 1号・2号土坑実測図 (SC1・SC2、S=1/20)	14
第13図	宇都第3遺跡 出土遺物実測図1 (土師器 皿・坏、S=1/3)	19
第14図	宇都第3遺跡 出土遺物実測図2 (土師器 坏、S=1/3)	20
第15図	宇都第3遺跡 出土遺物実測図3 (土師器 高台付碗・黒色土器、S=1/3)	21
第16図	宇都第3遺跡 出土遺物実測図4 (土師器 甕、S=1/3)	22
第17図	宇都第3遺跡 出土遺物実測図5 (土師器 甕、布痕土器、S=1/3)	23
第18図	宇都第3遺跡 出土遺物実測図6 (須恵器 坏・高台付碗・甕、S=1/3)	25
第19図	宇都第3遺跡 出土遺物実測図7 (須恵器 甕・壺、S=1/3)	26
第20図	宇都第3遺跡 出土遺物実測図8 (土製品、S=1/3)	27
第21図	宇都第3遺跡 出土遺物実測図9 (金属製品、S=1/3)	27
第22図	宇都第3遺跡 遺物分布図1 (古代、E2・F2グリッド、S=1/400)	28
第23図	宇都第3遺跡 遺物分布図2 (古代、E3・F3グリッド、S=1/400)	29
第24図	宇都第3遺跡 遺物分布図3 (古代、G1・H1グリッド、S=1/400)	30
第25図	宇都第3遺跡 遺物分布図4 (古代、G2・H2グリッド、S=1/400)	31
第26図	宇都第3遺跡 出土遺物実測図10 (弥生時代・古墳時代、S=1/3)	32
第27図	宇都第3遺跡 4号溝状遺構実測図 (SE4、S=1/60)	33
第28図	宇都第3遺跡 出土遺物実測図11 (中世、S=1/3)	33

【横市中原遺跡】

第1図	横市中原遺跡および周辺の遺跡位置図 (S=1/50,000)	58
第2図	横市中原遺跡 周辺地形図 (S=1/2,500)	59
第3図	横市中原遺跡 グリッド配置図 (S=1/1,000)	60
第4図	横市中原遺跡 基本層序柱状図	62
第5図	横市中原遺跡 A区遺構分布図 (S=1/200)	63
第6図	横市中原遺跡 A区SA1およびSA2実測図 (S=1/40)	65
第7図	横市中原遺跡 A区SA3実測図 (S=1/40)	66
第8図	横市中原遺跡 A区SC1・2・3・4・5・6・7実測図 (S=1/40)	68
第9図	横市中原遺跡 A区SA2・SC4・SC6出土遺物実測図 (S=1/3、203はS=1/2)	69
第10図	横市中原遺跡 A区SA4実測図 (S=1/40)および出土遺物実測図 (S=1/3、204はS=1/2)	71
第11図	横市中原遺跡 A区SE1実測図・土層断面図 (S=1/40)および出土石器実測図 (S=1/2)	72
第12図	横市中原遺跡 B区遺構分布図 (S=1/200)	74

第13図	横市中原遺跡 B区SC1・2・3実測図 (S=1/40)およびSC2出土土器・第V層出土土器実測図 (S=1/3) …	75
第14図	横市中原遺跡 C区遺構分布図 (S=1/400) ……………	77
第15図	横市中原遺跡 C区SA1実測図 (S=1/40) ……………	78
第16図	横市中原遺跡 C区SA2実測図 (S=1/40) ……………	79
第17図	横市中原遺跡 C区SA1・SA2出土遺物実測図 (S=1/3,206はS=1/8) ……………	80
第18図	横市中原遺跡 C区小溝状遺構実測図 (S=1/200) および小溝状遺構断面図 (S=1/40) ……	82
第19図	横市中原遺跡 C区SC1・2・3・4・5・6実測図 (S=1/40) ……………	84
第20図	横市中原遺跡 縄文土器実測図(1)(S=1/3) ……………	86
第21図	横市中原遺跡 縄文土器実測図(2)(S=1/3) ……………	87
第22図	横市中原遺跡 縄文土器実測図(3)(S=1/3) ……………	89
第23図	横市中原遺跡 縄文土器実測図(4)(S=1/3) ……………	90
第24図	横市中原遺跡 縄文土器実測図(5)(S=1/3) ……………	91
第25図	横市中原遺跡 縄文土器実測図(6)(S=1/3) ……………	92
第26図	横市中原遺跡 縄文土器実測図(7)(S=1/3) ……………	93
第27図	横市中原遺跡 縄文土器実測図(8)(S=1/3) ……………	94
第28図	横市中原遺跡 縄文土器実測図(9)(S=1/3) ……………	96
第29図	横市中原遺跡 縄文土器実測図(10)(S=1/3) ……………	97
第30図	横市中原遺跡 土師器実測図(1)(S=1/3) ……………	99
第31図	横市中原遺跡 土師器実測図(2)(S=1/3) ……………	100
第32図	横市中原遺跡 石器実測図(1)(S=1/2) ……………	103
第33図	横市中原遺跡 石器実測図(2)(S=1/2) ……………	104
第34図	横市中原遺跡 石器実測図(3)(S=1/2) ……………	105
第35図	横市中原遺跡 石器実測図(4)(S=1/2) ……………	106
第34図	横市中原遺跡 石器実測図(5)(S=1/2) ……………	107
第37図	横市中原遺跡 石器実測図(6)(S=1/2) ……………	108
第38図	横市中原遺跡 石器実測図(7)(S=1/2) ……………	109
第39図	横市中原遺跡 石器実測図(8)(S=1/2,266はS=1/4)および鉄器実測図(270はS=1/2) ……	110

表 目 次

【宇都第3遺跡】

第1表	宇都第3遺跡 掘立柱建物跡一覧 ……………	8
第2表	宇都第3遺跡 土錘計測表 ……………	27
第3表	宇都第3遺跡 遺物観察表1 ……………	34
第4表	宇都第3遺跡 遺物観察表2 ……………	35
第5表	宇都第3遺跡 遺物観察表3 ……………	36

【横市中原遺跡】

第1表	横市中原遺跡 土器観察表1 ……………	111
第2表	横市中原遺跡 土器観察表2 ……………	112
第3表	横市中原遺跡 土器観察表3 ……………	113
第4表	横市中原遺跡 土器観察表4 ……………	114
第5表	横市中原遺跡 土器観察表5 ……………	115
第6表	横市中原遺跡 土器観察表6 ……………	116
第7表	横市中原遺跡 土器観察表7 ……………	117
第8表	横市中原遺跡 石器計測表 ……………	118

図版目次

【宇都第3遺跡】

図版 1	41
	宇都第3遺跡 全景 (南西丘陵斜面から)	
	宇都第3遺跡 1号道状遺構(SG1)検出状況 (南東から)	
	宇都第3遺跡 1号道状遺構(SG1)完掘状況 (北東から)	
図版 2	42
	宇都第3遺跡 1号溝状遺構(SE1)完掘状況 (北東から)	
	宇都第3遺跡 1号溝状遺構(SE1)埋土状況 (東から)	
	宇都第3遺跡 2号溝状遺構(SE2)完掘状況 (北から)	
	宇都第3遺跡 2号溝状遺構(SE2)埋土状況 (南西から)	
	宇都第3遺跡 3号溝状遺構(SE3)完掘状況 (東から)	
	宇都第3遺跡 3号道状遺構(SE3)埋土状況 (南西から)	
	宇都第3遺跡 1号土坑(SC1)完掘状況 (北東から)	
	宇都第3遺跡 2号土坑(SC2)完掘状況 (北西から)	
図版 3	43
	宇都第3遺跡 遺物出土状況 1 (F2グリッド、西から)	
	宇都第3遺跡 遺物出土状況 2 (遺物番号127)	
	宇都第3遺跡 遺物出土状況 3 (遺物番号96)	
	宇都第3遺跡 遺物出土状況 4 (遺物番号162)	
	宇都第3遺跡 遺物出土状況 5 (遺物番号126)	
	宇都第3遺跡 遺物出土状況 6 (遺物番号129)	
図版 4	44
	宇都第3遺跡 土師器 (皿、遺物番号1)	
	宇都第3遺跡 土師器 (坏I類、遺物番号5)	
	宇都第3遺跡 土師器 (坏I類、遺物番号6)	
	宇都第3遺跡 土師器 (坏II類、遺物番号16)	
	宇都第3遺跡 土師器 (坏II類、遺物番号17)	
	宇都第3遺跡 土師器 (坏II類、遺物番号19)	
	宇都第3遺跡 土師器 (坏II類、遺物番号20)	
	宇都第3遺跡 土師器 (坏III類、遺物番号31)	
図版 5	45
	宇都第3遺跡 土師器 (坏III類、遺物番号32)	
	宇都第3遺跡 土師器 (坏IV類、遺物番号40)	
	宇都第3遺跡 土師器 (坏IV類、遺物番号41)	
	宇都第3遺跡 土師器 (坏IV類、遺物番号42)	
	宇都第3遺跡 土師器 (坏V類、遺物番号49)	
	宇都第3遺跡 土師器 (坏V類、遺物番号50)	
	宇都第3遺跡 土師器 (高台付埴I類、遺物番号53)	
	宇都第3遺跡 土師器 (高台付埴II類、遺物番号54)	
図版 6	46
	宇都第3遺跡 土師器 (皿、坏I類、外面)	
	宇都第3遺跡 土師器 (皿、坏I類、内面)	
図版 7	47
	宇都第3遺跡 土師器 (坏II類、外面)	
	宇都第3遺跡 土師器 (坏II類、内面)	
図版 8	48
	宇都第3遺跡 土師器 (坏III~V類、外面)	
	宇都第3遺跡 土師器 (坏III~V類、内面)	
図版 9	49
	宇都第3遺跡 土師器 (高台付埴II~IV類、外面)	
	宇都第3遺跡 土師器 (高台付埴II~IV類、内面)	

図版10	宇都第3遺跡 土師器 (高台付埴V~Ⅷ類, 外面) 宇都第3遺跡 土師器 (高台付埴V~Ⅷ類, 内面) 宇都第3遺跡 墨書土器 (「芳」、遺物番号20) 宇都第3遺跡 高台付埴の底部内面調整 (遺物番号 左:53、右:62)	50
図版11	宇都第3遺跡 黒色土器1 (遺物番号74) 宇都第3遺跡 黒色土器2 (左:外面、右:内面) 宇都第3遺跡 土師器甕1	51
図版12	宇都第3遺跡 土師器甕2 宇都第3遺跡 布痕土器 (左:外面、右:内面)	52
図版13	宇都第3遺跡 須恵器 (坏、遺物番号115) 宇都第3遺跡 須恵器 (坏、遺物番号116) 宇都第3遺跡 須恵器 (坏、遺物番号117) 宇都第3遺跡 須恵器 (坏、遺物番号119) 宇都第3遺跡 須恵器 (高台付埴、遺物番号122) 宇都第3遺跡 須恵器 (坏、左:外面、右:内面) 宇都第3遺跡 須恵器 (甕、遺物番号126)	53
図版14	宇都第3遺跡 須恵器 (甕、外面) 宇都第3遺跡 須恵器 (甕、内面)	54
図版15	宇都第3遺跡 須恵器 (壺、遺物番号137・139・141・143) 宇都第3遺跡 須恵器 (壺、外面) 宇都第3遺跡 須恵器 (壺、内面)	55
図版16	宇都第3遺跡 土製品・金属製品 宇都第3遺跡 その他の時代の遺物 (弥生土器・古墳時代の土師器・鉄鏃・中世陶器)	56
【横市中原遺跡】		
図版1	横市中原遺跡 全景 (南上空から) 横市中原遺跡 A・B区遺構検出状況 (垂直)	121
図版2	横市中原遺跡 C区遺構検出状況 (垂直) 横市中原遺跡 A区SA2検出状況 (南東から) 横市中原遺跡 A区SA2遺物出土状況 (南東から) 横市中原遺跡 A区SA3埋土状況 (北から) 横市中原遺跡 A区SE1完掘状況 (東から)	122
図版3	横市中原遺跡 B区SC1半截状況 (東から) 横市中原遺跡 B区SC2検出状況 (西から) 横市中原遺跡 C区SA1遺物出土状況 (東から) 横市中原遺跡 C区SA1完掘状況 (東から) 横市中原遺跡 C区SA2検出状況 (南東から) 横市中原遺跡 C区SA2完掘状況 (東から) 横市中原遺跡 C区SC2・SC3完掘状況 (南西から) 横市中原遺跡 C区SC4完掘状況 (南から)	123
図版4	横市中原遺跡 C区小溝状遺構検出状況 (北西から) 横市中原遺跡 C区小溝状遺構完掘状況 (垂直) 横市中原遺跡 C区小溝状遺構下復旧痕検出状況 (北西から)	124

図版5	125
	横市中原遺跡 A区遺構内出土遺物 (SA2:1・131・203、SA4:126~129・204、SC4:2、SC6:3)	
	横市中原遺跡 C区SA1・SA2出土遺物 (SA1:135・137、SA2:140~146・206)	
図版6	126
	横市中原遺跡 B区出土遺物 (甕, SC2:132・133, 130 (V層))	
	横市中原遺跡 C区SA1出土遺物 (甕・壺)	
	横市中原遺跡 C区SA2出土遺物 (高坏)	
	横市中原遺跡 C区SA2出土遺物 (小型丸底壺)	
図版7	127
	横市中原遺跡 縄文土器1 (I・II類)	
	横市中原遺跡 縄文土器2 (III・IV類)	
図版8	128
	横市中原遺跡 縄文土器3 (V類)	
	横市中原遺跡 縄文土器4 (VI類)	
図版9	129
	横市中原遺跡 縄文土器5 (VI類, 組織痕土器)	
図版10	130
	横市中原遺跡 縄文土器6 (VII類)	
	横市中原遺跡 縄文土器7 (VIII類)	
図版11	131
	横市中原遺跡 縄文土器8 (IX類)	
	横市中原遺跡 縄文土器9 (X類・XI類・XII類)	
図版12	132
	横市中原遺跡 土師器1 (古墳時代, 甕I類)	
	横市中原遺跡 土師器2 (古墳時代, 甕II類・III類)	
図版13	133
	横市中原遺跡 土師器3 (古墳時代, 甕IV類)	
	横市中原遺跡 土師器4 (古墳時代, 甕IV類)	
図版14	134
	横市中原遺跡 土師器5 (古墳時代, 小型甕・壺・高坏・鉢・坏)	
	横市中原遺跡 土師器6 (古墳時代, 高坏)	
	横市中原遺跡 C区出土遺物 (石皿)	
	横市中原遺跡 A区鉄器 (古墳時代, 鉄鏃)	
図版15	135
	横市中原遺跡 出土石器 (石鏃, 石錐, スクレイパー, 剥片, 二次加工剥片)	
	横市中原遺跡 出土石器 (二次加工剥片, 使用痕剥片, 石核)	
図版16	136
	横市中原遺跡 出土石器 (打製石斧, 磨製石斧)	
	横市中原遺跡 出土石器 (磨石, 砥石, 石庖丁, 擦痕ある石器, 異形石器)	

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

緑資源公団（旧農用地整備公団）では、都城地区の農業生産性の向上と安定を目的とする圃場整備事業（204ha）と農産物流通の迅速化を図るための農業用道路整備事業（総延長19.1km）を核とする農用地総合整備事業を計画した。そこで事業に先立ち、県文化課に九州農政局南部九州土地改良調査管理事務所より事業予定地内の埋蔵文化財の有無の照会があった。それを受けて県文化課は、平成6年3月に予定地内に33の遺跡と試掘調査が必要な29箇所が所在することを回答した。以後、その回答に基づき埋蔵文化財の保護、発掘調査面積の平準化、調査員の確保などについて継続的に協議した結果、現状保存が困難な部分については発掘調査を行い記録保存の措置をとることになり、平成9年度に母智丘谷遺跡から発掘調査を開始した。今回報告する2遺跡は、横市中原遺跡が農業用道路建設予定地の2工区、宇都第3遺跡が最終工区の8工区に位置する。

宇都第3遺跡は、周知の遺跡である宇都第1遺跡、同第2遺跡、平原遺跡などに隣接することから遺構・遺物の存在が確実視された。県文化課の確認調査(平成13年12月6～11日)の結果でも、当初の予想どおり設定した各トレンチにおいて検出状況や出土量に差異はあるものの一定量の遺構・遺物を確認することができた。なかでも丘陵の裾部に設定したトレンチからは9世紀から10世紀にかけての平安期の土師器・須恵器などが多量に出土し、該期の遺跡の存在が明らかになった。

横市中原遺跡は当センターが調査を実施した母智丘原第2遺跡と同一丘陵上に展開する周知の遺跡であり、県文化課が実施した確認調査(平成14年8月21～23日)の結果でも霧島御池軽石の上面で柱穴と思われるにじみや縄文時代後晩期の土器や古墳時代の土師器などが確認された。また、調査区の北側端部では15世紀末に降下した桜島文明軽石（通称「文明の白ボラ」、「文明ボラ」）の堆積も確認でき、中世の遺構・遺物の存在も予想され既存道を除外した範囲の本調査を実施する運びとなった。

なお、両遺跡の本調査は緑資源公団都城建設事業所長の依頼により、宇都第3遺跡を平成14年1月21日から3月20日、横市中原遺跡を平成14年11月13日から平成15年3月18日の期間で宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

第 2 節 調査の組織

宇都第3遺跡と横市中原遺跡の調査の組織はそれぞれ次のとおりである。

宇都第3遺跡 発掘調査（平成13年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	矢野 剛
副所長兼総務課長	菊地 茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課総務係長	亀井 維子
調査第二課調査第三係長	菅付 和樹
調査第二課調査第四係長	永友 良典
調査第二課調査第三係主査（調査担当）	福田 泰典
調査第二課調査第四係調査員（嘱託）	柳田 晴子

宇都第3遺跡 整理および報告書作成（平成14～15年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	米良 弘康
副所長兼総務課長	大藪 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課総務係長	野邊 文博
総務課主幹兼総務係長	石川 恵史
調査第二課調査第三係長	菅付 和樹
調査第二課調査第四係長	近藤 協
調査第二課調査第三係主査（報告書担当）	福田 泰典

横市中原遺跡 発掘調査（平成14年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	米良 弘康
副所長兼総務課長	大藪 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課総務係長	野邊 文博
調査第二課調査第四係長	永友 良典
調査第二課調査第四係主査（調査担当）	久保 春夫
調査第二課調査第四係調査員（囑託）	重留 康宏

横市中原遺跡 整理および報告書作成（平成15年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	米良 弘康
副所長兼総務課長	大藪 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川 恵史
調査第二課調査第四係長	近藤 協
調査第二課調査第四係主査（報告書担当）	久保 春夫

第II章 宇都第3遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と環境

北諸県郡三股町は宮崎県の南西部、鰐塚山系および霧島山系に囲まれた都城盆地の南東部に位置し、都城市・高城町・山之口町・田野町・北郷町・日南市の2市4町に隣接している。町内には鰐塚山にその源を発する大淀川水系の沖水川が西流し、その流域に形成された扇状地には広大な水田地帯が展開している。また、日南・北郷方面との分水嶺となる山間部では杉の植林が進み美林が広がっている。

今回調査の対象となった宇都第3遺跡は、三股町の中心から南南西に約3km、標高約195m付近の萩原川およびその支流の小鷲巣川の西に面した丘陵裾部に位置する。周辺には、平原遺跡・下水流遺跡などの縄文時代から古代の遺跡が隣接しており、眼下に川を見下ろす段丘上に緩やかな傾斜地が広がるこの地は、古来より人々の参集する場所であったことを窺い知ることができる。

同町内での遺跡発掘調査はまだその数が少なく各時代をととして資料の蓄積は十分であるとは言えないが、長田の坂ノ下遺跡では、縄文時代早期の遺物（前平式土器・吉田式土器・塞ノ神式土器）や集石遺構などが確認されている。また、古代律令制下に置かれていた「水俣（みなまた）驛」の場所を同町内に比定する考えがあることや、11世紀初頭に大宰府大監平季基が領した「三俣院」に当地が包括されていたことから、古くは町名に「三俣」の文字を当てていたことなど興味深いものがある。

その他にも、戦国期の伊東氏と島津氏の南九州の覇権争いの舞台となった梶山城跡や、近世に幕府巡検使の通路となった寺柱往還（牛ノ峠越往還）に設置された日州寺柱番所（関所）跡などの存在を考えても、当地が古来より領地経営や交通面で要衝の地であったことは確かである。

[参考文献] 『宮崎県の地名』 日本歴史地名体系46 平凡社 1996
『三股町遺跡詳細分布調査報告書』 三股町文化財報告書第1集 宮崎県三股町教育委員会 1996



- 1 宇都第1遺跡 2 宇都第2遺跡 3 宇都第3遺跡 4 豊満大谷遺跡 5 下水流遺跡 6 上鷹遺跡 7 平原遺跡
8 田尻遺跡 9 西原遺跡 10 岡之元遺跡 11 岡下遺跡 12 畑田遺跡 13 尾崎遺跡 14 中村遺跡 15 高畑遺跡
16 前畑遺跡 17 村前遺跡 18 日州寺柱番所（関所）跡

第1図 宇都第3遺跡および周辺の遺跡位置図 (S=1/25,000)



第2図 宇都第3遺跡周辺地形図 (S=1/4,000)

第2節 調査の経過

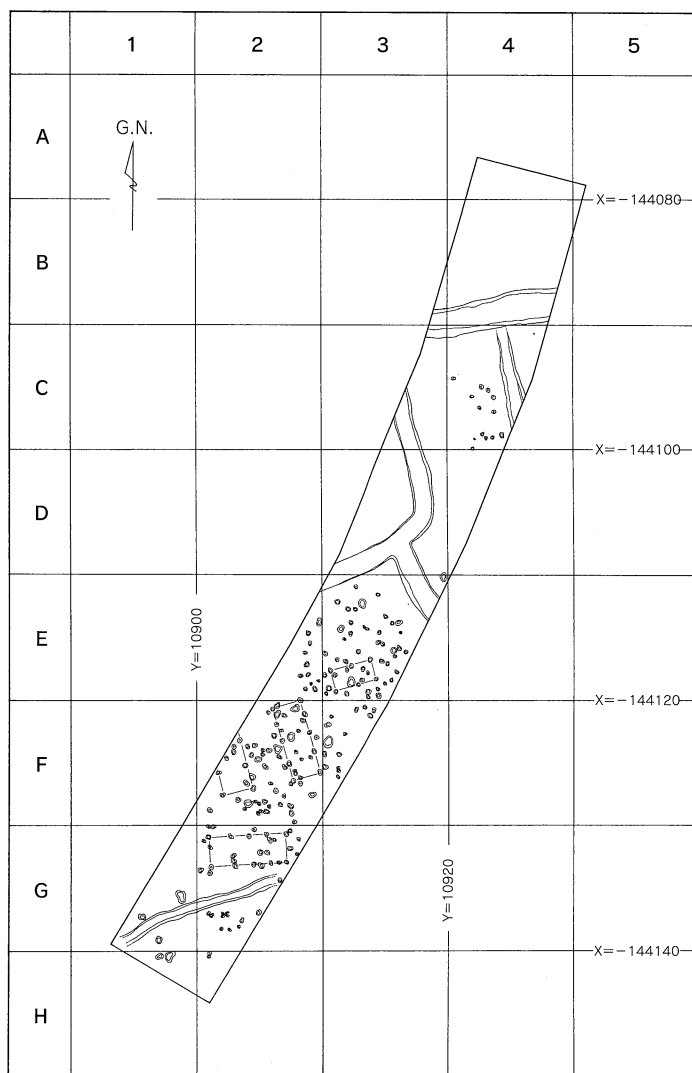
調査区は孟宗竹の竹林であったため事前にその伐採を行ったが、遺物包含層への影響を考慮して竹根の除去は行わなかった。そのため、表土剥ぎの前段階として古代の遺物包含層である第Ⅲ層（黒色土）中位から第Ⅳ層（暗褐色土）への竹根の影響を確認する必要が生じた。そこで、竹が密集している範囲にトレンチを設定しその影響を確認したところ、第Ⅲ層（第1遺物包含層）の上位までは竹根が混入するものの、下位ではそれほど大きな影響を受けないことが分かった。そこで、重機により第Ⅲ層上位までを除去し、一部で同層下位まで混入が激しい竹根については人力によりそれを除去した。その後、精査を行った結果、1回目の作業で平安期の土師器片や須恵器片が460点ほど出土し面的な広がりを見せ始めた。また、遺構については第Ⅲ層下位から下層の第Ⅳ層上面で検出作業を行い、後で道状遺構および溝状遺構と判明した带状のにじみや掘立柱建物跡を構成するピット群を検出するに至った。その他にも、調査区の中央やや北寄りのC4・D4グリッド付近に弥生土器片が集中して出土する範囲があり、住居跡の存在を確信し遺構検出に努めたが該期の遺構検出には至らなかった。

調査として一応の成果を得た3月13日には、小鷺巣地区の住民を対象にした現地説明会を実施し、町の文化財保存調査委員会の方々をはじめ21名の参加を得た。

その後、調査は土層堆積状況観察のトレンチで霧島御池軽石(Kr-M)の良好な堆積層が確認されていたため、同層下の遺構・遺物の有無についての確認作業に移行した。しかし、遺構・遺物は認められず無遺物層であることが判明した。

そこで、さらに下層の鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)堆積層の直下で縄文時代早期の遺物・遺構の確認を行ったがここでも文化層は存在せず、灰白色の弱い粘性を帯びるシルト層及び河岸段丘の基底層を成す礫層が北西の方向に向かって緩やかに傾斜しながら堆積していた。このような堆積状況が確認できたことから、第Ⅳ層より下層には文化層は存在しないものと判断した。

1月21日に始まった調査は、この土層堆積状況の図化を最後にすべての作業を完了し、3月20日をもって終了した。

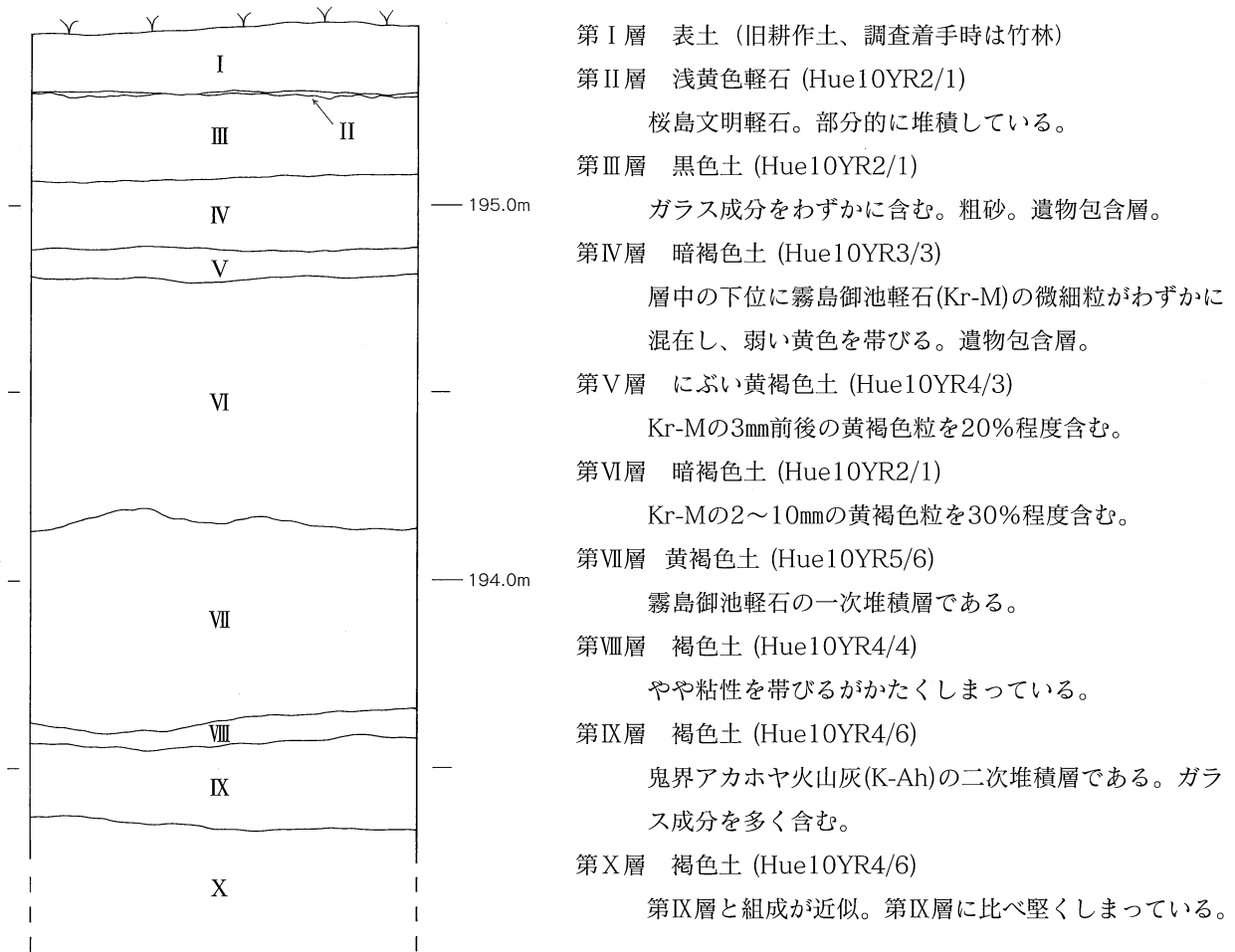


第3図 宇都第3遺跡 グリッド配置図 (S=1/600)

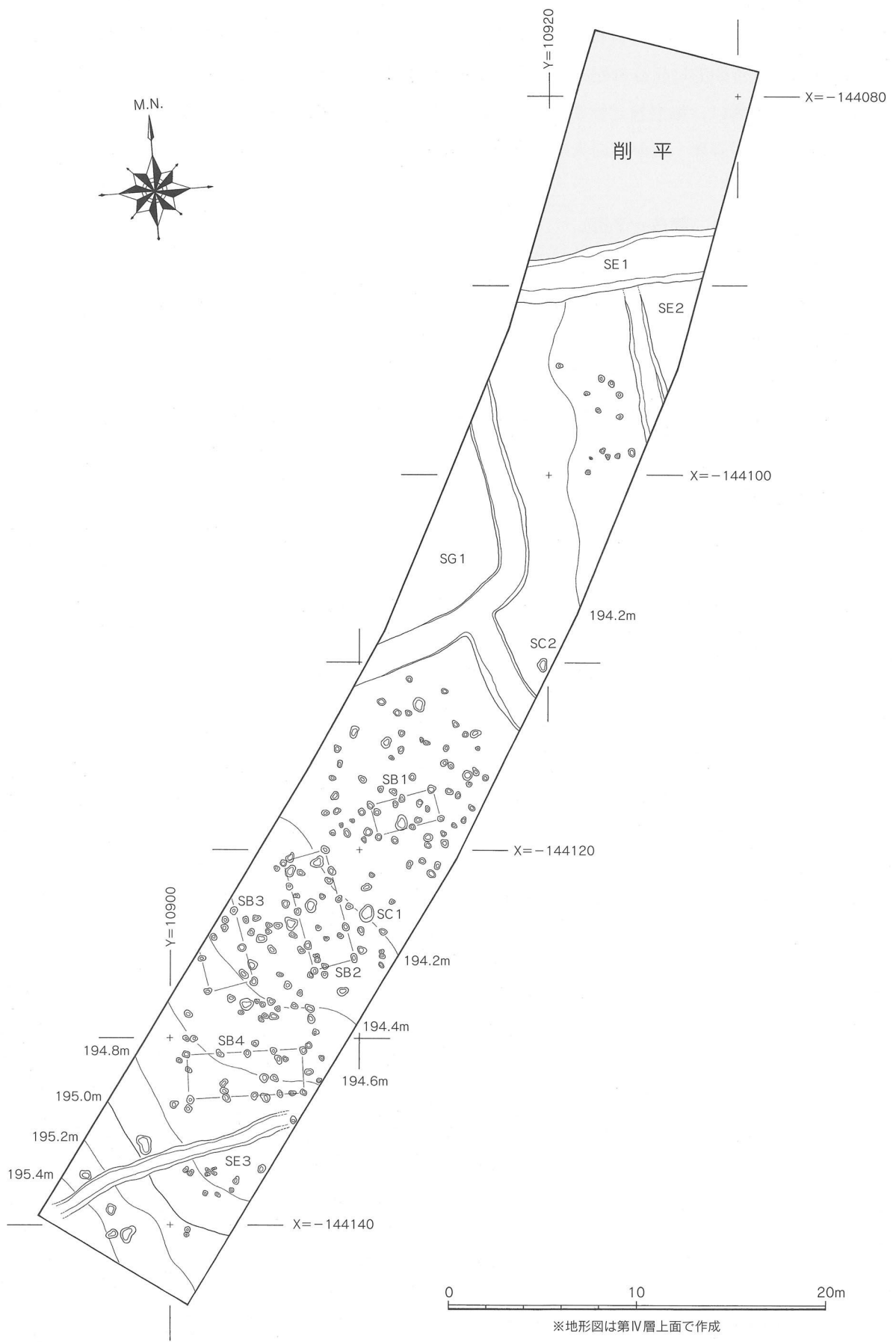
第3節 基本層序

G5グリッド東壁付近の土層堆積状況を第4図に示した。調査区内における土層の堆積状況は、15世紀末に降下した桜島文明軽石(Sz-3)堆積層を除いてさほど大きな差異は認められず、同図に示した堆積状況は調査区全体の土層堆積の様相を反映するものと考えられることができる。

第I層の表土は旧耕作土で、堆積層の厚さは約20~35cmである。第II層は桜島文明軽石の堆積層である。調査区内で最もレベルの低いD3・E3グリッド付近では約10cm前後の堆積を認めることができたが、北端及び南端ではその堆積状況が散漫になり、部分的には堆積の見られない範囲もあった。第III層は約20~25cmの厚さで堆積する黒色土で、層中の上位にわずかに中世の遺物を、中位以下に古代の遺物を多量に包含していた。第IV層は暗褐色土で古代の遺物包含層である。第III層と同じ程度の約20cm前後の厚さで堆積し、わずかではあるが弥生土器片がこの層から出土している。第V層は平均堆積厚が10cm未満のにぶい黄褐色土で無遺物層である。第VI層のやや粘性を帯びる暗褐色土は平均堆積厚が60~70cmあり、第VII層の霧島御池軽石堆積層の漸移層である。第VII層は良好な堆積状況が確認できた霧島御池軽石の堆積層で、長軸が20mm程度の粒子を密に含有する。第VIII層の褐色土は10cm未満の不安定な堆積を見せる。第IX層(堆積厚約20~25cm)と第X層(堆積厚約45~55cm)の両層はその組成が近似する鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)の二次堆積層である。第X層の下層は微細な黒色鉱物粒を特徴的に含む明黄褐色土の地山層となるが、調査区北端では同層は存在せず灰白色シルト層がこれに取って代わる。



第4図 宇都第3遺跡 基本層序 (G5グリッド東壁, S=1/20)



第5図 宇都第3遺跡 遺構分布図 (古代, S=1/300)

第4節 調査の記録

1 古代の遺構と遺物

宇都第3遺跡で確認された古代の遺構・遺物は、検出した道状遺構の南側に偏倚していた。出土した遺物の様相から時期的には9世紀、10世紀の時期幅に収まるものと考えられる。

検出された遺構は、掘立柱建物跡4棟、道状遺構1条、溝状遺構3条、土坑2基である。また、遺物は土師器・須恵器の坏・甕がその大半を占めていた。

(1) 遺 構

掘立柱建物跡（SB，第6～7図）

1号掘立柱建物跡（SB1，第6図）

検出された4棟の掘立柱建物跡の中では最も規模が小さいが、柱間の距離がほぼ均等であり、均整の取れた柱穴の配置である。2号掘立柱建物跡及び3号掘立柱建物跡と直交する主軸方位をもつ。

2号掘立柱建物跡（SB2，第6図）

1間×4間の掘立柱建物跡であり、隣接して検出された3号掘立柱建物跡とほぼ平行な位置関係を保つ。遺構の東側では1号土坑が検出されている。

3号掘立柱建物跡（SB3，第7図）

2号掘立柱建物跡と同じF2グリッドで検出された。ここでは調査範囲の制約上、1間×2間の掘立柱建物跡としての確認に止まった。しかし、桁行は調査区外へと延長していることが想定でき、規模としては1間×2間以上の可能性を指摘しておきたい。

4号掘立柱建物跡（SB4，第7図）

G2グリッドで検出された1間×4間の掘立柱建物跡である。今回検出した掘立柱建物跡の中では最もその規模が大きい。

次に、検出された4棟の掘立柱建物跡について、その主軸方位をもとに比較する。

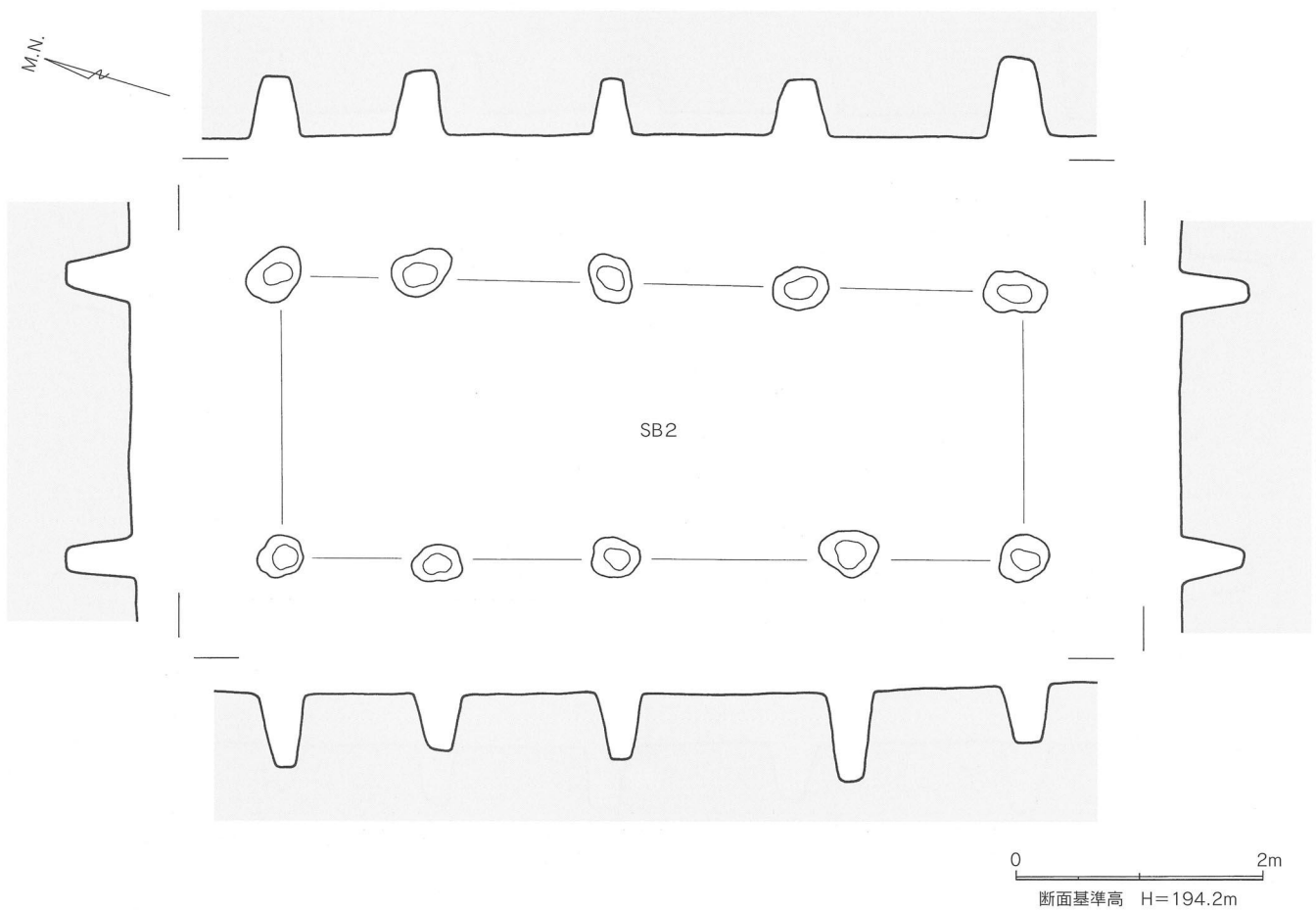
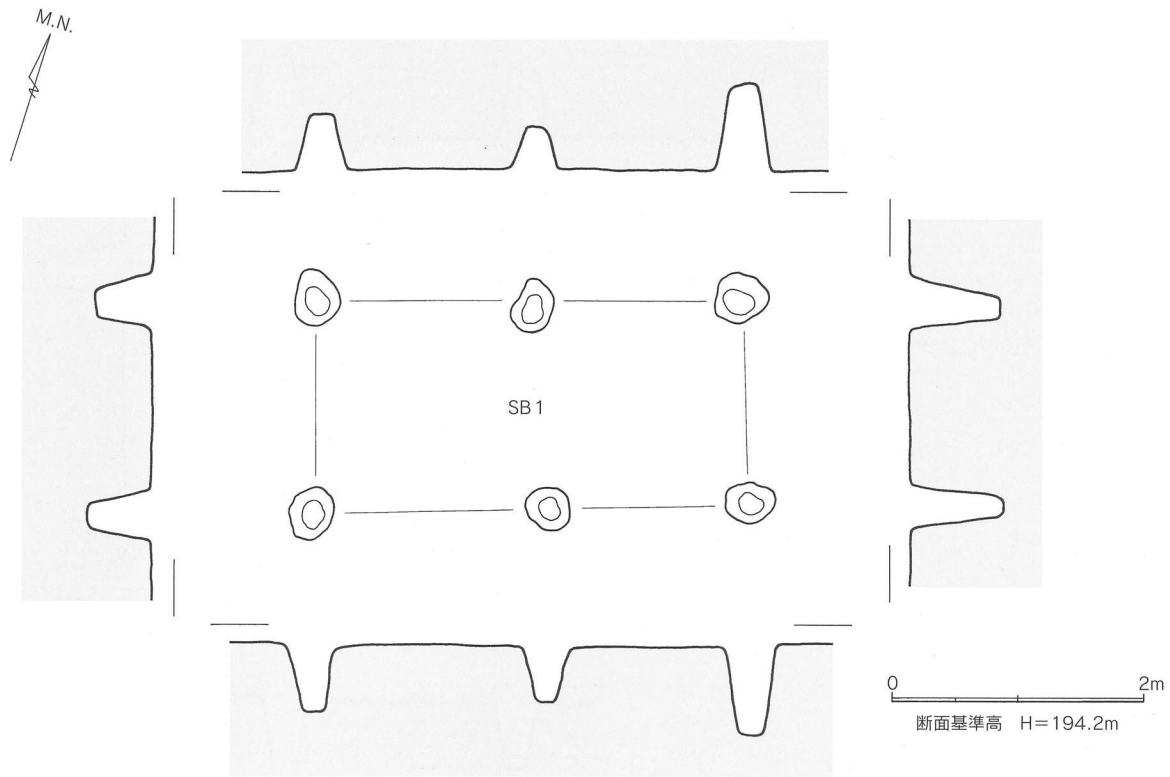
F2グリッドを中心にして検出されたSB2とSB3は、ほぼ同じ方位を有しほぼ平行な位置関係を保っていることから同時期の作事による可能性が指摘できる。また、この主軸方位はその北側に位置する1号道状遺構(SG1)や調査区南端で確認された3号溝状遺構(SE3)などとの位置関係を考慮した配置とも見て取れる。SB4の主軸方位及び位置関係には残り3棟と比較するとわずかなずれが生じている。これは作事における若干の時期差がその要因として考えられる。

なお、詳細については次の掘立柱建物跡一覧を参照されたい。

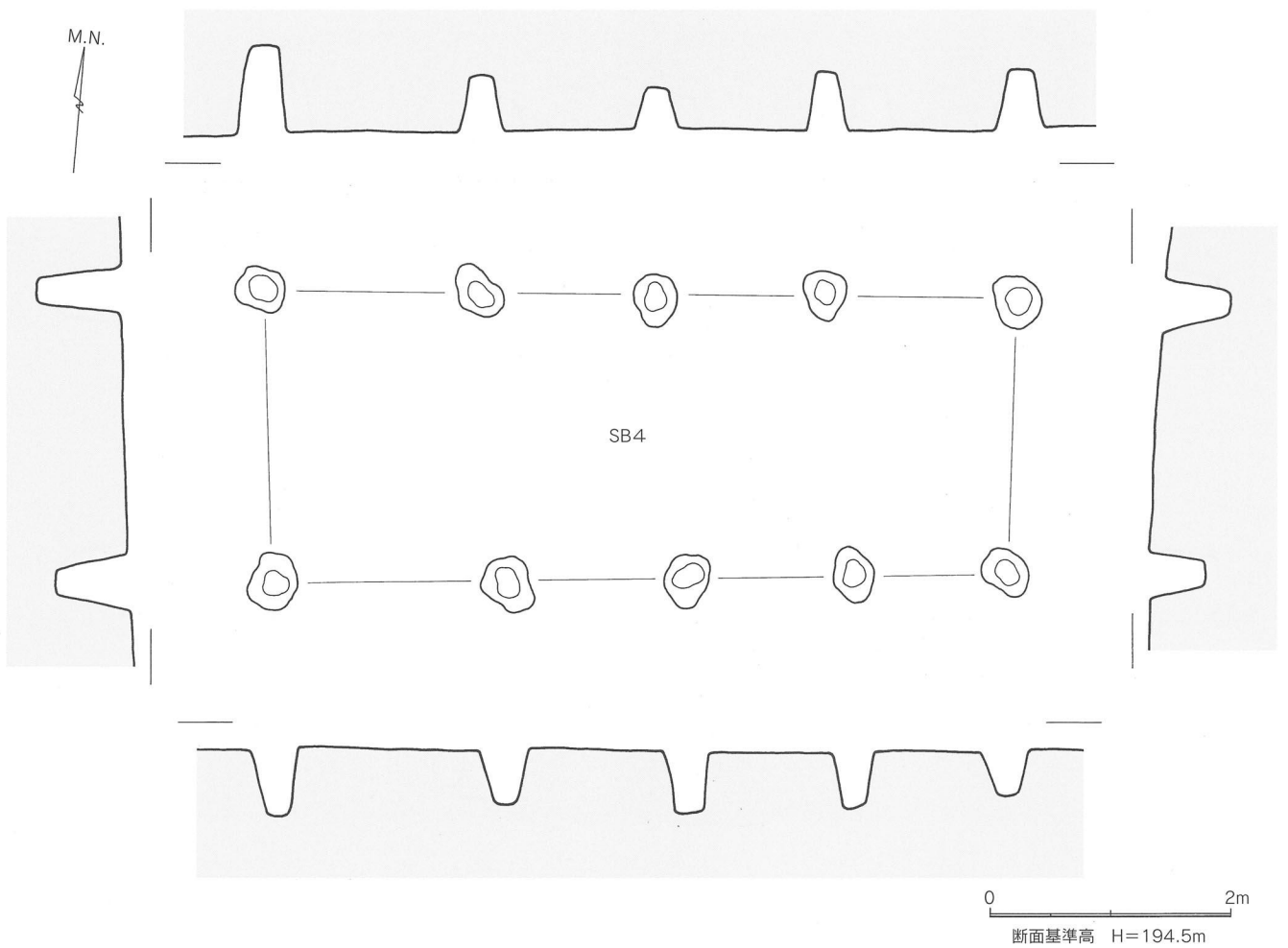
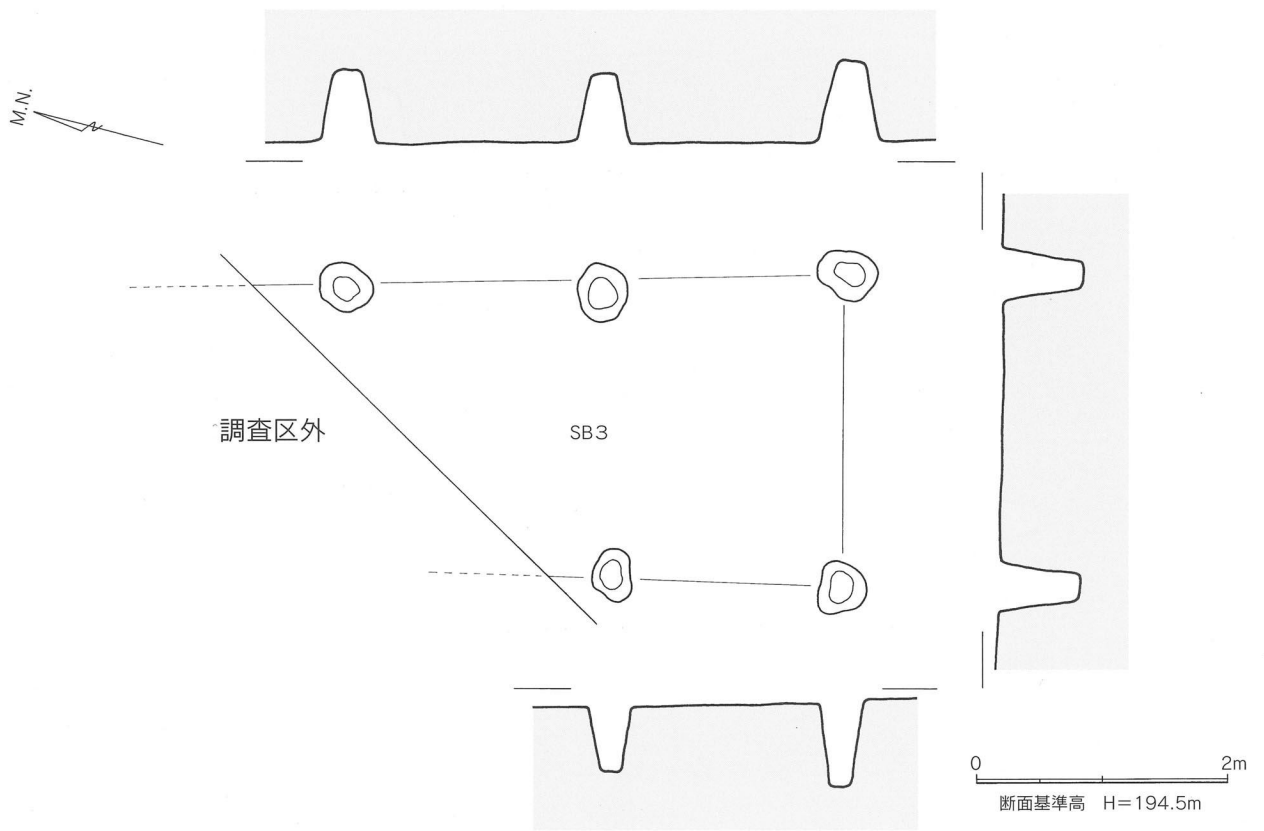
第1表 宇都第3遺跡 掘立柱建物跡一覧

遺構番号	主軸方位(G.N.)	規 模	桁行(m)	梁行(m)	面積(m ²)	桁梁比率	平均柱間(m)	検出位置
SB1	N-75°-E	1間×2間	3.47	1.74	6.04	1.99	1.73	E3
SB2	N-17°-W	1間×4間	6.02	2.28	13.73	2.64	1.66	F2
SB3	N-14°-W	1間×2間以上	2.48	4.02 \leq	9.97 \leq	1.62 \leq	2.16 \leq	F2
SB4	N-88°-E	1間×4間	60.6	2.46	14.91	2.46	1.71	G2

※ 桁梁比率 = 桁行/梁行



第6図 宇都第3遺跡 掘立柱建物跡実測図1 (SB1・SB2, S=1/60)



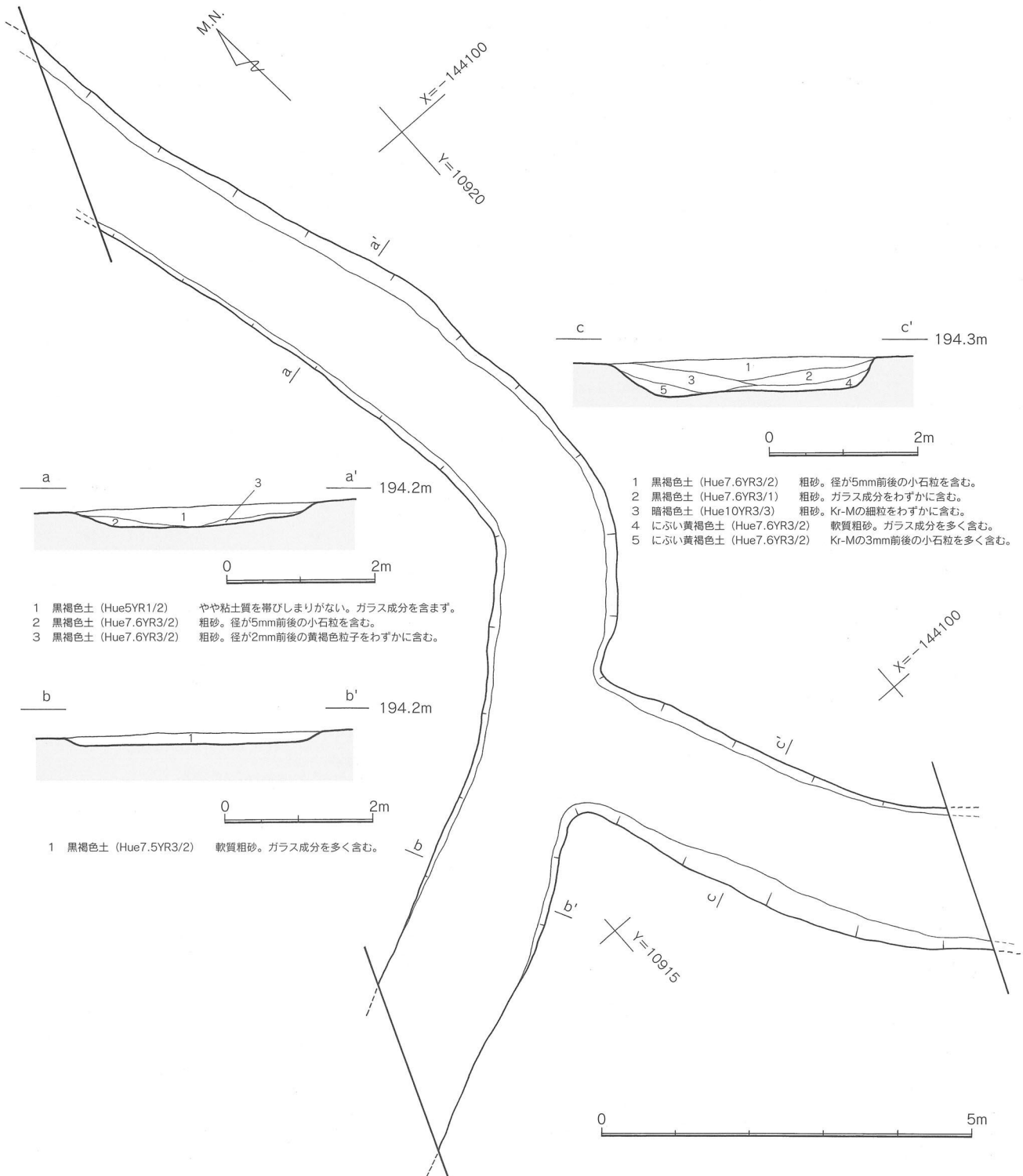
第7図 宇都第3遺跡 掘立柱建物跡実測図1 (SB3・SB4, S=1/60)

道状遺構 (SG, 第8図)

1号道状遺構 (SG1)

F4グリッドを中心に検出された遺構である。検出範囲の遺構の規模は総延長で約18.5mを測る。幅は平均して約1.4m程度で、側溝等の付帯施設は検出されなかった。遺構の底面では明瞭な硬化面がほぼ全面で確認されたが、カーブ付近では硬化面が内側に偏位する傾向が見られた。また、D3グリッドからE3グリッドにかけてほぼ直交するような形で約6mの1条の分岐が確認された。

遺構に伴う遺物は、底面直上で出土した黒色土器底部(78)と須恵器の細片のみである。

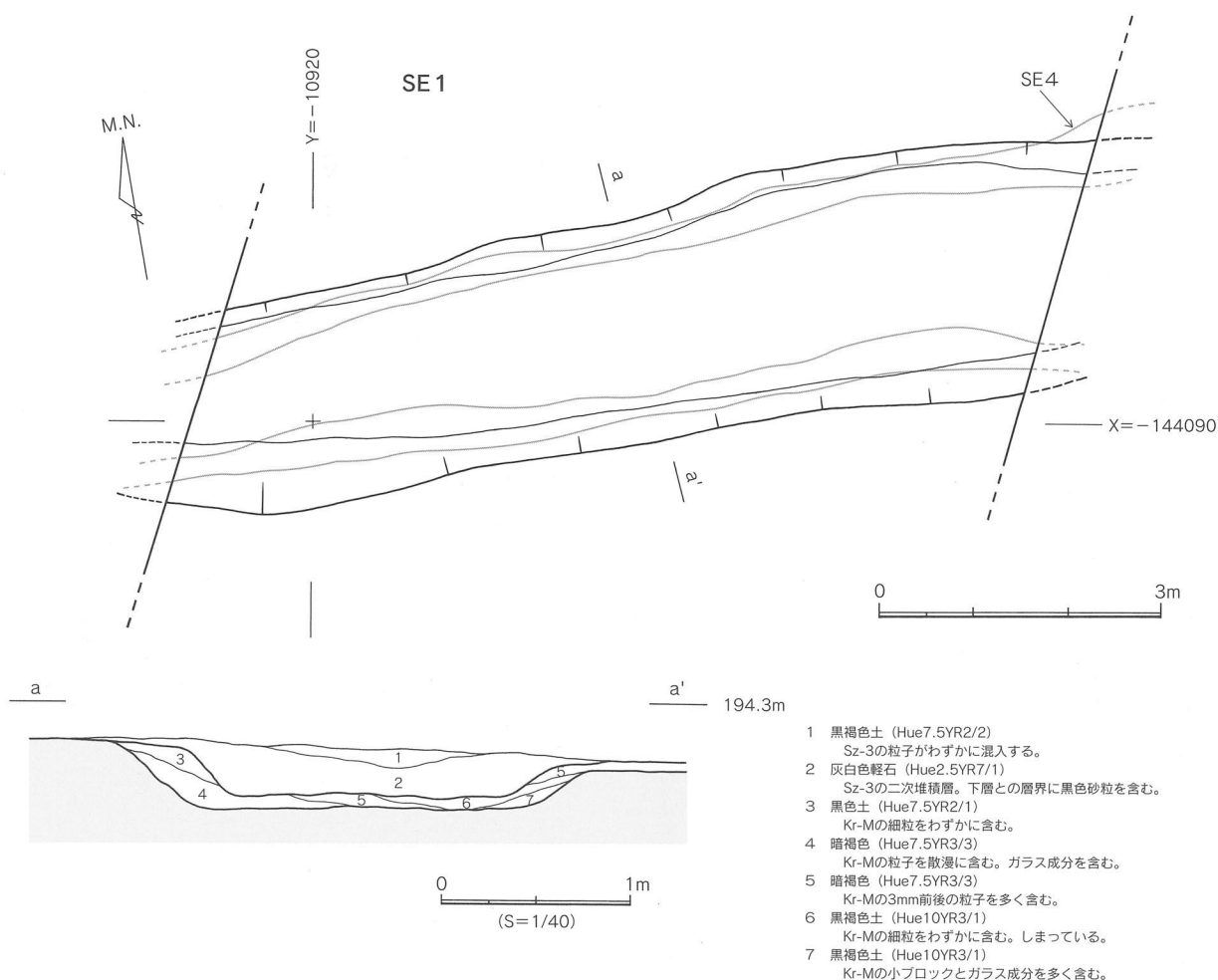


第8図 宇都第3遺跡 1号道状遺構実測図 (SG, S=1/80)

溝状遺構 (SE, 第9~11図)

1号溝状遺構 (SE 1, 第9図)

B 4グリッドを中心にして調査区を東西に横切る形で、15世紀末に降下した桜島文明軽石に埋没した中世の4号溝状遺構 (SE 4) の下から検出された。遺構は調査区の東側から西側に向かって緩やかに下っていく傾斜を有し、検出面からの計測値で上端幅約2.2~2.7m、最深部で約0.37mを測る。須恵器甕の細片が底面で確認されたことや、2号溝状遺構と同様の埋土をもつことから同時期の遺構と考えられる。霧島御池軽石の一次堆積層付近まで掘り込まれ、底面は凹凸が少ないおおむね平滑な面を呈しており、形状等から判断して道状遺構的な捉え方も一つの選択肢として考えられるが、側溝や硬化面などが確認できなかったため、現段階では溝状遺構と認定するに至った。



第9図 宇都第3遺跡 1号溝状遺構実測図

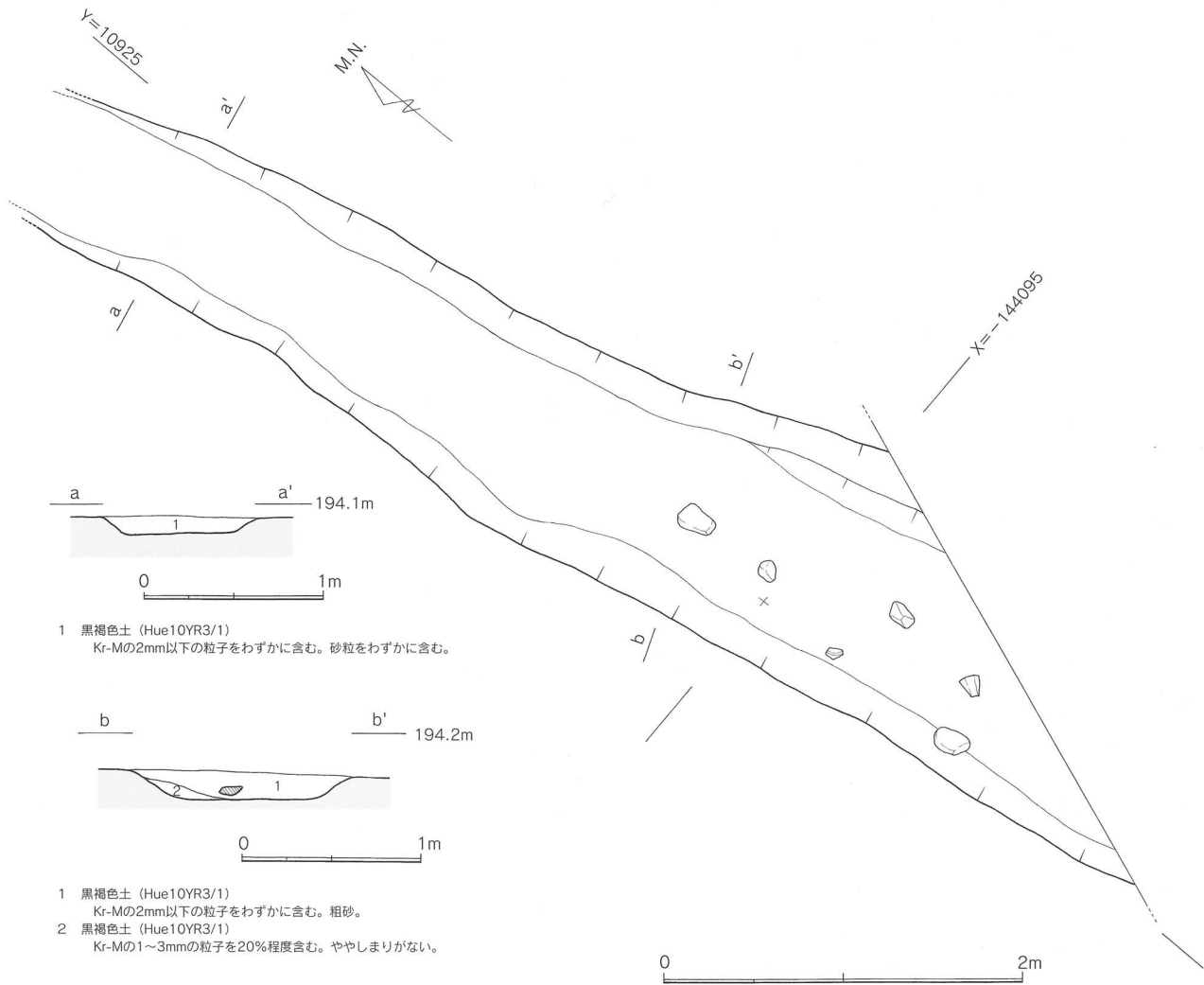
2号溝状遺構 (SE 2, 第10図)

C 4グリッドで検出された。遺構は北端部ではその形状がやや不明瞭となっていたが、中世の4号溝状遺構 (SE 4) の上端付近でわずかにその断面形状が確認できた。

遺構埋土は1号道状遺構と同じ黒褐色土であり、遺構内から出土した遺物からも時期的にほぼ並行するものであったと考えられる。遺構は調査区外に向い緩やかに低くなる傾斜を有していたことから、後

世の削平を受けて遺構の検出が不可能であった調査区北端部には、この遺構の延長部分が存在していたものと考えられる。

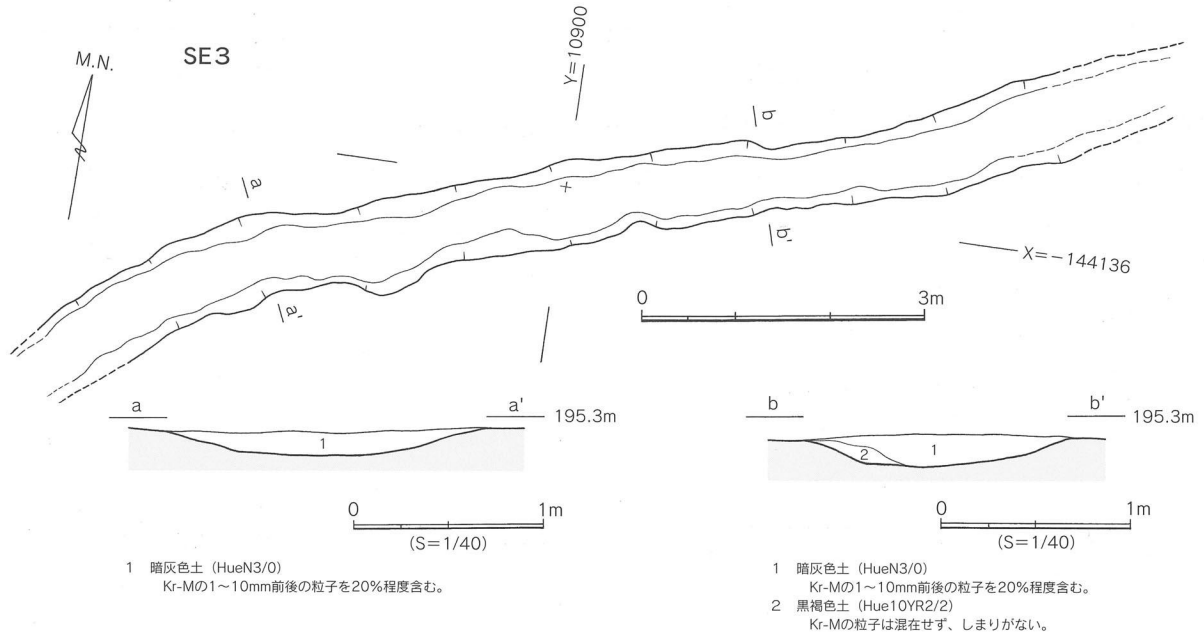
遺構に伴い第15図の黒色土器(76)が下端付近から1点出土した。高台付近の破片であり、内面のみに黒化処理が認められる。また、高台の内外に回転ナデによる丁寧な調整が認められる。



第10図 宇都第3遺跡 2号溝状遺構実測図

3号溝状遺構 (SE3, 第11図)

G1グリッドからG2グリッドにまたがり検出された遺構で、検出時にその両端部は不明瞭であった。検出した遺構は磁針方位でおおむねN-70°-Eの方位を保ち、総延長約12.5m、検出時の上端で最大幅約1.02mを測る。平均するとその幅は約0.87mである。また、検出面である第IV層の暗褐色土上面から最深部でも約0.15m程度とごく浅いことから、本来は第III層の黒色土中から掘り込まれ、確認された以上の深さを有していたことも考えられる。遺構の全体像は把握できないが、第5図に示すとおり等高線にほぼ直交することから、引水もしくは排水の目的で設けられた可能性も指摘できる。



第11図 宇都第3遺跡 3号溝状遺構実測図

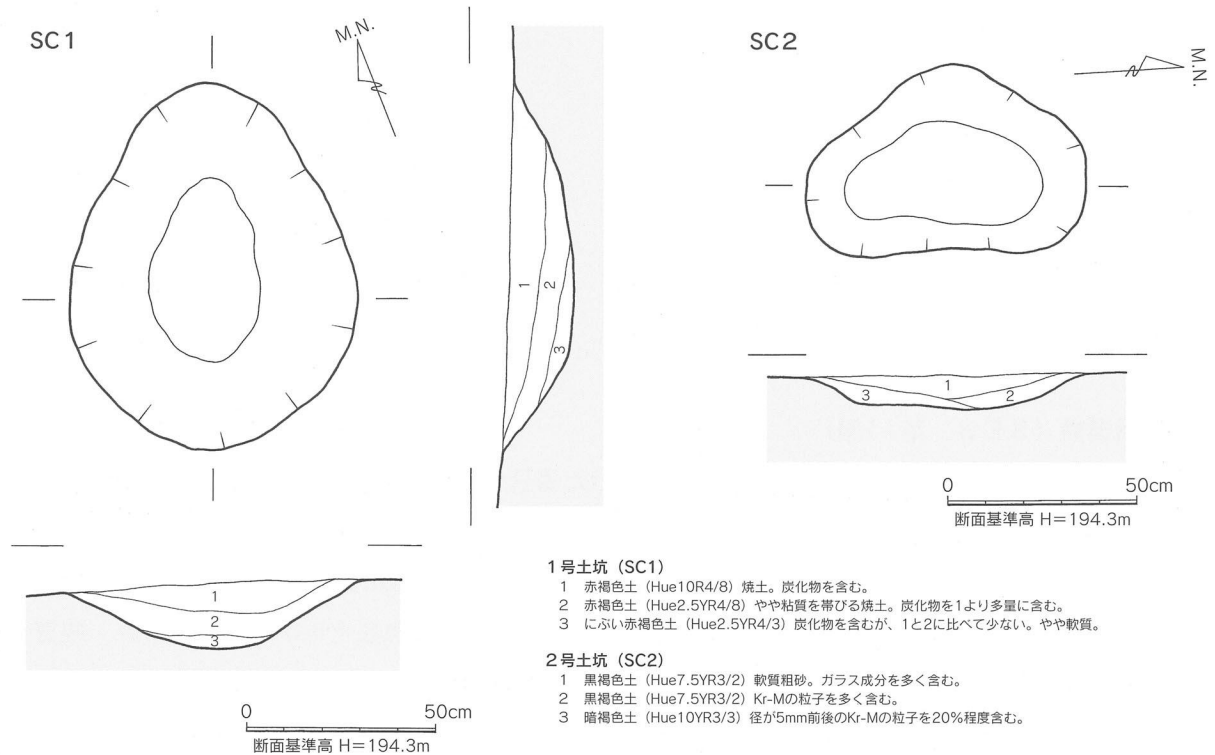
土坑

1号土坑 (第12図, SC1)

H4グリッドのSB2に隣接した位置で検出された土坑である。遺構は長軸約0.97m、短軸約0.76m、最深部で約0.2mを測る。埋土の大半は、炭化物や土師皿などの細片をわずかに含む焼土であった。遺構の性格は不明であるが、埋土の堆積状況から同遺構内で繰り返し火が使用されたことは確かである。

2号土坑 (第12図, SC2)

G4グリッドで検出された遺構で、長軸約0.74m、短軸約0.47m、最深部で約0.09mを測る。遺構内からの遺物等の出土はなく性格については不明である。



第12図 宇都第3遺跡 1号・2号土坑実測図 (SC1・SC2, S=1/20)

(2) 遺物

古代の遺物包含層は、基本層序における第Ⅲ層から第Ⅳ層であり、そのピークは第Ⅲ層中の下位から第Ⅳ層中の上位に存在する。出土した遺物は土師器・須恵器がその大半を占めるが、その他にも紡錘車や土錘などの土製品、鉄製の鎌などが出土した。また、1号道状遺構以南の多数のピット群を検出した範囲に遺物が集中して出土する傾向が見られた。出土した土師器及び須恵器を概観すると、食膳具としての土師器坏・土師器碗・須恵器坏、煮炊具としての土師器甕、貯蔵具としての須恵器甕が大半を占める。ここではそれら遺物を器形・調整などの特徴観察をもとに分類し若干の説明を加える。なお、個々の遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

土師器 (第13～17図, 1～114)

皿 (第13図, 1・2)

出土した遺物の中で皿の占める割合は極めて低い。1・2は坏としての類別も可能であるが、底部内面を広めに確保し、器高を抑えた直線的に外方に開く器形を有することからここでは皿として取り扱う。1は体部中位に緩やかな膨らみが認められる。底部はヘラ切り底となる。

坏 (第13～14図, 3～52)

出土した坏を、器形及び底部付近の処理などをもとにⅠ類からⅤ類に分類した。なお、底部はすべてヘラ切り底であり、切り離しのあとにその痕跡をナデ消したものなども認められた。

Ⅰ類 (3～15)

体部が外方に向かい直線的に開く器形を有する坏である。

3・4は底径に対して口径が小さいため、この類に属するほかの遺物に比べ、体部の直線的な立ち上がりが際立っている。5はやや尖り気味の口縁部に特徴がある。6は底部よりやや上位に緩やかな膨らみを有し外方に開き、口縁部はやや外反気味となる。7～11は口縁部から体部にかけての資料である。推定口径が小さく、角度を有して直線的に立ち上がることなど、この類の特徴が認められる。12～15は底部片である。12～14は底径が小さく小型の坏と考えられる。体部への立ち上がりや、外方への直線的な傾きが想定される特徴からこの類に属するものとした。

Ⅱ類 (16～30)

Ⅰ類と共通した外方に向かい直線的に開く器形を有するが、Ⅰ類と比べて器高が低く口径がやや大きめのものが目立つ。

16～20は体部外面に比較的明瞭な稜を有する。Ⅰ類と比べると体部の立ち上がりの角度がやや開き気味である。23～30はⅡ類の底部一括資料である。Ⅰ類とした底部(12～15)よりやや開き気味に立ち上がることから類別した。

Ⅲ類 (31～39)

体部下位で緩やかに膨らみ外方に開く器形を有する。また、底部から体部への変換点付近に弱い屈曲を有し円盤状の底部となる。

31は変換点付近の屈曲が特に顕著であり、内外の器面調整がとても丁寧である。32・33は口縁部が弱く外反する特徴をもつ。34～37にはすべて弱い外反が認められ、32・33のタイプの坏の口縁部に相当すると考えられる。38・39は同類の底部資料であるが、39は38に比べて変換点付近の屈曲の度合いがやや弱い。

IV類 (40~48)

体部下位に緩やかな膨らみをもち、外方に開く器形を有する。体部の器壁が比較的厚手であるのに対し、底部中央の器壁は薄手である。

40~42は丁寧な器面調整が内外に施される。底部外面はヘラ切り離しであるが、ヘラ切りの痕跡がナデにより丁寧に消され平滑に仕上げられている。42は体部外面に明瞭な稜が認められる。43~48は同類に属する口縁部 (43~45) 及び底部 (46~48) の資料である。

V類 (49~52)

底部側面が外方に向かい明瞭に張り出した円盤状の底部となることからⅢ類と類別される。

49・50は底部外面をナデ、側面を回転ナデにより調整しており円盤高台状の底部を意識して成形されたものと思われる。51・52は49・50に比べ円盤状の粘土塊の処理が曖昧であり、張り出した粘土塊の一部を体部に向かってナデ上げた痕跡も認められる。したがって、49・50のような意図的な成形によるものではないと考えられる。

高台付壺 (第15図, 53~78)

高台付壺は一定量が出土した。ここでは、高台の形状を基準としてⅠ類からⅧ類に分類した。

Ⅰ類 (53)

直線的に外方に開き、端部がやや丸味を帯びて肥厚する高台。

このタイプの高台をもつ壺はこの53のみであり、口径に対して底径が大きい。また、器高が低く、高台内には工具による放射状の圧痕が認められる。

Ⅱ類 (54~57)

端部がわずかに外反し、その内面が斜め上方に浮き加減となるやや高めの高台。

54・55は外方に向かい直線的に開く体部を有する。54は口縁部付近にわずかに外反が認められる。56は底部内面から体部への変換が緩やかであり、脚台付皿の可能性も考えられる。

Ⅲ類 (59・60)

Ⅱ類と比べるとやや低めであるが、端部が丸味を帯びるしっかりしたやや高めの高台。

59・60には、回転ナデによる調整が器表全体に施されている。60は高台の径が大きく、器壁も厚手であり、比較的大型の壺の底部と考えられる。

Ⅳ類 (61~64)

直線的に外方に開き、その端部がわずかに尖り気味になる高台。

61・62に比べ63・64は外方への開き方がやや弱い。62の高台内には53と近似した工具による放射状の圧痕が認められる。また、63・64の高台内にはヘラ切り離しの際の痕跡が明瞭に残る。

V類 (58・65・66)

Ⅳ類の特徴に加え、その断面形状に側面のわずかなふくらみが認められる高台。

同一個体ではないが、65・66は胎土及び調整が酷似している。高台側面の膨らみは意図的な作出、あるいは高台を貼り付ける際の成形段階で偶然に生じた両方の可能性が考えられる。

なお、58は底部が存在しないが、黒色土器の壺である74と外器面の調整と胎土の特徴が類似していることからここではこの類に属するものとする。

VI類 (67)

外方には開かず、やや幅広で低い高台。

器表面には回転ナデによるやや粗めの調整痕が認められる。端部の接地面にはヨコナデが見られるが、全体的に風化が進んでいる。

VII類 (68~70)

外方に開き、その端部に明瞭な稜をもつ低い高台。

68・69は器表面の風化が著しいが、高台内面まで丁寧な調整が施されている。70は器表の内外面に煤が付着しており、被熱の痕跡が認められる。

VIII類 (71~73)

外方に開き、その端部が丸味を帯びる低い高台。

71は高台内面及び底部内面の成形が粗い。72はIV類に類似する高台であるが、明瞭な稜が端部に確認できることからこの類に属するものとした。73の端部の接地面はやや幅広であり、風化で判別しづらいがヨコナデで丁寧に調整されていたと考えられる。

墨書土器 (第13図, 20)

20の坏には墨書による「𠂔」の文字が認められた。「十」と「万」を密着させた合わせ文字であり、体部に正位で書かれている。

甕 (第16~17図, 79~106)

甕の出土数は坏について多い。また、確認された遺物は比較的大きな破片が多く、器表面には煤が多量に付着しているものが数多く認められた。

出土した甕を、口縁部及び胴部の特徴をもとにI類からVII類に分類した。

I類 (79~83)

79~83はほぼ直線的な胴部を有し、曖昧な頸部から直線的に開く短い口縁部をもつ。これらはすべて最大径を口縁部にもつものの胴部最大径と比べてさほど大差はないと考えられる。

II類 (84・85)

小型で、張り出した胴部の中位に最大径をもち、明瞭な頸部を有するもの。

84・85は口径が16cm前後で、ほぼ同じ大きさの個体である。確認された小型の甕はこの2点のみであるが、他の個体と比べ煤の付着が著しい。

III類 (86・87)

86・87には外器面に丁寧なナデが施される。また、内器面にはケズリの痕跡が認められるが風化が著しく判然としない。86の内器面には胴部から口縁部への変換点に明瞭な稜が認められる。

87は胴部下位に緩やかな膨らみをもつ。

IV類 (88~95)

やや開き気味の口縁部を有し、III類と比べ胴部の張り出しが明瞭であるもの。

88・89はヨコナデによる平滑な口唇端部をもち、胴部上位に横方向のハケメが周回する。90の内器面には胴部から口縁部への変換点に明瞭な稜が認められ、胴部内面の上位には斜方向のヘラケズリによる調整が施される。変換点の明瞭な稜は91~93にも認められる。

V類 (96~98)

球状に丸く張り出した胴部を特徴とし、明瞭な頸部をもつもの。

96~98は外器面の頸部付近から下に縦方向のハケメを施す。内器面の調整は97・98は斜方向のヘラケズリによる調整が施される。96にはケズリの調整痕はなく指おさえが認められる。

VI類 (99~104)

外反傾向が強く、水平方向に開く口縁部をもつもの。

この類に属する個体には、比較的大型のものや胎土の粗いものが目立つ。また、胴部の張り出しは口縁部の最大径以下に収まるものと考えられる。99・100の外器面には胴部上位に縦方向のハケメ、内器面の上位には斜方向のヘラケズリの調整痕が見られる。101・102の胴部は上位と下位に2箇所の変換点を有するが最大径は下位にある。103・104は外器面はヨコナデにより丁寧な調整が施されている。

VII類 (105・106)

器表面に格子目タタキの調整痕が認められるもの。

105・106は調整及び胎土の特徴から同一個体の可能性が考えられる。105の個体から考えて胴部が頸部から大きく張り出した球形に近い形状を呈する器形になると考えられる。内器面はナデによる調整が施され、当て具痕は確認できない。

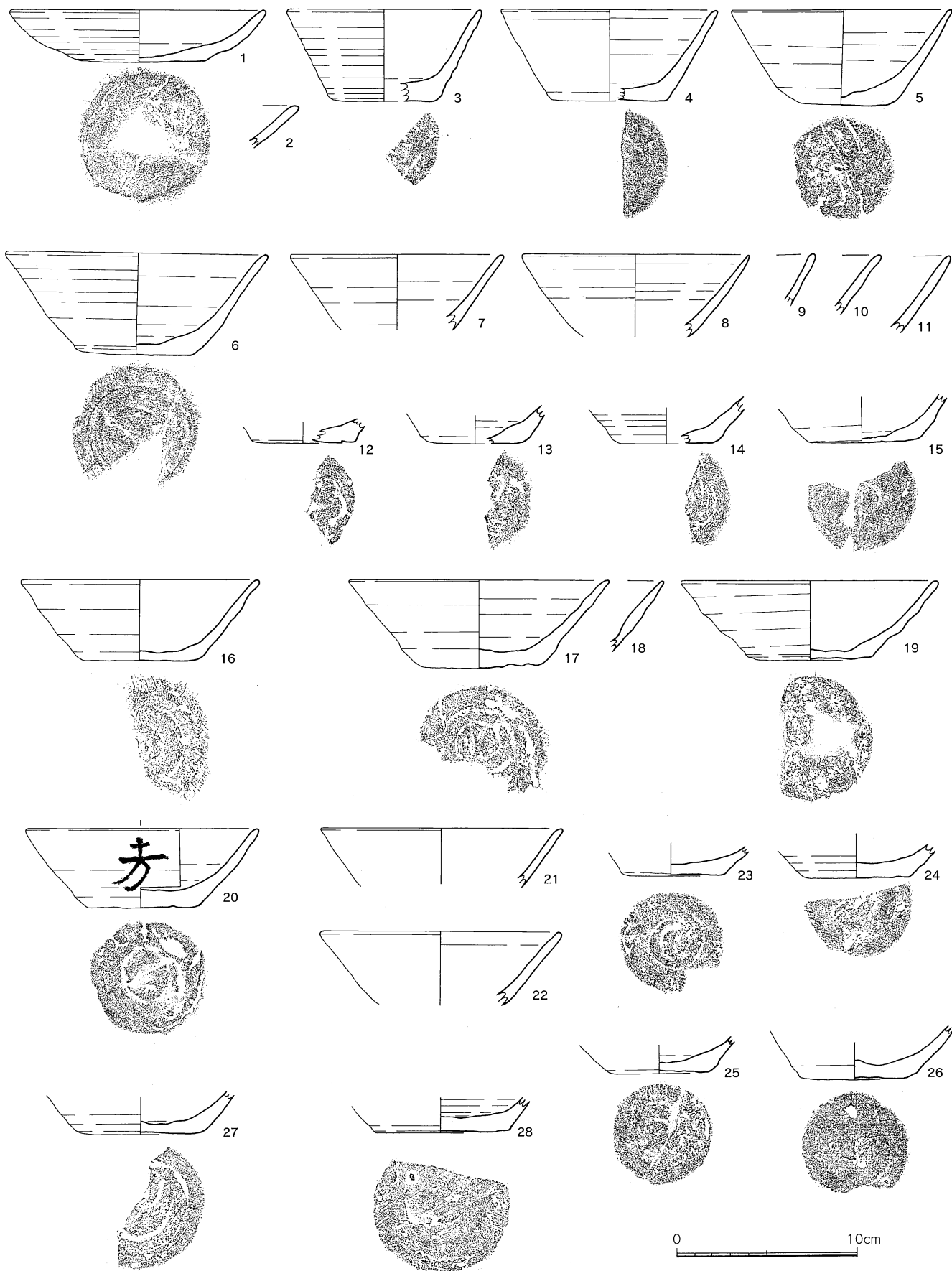
黒色土器 (第15図, 74~78)

黒色土器は5点出土した。いずれも内面のみに黒化処理を施している。

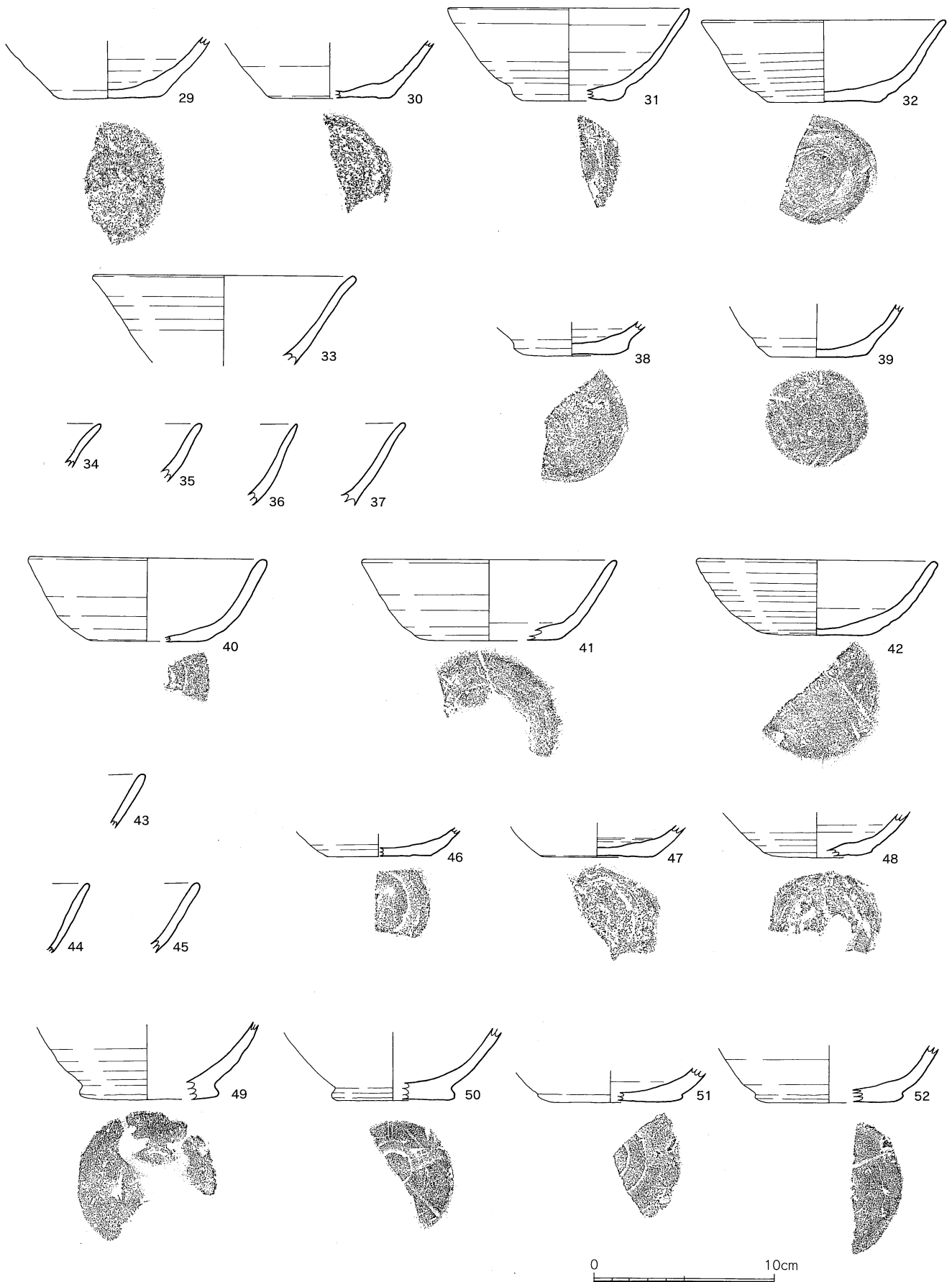
74は体部中位でわずかに膨らむもののほぼ直線的に外方に向かい開く器形を有する。高台はその側面にわずかな膨らみが認められるV類の特徴をもつ。75はやや厚手の器壁を有する口縁部から体部中位付近の破片であり、口縁部付近ではわずかに外反傾向が認められる。58の個体と調整が近似している。76~78は底部片で、高台付塊の分類を適用すれば、76がIV類、77がV類、78がVIII類に相当する。

布痕土器 (第17図, 107~114)

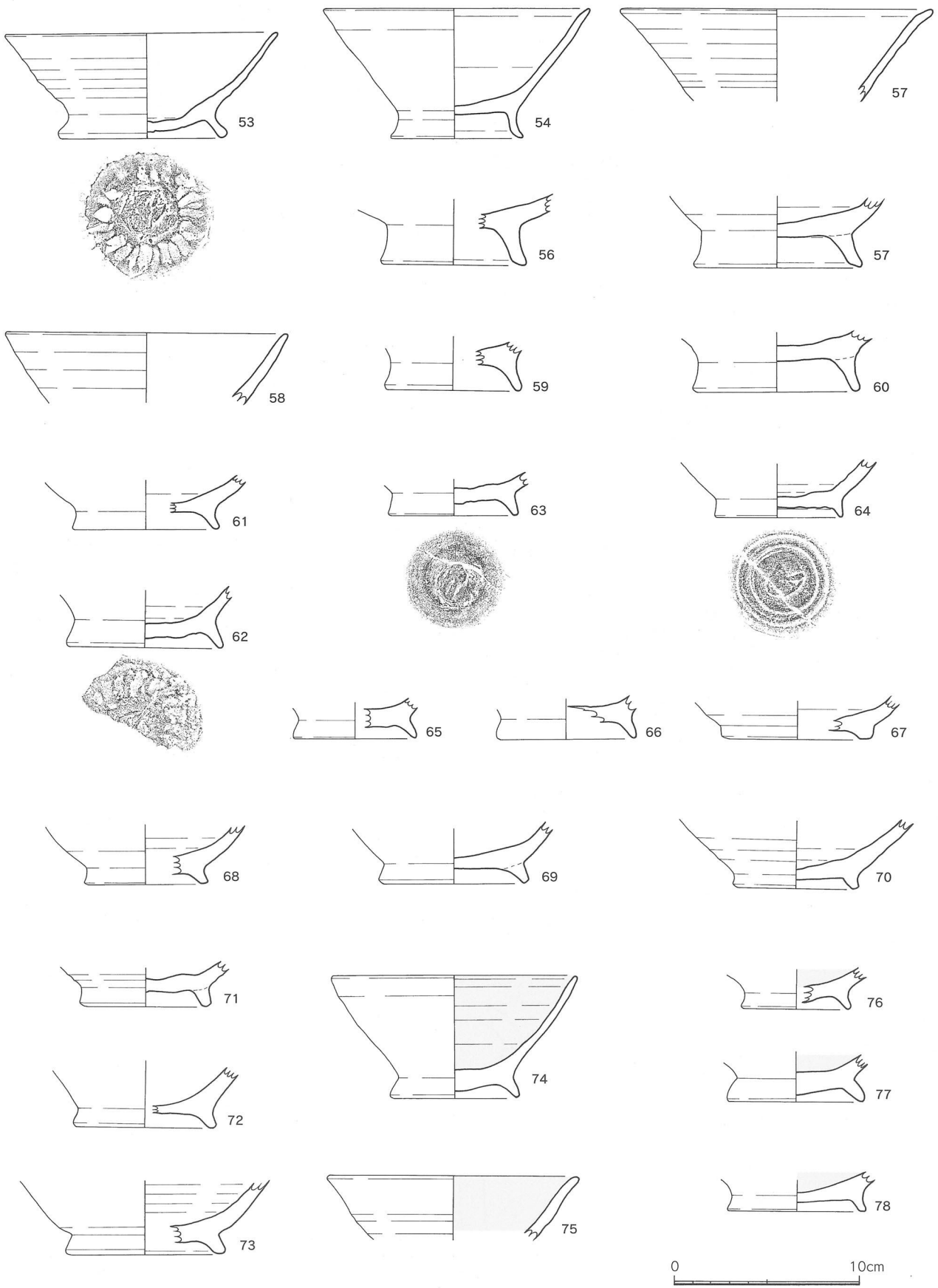
布痕土器はG2グリッド付近で集中的に出土した。型作りによる軟焼成の非常に脆い土器であるため、細片での出土が多かった。器面の調整は、外器面に指おさへの痕が残り、口縁部をヘラ等の工具でそぎ落としたものが大半である。このような粗い口縁部の処理と、内器面に見られる型離れを容易にするために布を使用した痕跡は量産を意図した作業工程を示すものと考えられる。



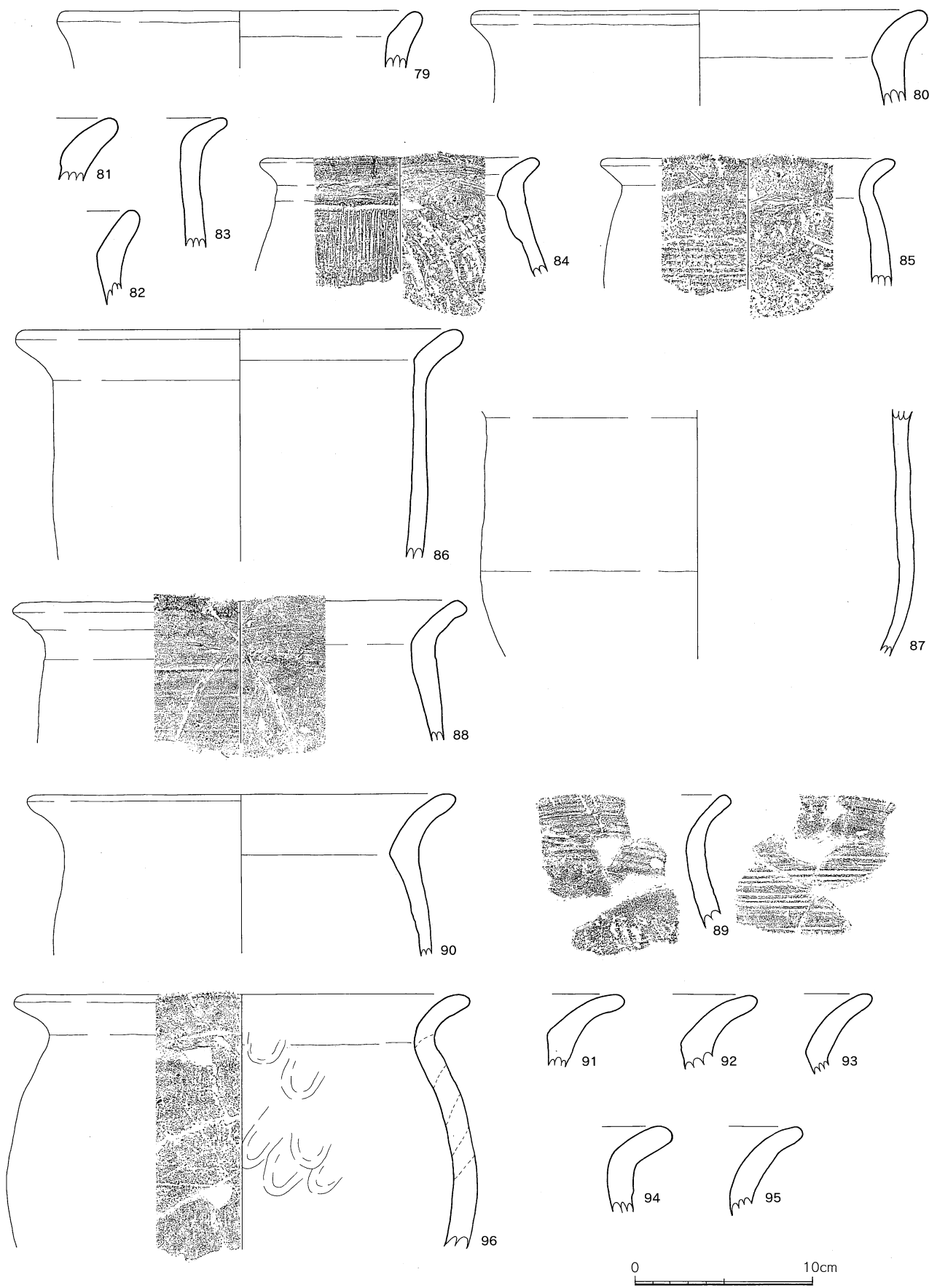
第13図 宇都第3遺跡 出土遺物実測図1 (土師器 皿・坏, S=1/3)



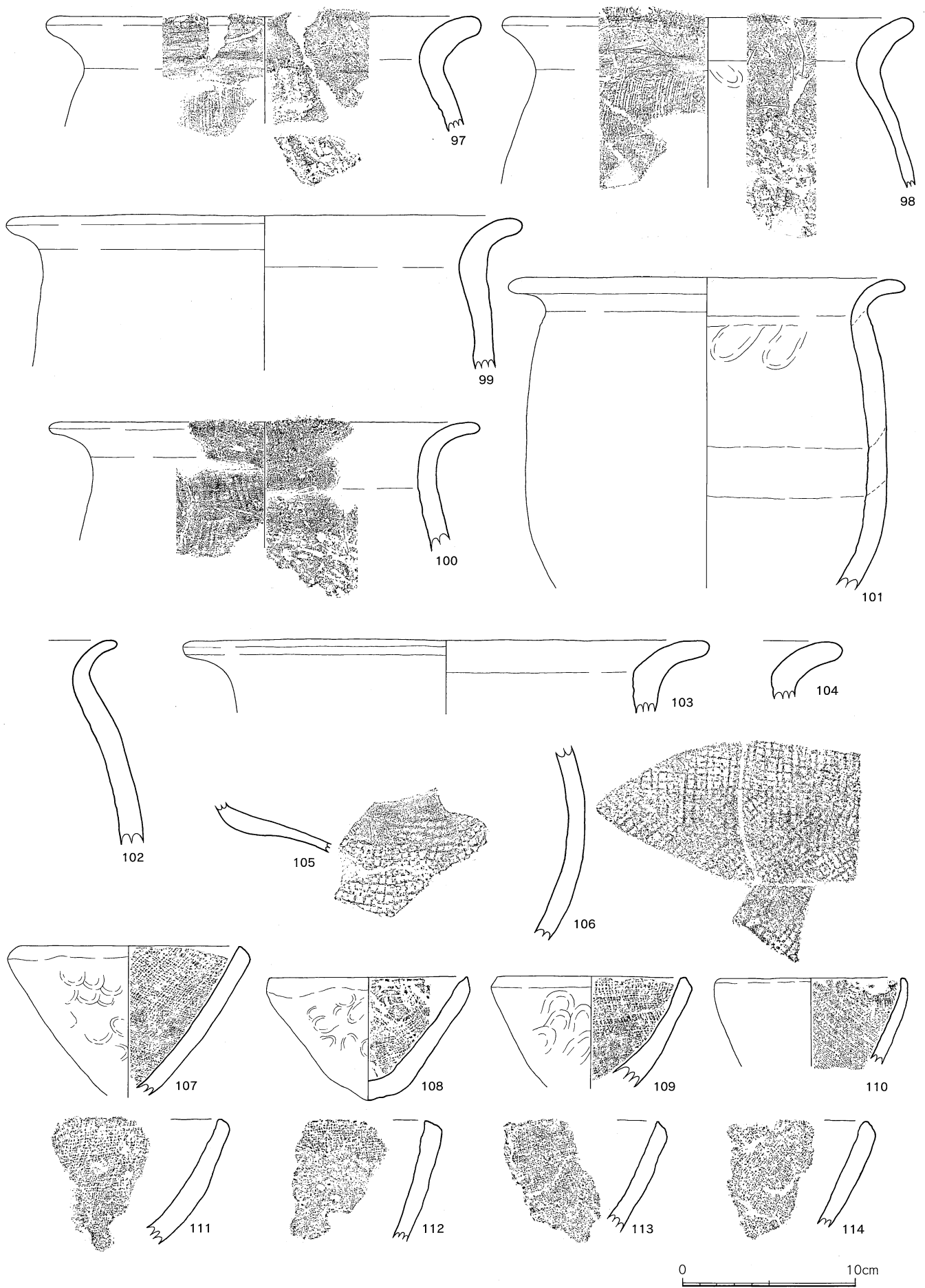
第14図 宇都第3遺跡 出土遺物実測図2 (土師器 皿・坏, S=1/3)



第15図 宇都第3遺跡 出土遺物実測図3 (土師器 高台付埴・黒色土器, S=1/3)



第16图 宇都第3遺跡 出土遺物実測図4 (土師器 甕, S=1/3)



第17図 宇都第3遺跡 出土遺物実測図5 (土師器 甕・布痕土器, S=1/3)

須恵器 (第18・19図, 115~142)

坏 (第18図, 115~121)

115~117は体部にわずかな膨らみをもちながら外方に向かい開く器形を有する。116の底部はヘラ切りのあとにナデが施される。118は底部から体部への変換点が曖昧で、丸味を帯びながら緩やかに立ち上がる。口縁端部は外反し、端反碗様の器形を呈する。119は口径の大きさに対して器高が低い。底部内面に自然釉の釉溜まりが見られる。120・121は坏の底部である。

高台付壙 (第18図, 122・123)

122は外方に向かいやや立ち気味に直線的に開く体部を有する。高台側面には回転ナデによる丁寧な調整が施される。また、底部内面にはヘラ切りの痕が顕著に残る。123は口縁部から体部下位付近にかけての破片である。122と同じく外方に向かって直線的に開く体部である。

甕 (第18・19図, 124~132)

須恵器の中で最も多く確認された器種である。球状に張り出した胴部と頸部から外反する短い口縁部が特徴である。確認できた底部片は132が1点のみであるが、わずかに平坦面をもつ緩やかなレンズ状を呈しており、大半は同様の底部を有するものと考えられる。口縁部の特徴及び器面調整に見られる工具痕の相違などをもとにⅠ類からⅢ類に分類した。

Ⅰ類 (124・125)

外器面に格子目タタキによる調整、内器面にはナデの調整が認められるもの。

内器面には当て具痕が認められず、口縁部から頸部内面付近にかけてヨコナデ、それ以下にナデが施されている。内器面の調整は当て具痕を消すためのものと考えられる。また、短くわずかに外方に開く口縁部もこの類の特徴である。

Ⅱ類 (126~129)

外器面に格子目タタキによる調整、内器面に当て具痕及びナデの調整が認められるもの。

126の内器面にはナデが施されるが、一部に放射状の当て具痕と考えられる痕跡が残る。また、ヨコナデが施された頸部内面付近より下には指おさえも認められる。127の内器面には工具ナデの上に同心円文の弱い当て具痕が散漫に残る。129の外面に残る格子目タタキ痕は126・127と比べてその目が小さい。内器面には同心円当て具による青海波文が残る。

Ⅲ類 (130~132)

外器面に平行タタキによる調整、内器面に当て具痕及びナデの調整が認められるもの。

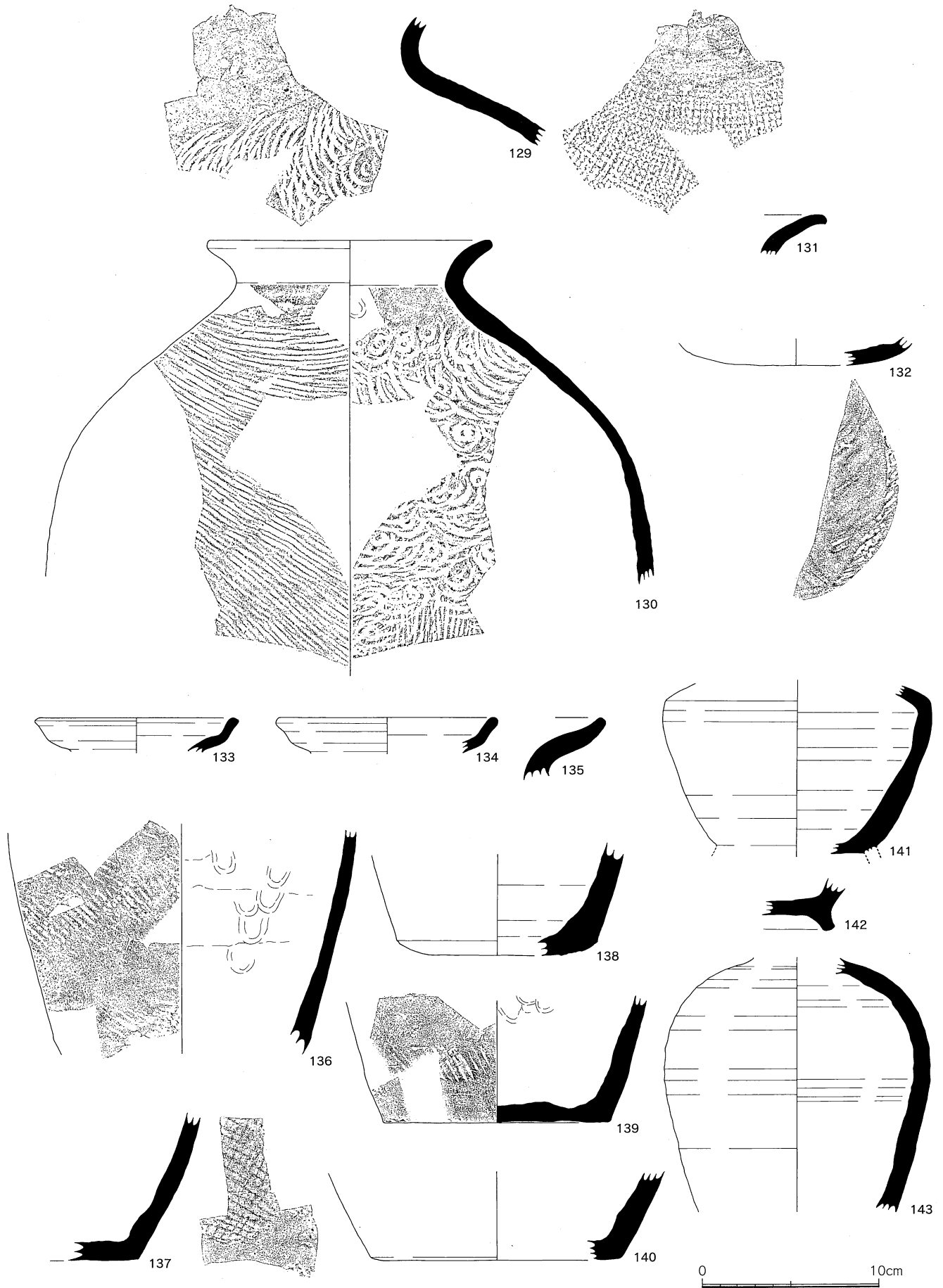
130の外器面には平行タタキによる調整が密に施され、自然釉により浅黄色を呈する。内器面には129と同様に同心円当て具による青海波文が明瞭に残る。焼成前に胎土中の空気を十分に抜かなかったことが原因と考えられる亀裂や膨張の痕が数多く認められる。

壺 (第19図, 133~143)

133から135は壺の口縁部である。133・134はほぼ同じ大きさの口径を有する。135は前者に比べやや大きめの個体である。焼成が甘く、器表面の風化が見られる。136から140は壺の胴部及び底部である。胴部の外器面には格子目タタキ痕及び平行タタキ痕が見られるが、内器面に当て具痕をもつ個体は確認できない。141は肩部の明瞭な稜に特徴がある。143は胴部上位に最大径をもち、頸部の径は小さい。141・142は長頸壺、143は水瓶の可能性も考えられる。



第18図 宇都第3遺跡 出土遺物実測図6 (須恵器 坏・高台付碗・甕, S=1/3)



第19図 宇都第3遺跡 出土遺物実測図7 (須恵器 甕・壺, S=1/3)

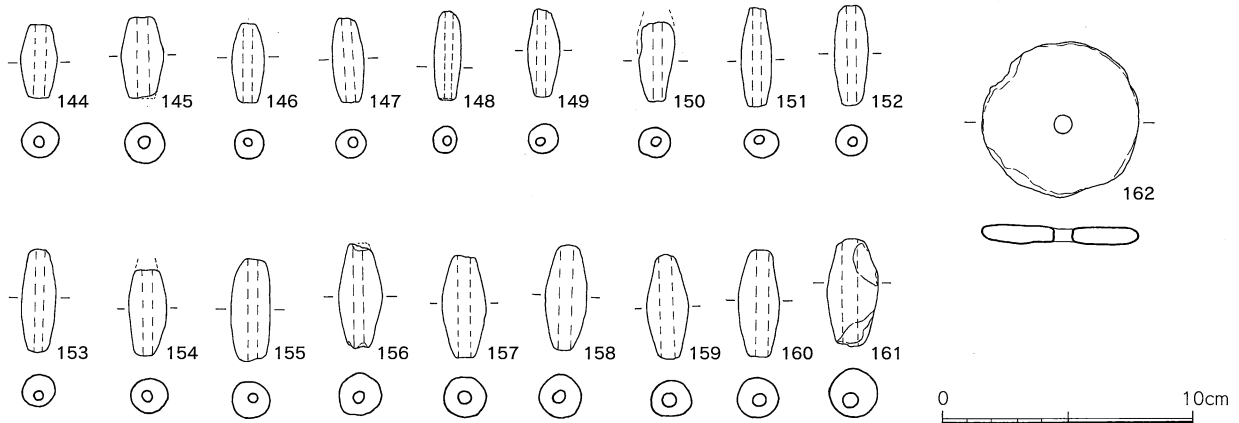
土製品 (第20図, 144~162)

土錘 (第20図, 144~161)

土錘は15点出土したが、ここでは表面採集で確認した3点を加え18点を図化した。端部等に欠損が認められた5点を除く13点の個体から算出した法量の平均は、長さ約3.77cm、幅約1.54cm、重量約6.98gである。また、長さとの比率(長さ/幅)は平均値で約2.5である。

紡錘車 (第20図, 162)

162は紡錘車である。最大径約6.26cm、最大厚約0.85cm、重量約32.1gを計る。側縁部の欠損が目立つ。中心には径が約0.71cmの焼成前の穿孔が認められる。



第20図 宇都第3遺跡 出土遺物実測図8 (土製品, S=1/3)

第2表 宇都第3遺跡 土錘計測表

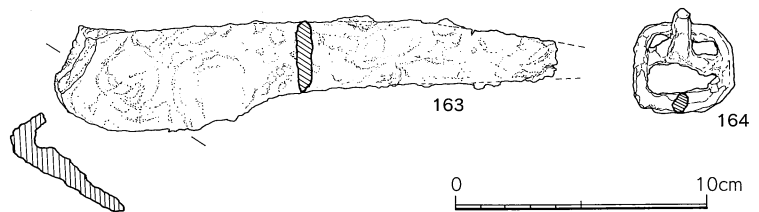
遺物番号	出土層位	法 量			備 考
		最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)	
144	Ⅲ層	2.95	1.55	5.0	
145	Ⅳ層	3.15	1.80	6.2	
146	Ⅳ層	3.20	1.25	4.2	
147	Ⅲ層	3.35	1.25	4.5	
148	Ⅳ層	3.40	1.50	6.5	約1/5欠損
149	Ⅲ層	3.50	1.25	4.5	端部欠損
150	Ⅲ層	3.50	1.05	4.1	
151	Ⅳ層	3.90	1.35	5.5	
152	Ⅲ層	3.95	1.45	5.2	
153	表採	4.10	1.80	9.4	
154	表採	4.10	1.65	8.5	
155	Ⅳ層	4.10	1.40	6.3	
156	Ⅲ層	4.15	1.75	10.3	両端部欠損
157	Ⅳ層	4.20	1.70	10.1	
158	表採	4.20	1.70	9.2	端部欠損
159	Ⅳ層	4.20	1.35	4.5	約1/4欠損
160	Ⅳ層	4.25	2.05	12.9	
161	Ⅲ層	4.25	1.65	8.8	

金属製品 (第21図, 163・164)

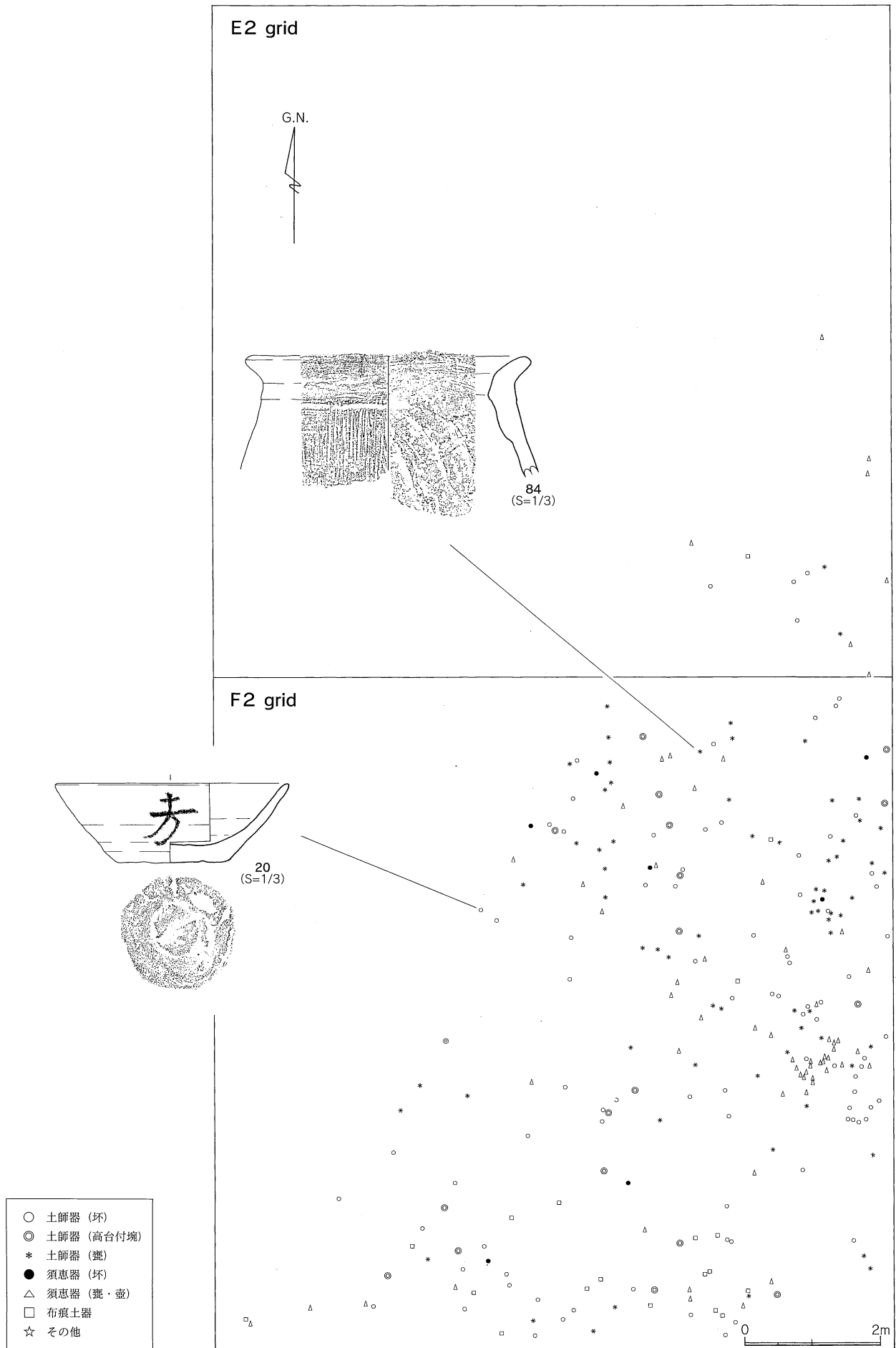
163は鉄製の鎌である。先端部及び基部が欠損している。残存長は約19.8cm、刃元幅約3.9cm、棟厚は刃元付近で約0.5cmを計る。

先端に向かい内湾しながら刃幅が細くなり、基部は柄を装着するための折り返しをもつ。

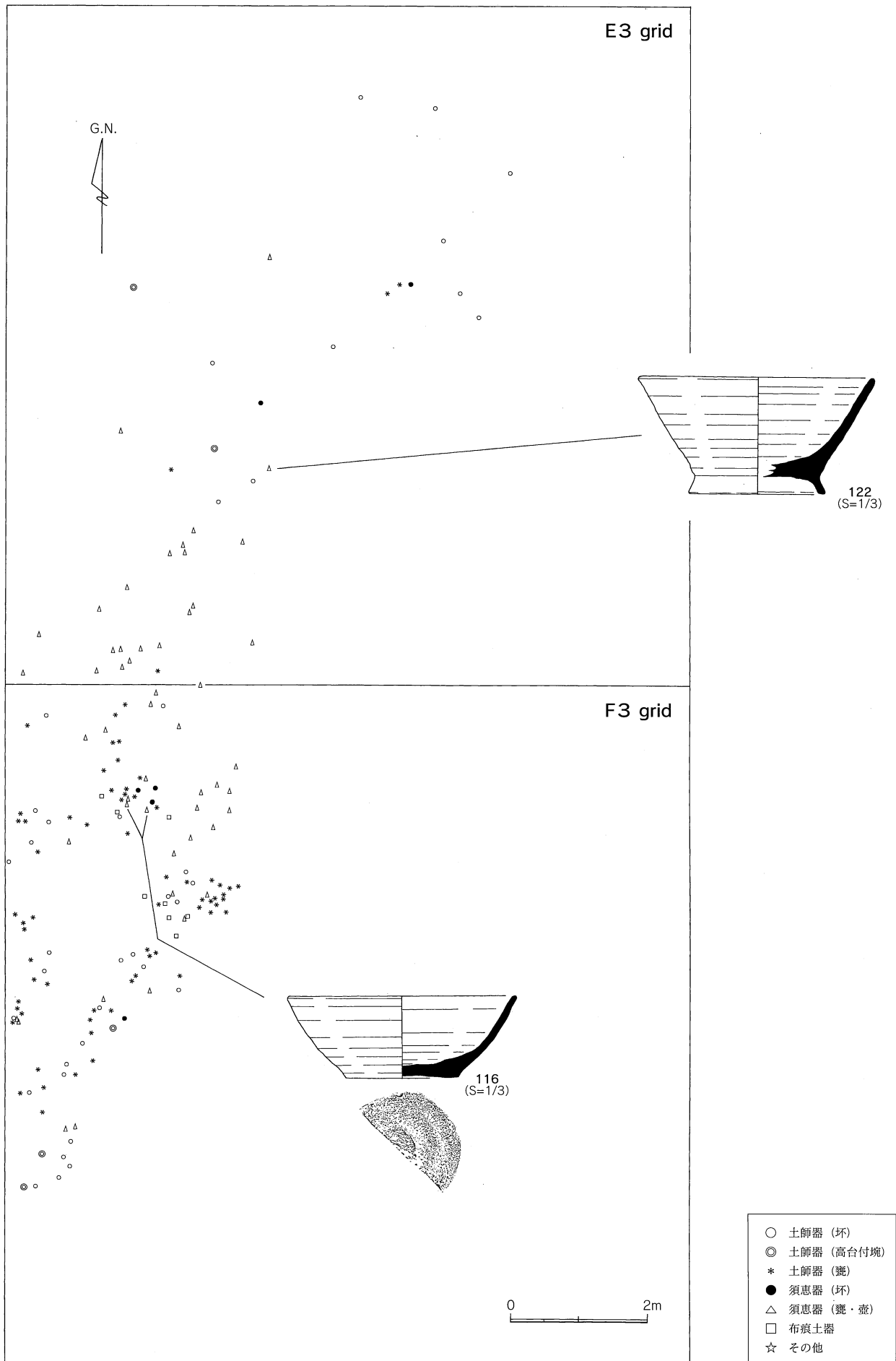
164は鉄製の帯金具である。最大幅約3.98cm、重量約16.5gを計る。全体に錆が生じ腐食が進んでいる。



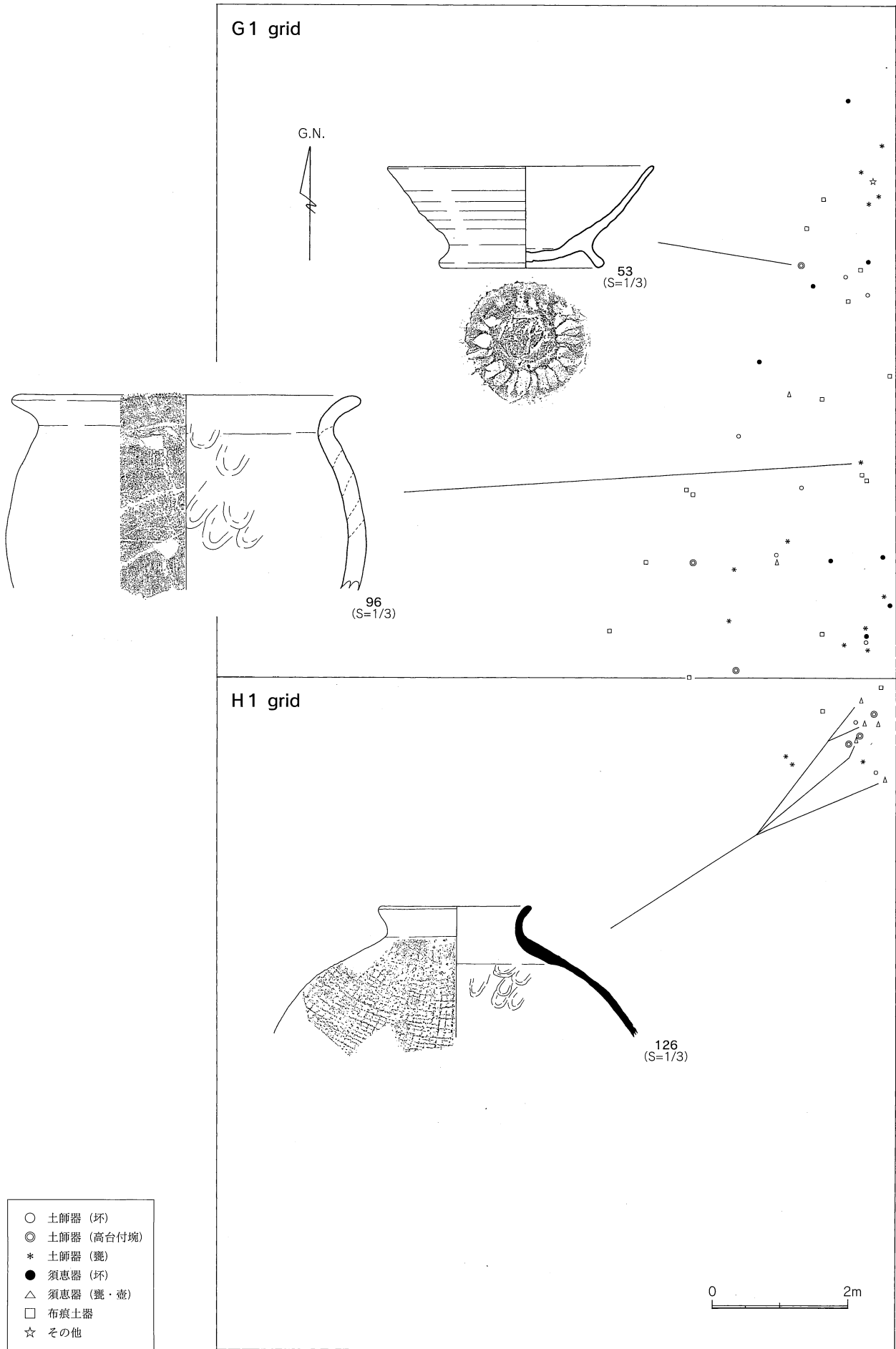
第21図 宇都第3遺跡 出土遺物実測図9 (金属製品, S=1/3)



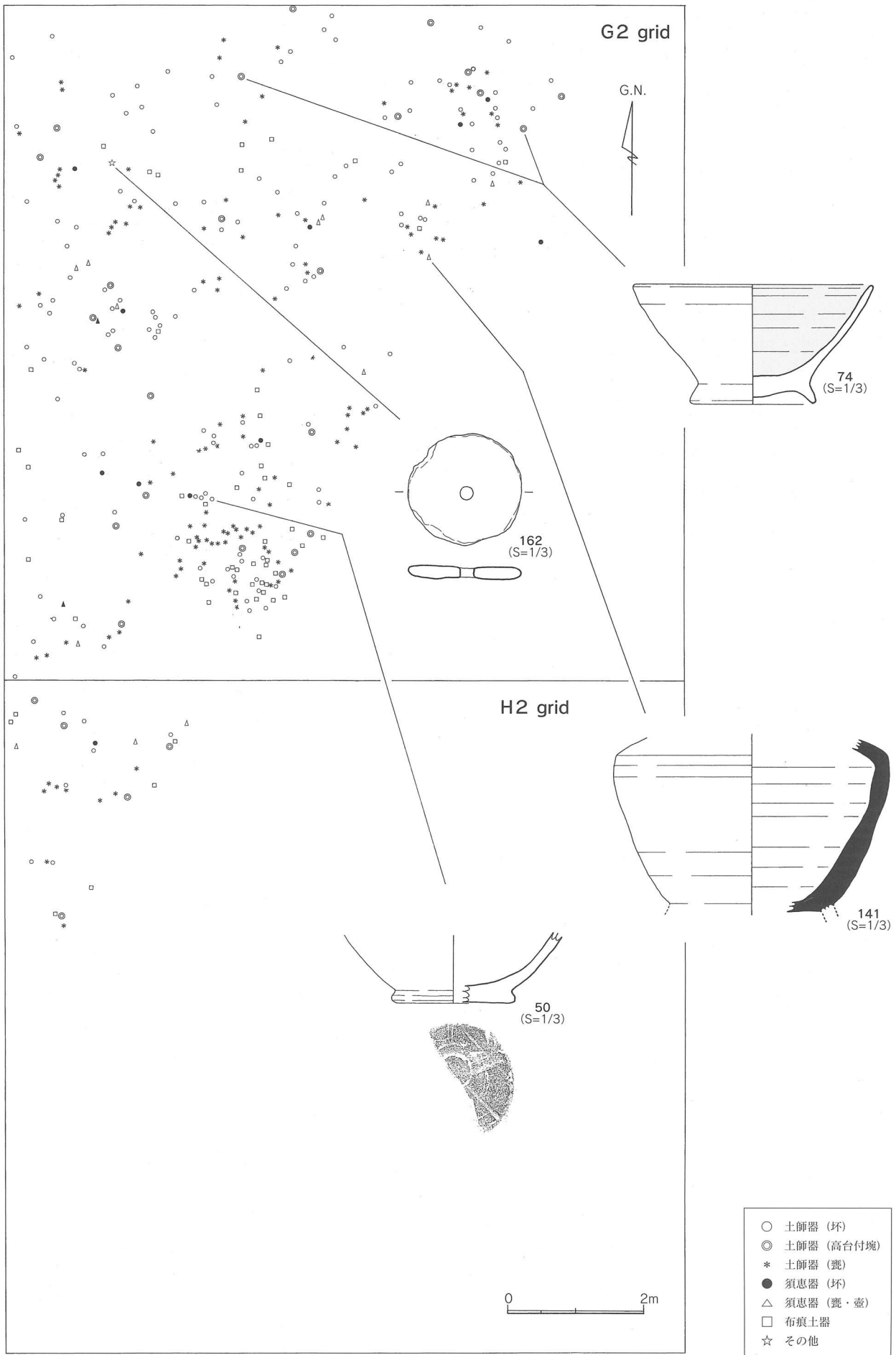
第22図 宇都第3遺跡 遺物分布図1 (古代, E2・F2グリッド, S=1/40)



第23図 宇都第3遺跡 遺物分布図2 (古代, E3・F3グリッド, S=1/40)



第24図 宇都第3遺跡 遺物分布図3 (古代, G1・H1グリッド, S=1/40)



第23図 宇都第3遺跡 遺物分布図4 (古代, G2・H2グリッド, S=1/40)

2 その他の時代の遺構と遺物

宇都第3遺跡では古代の遺構・遺物のほかに、弥生時代・古墳時代の遺物と中世の遺構・遺物が確認された。本節では、それらについて時代ごとに若干の説明を加える。

弥生時代の遺物

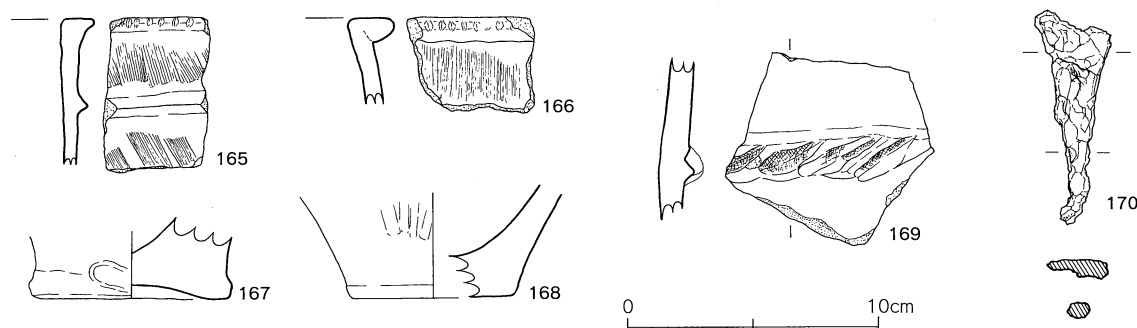
弥生土器 (第26図, 165~168)

C4グリッドの第IV層中の下位で弥生土器が数点出土した。165~168は甕である。突帯状に肥厚させた165の口縁部には刻目が施され、その下3cmほどの所に1条の貼付無刻目突帯が巡る。外器面には単位が判然としない密なハケメが施される。内器面はナデによる調整であり、口唇部は水平となる。166は粘土をL字状に折り返して作られた口縁部をもち、その端部に刻目が施される。口唇部は165と同じく水平となる。167・168は底部片である。167は弱い上げ底を呈する。168は胴部下位に縦位のナデが認められる。

古墳時代の遺物

土師器・鉄鏃 (第26図, 169・170)

169は甕の頸部付近の破片であり、貼付突帯には斜位の押圧刻目が施される。刻目には施文の際に用いた棒状の工具に巻いていた布の繊維痕が明瞭に残る。5世紀前半に位置付けられる。170は方頭鏃である。残存長約8.55cm、最大幅約3.05cm、重量約19.7gを計る。



第26図 宇都第3遺跡 出土遺物実測図 (弥生時代・古墳時代, S=1/3)

中世の遺構と遺物

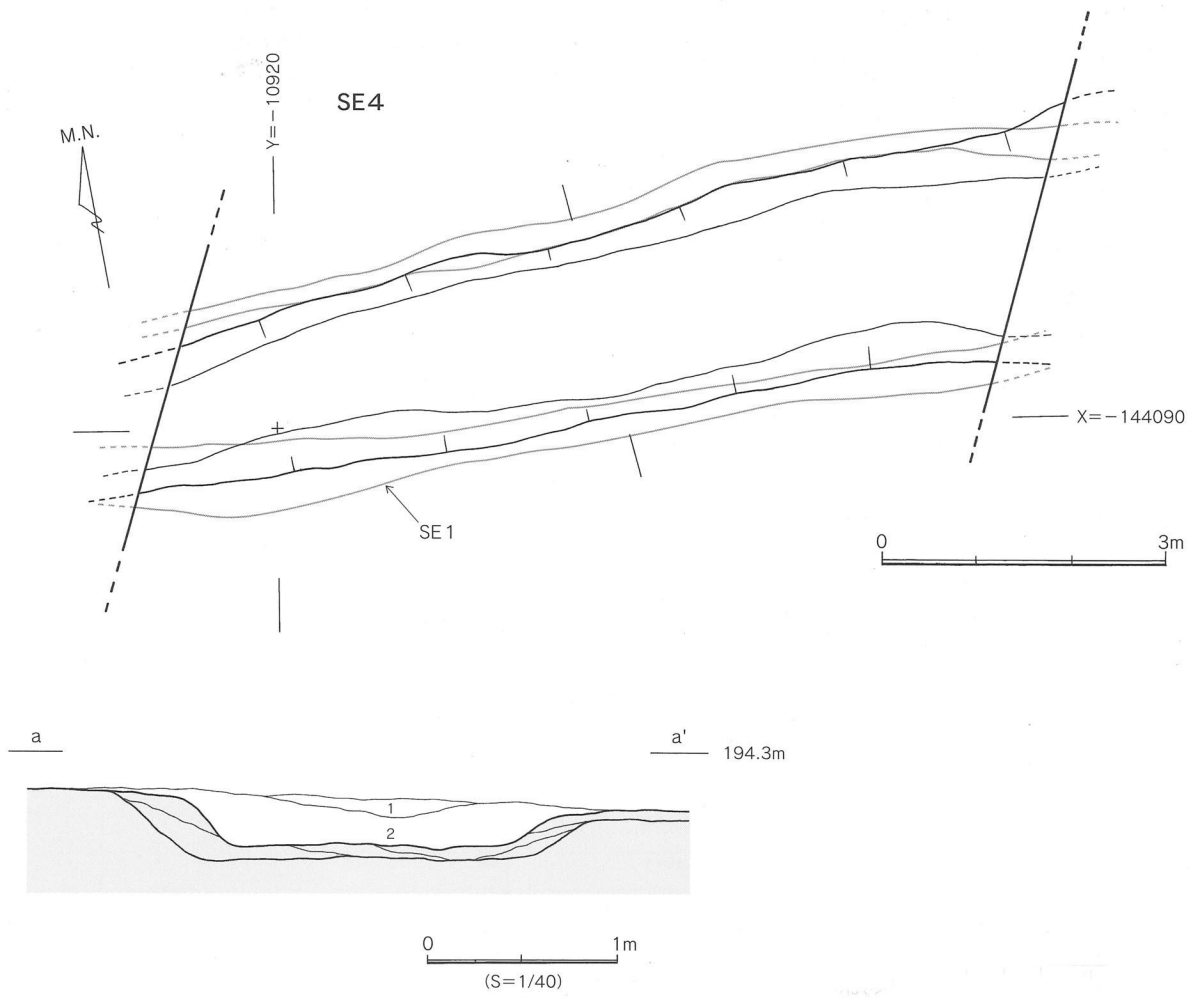
中世の遺構・遺物は、溝状遺構1条と陶磁器類がわずかに確認されたのみである。また、遺物の出土レベルは層位的には第III層上位に限られていた。

(1) 遺構

4号溝状遺構 (SE4, 第27図)

古代の1号溝状遺構(SE1)の埋土に掘り込まれた遺構で、東側から西側に向かってSE1と同様に緩やかに下っていく傾斜を有する。遺構は検出範囲で上端幅約1.5~2.4m、最深部で約0.28mを測り、東側から西側に向かってその幅が徐々に狭くなっていた。また、埋土の観察では桜島文明軽石が上端をやや上回るレベルまで堆積した様子が確認できた。

なお、遺構に伴う遺物は出土していないが、桜島文明軽石の降下年代から15世紀末にその機能を停止したものと考えられる。



a~a'

1 黒褐色土 (Hue7.5YR2/2) 桜島文明軽石 (Sz-3) の粒子がわずかに混入する。
 2 灰白色軽石 (Hue2.5YR7/1) Sz-3の一次堆積層。下層との層界に黒色砂粒を含む。

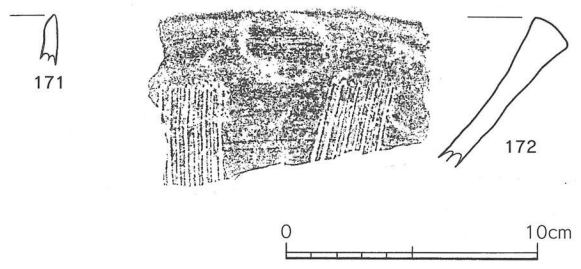
第27図 宇都第3遺跡 出土遺物実測図 (弥生時代・古墳時代, S=1/3)

(2) 遺物

陶磁器 (第28図, 171・172)

171は天目茶碗の口縁部である。口縁端部が鋭角的に尖る。15世紀代の古瀬戸後期の遺物と考えられる。

172は備前焼の挿鉢である。口縁部の肥厚帯は発達せず、端部を外方に向かいやや斜め下がりに作り出している。内器面には8条を一単位とする条線が施される。14世紀後半に位置付けられる遺物と考えられる。



第28図 宇都第3遺跡 出土遺物実測図11 (中世, S=1/3)

第3表 宇都第3遺跡 出土遺物観察表 1

遺物番号	種別	器種・部位	層位位置	法量(cm)			外面		内面		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
1	土師器	皿 口縁部～底部	Ⅲ層	13.9	7.1	2.9	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の茶褐色・灰色粒			
2	土師器	杯 口縁部	Ⅳ層	-	-	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ	橙	橙	微細黒色粒			
3	土師器	杯 口縁部～底部	Ⅳ層	10.8	6.1	5.1	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ ナデ	橙	橙	2mm以下の褐色・灰白色粒			
4	土師器	杯 口縁部～底部	Ⅳ層	12.0	6.4	5.0	回転ナデ (風化気味) ヘラ切り	回転ナデ	橙	橙	1mm前後の茶褐色粒 微細光沢粒			
5	土師器	杯 口縁部～底部	Ⅳ層	12.2	5.2	5.5	回転ナデ ヘラ切りのあと粗いナデ	回転ナデ 指頭圧痕	橙 褐灰	橙 褐灰	2mm以下の茶褐色粒 1mm以下の黒色光沢粒			
6	土師器	杯 口縁部～底部	Ⅲ層	14.2	6.4	5.7	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	6mm以下の赤褐色粒 微細光沢粒			
7	土師器	杯 口縁部～体部	Ⅳ層	11.9	-	-	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	1mm前後の赤褐色粒			
8	土師器	杯 口縁部～体部	Ⅲ層	12.6	-	-	回転ナデ	回転ナデ	黄橙	黄橙	3mm前後の赤褐色粒 1mm前後の灰褐色粒			
9	土師器	杯 口縁部	Ⅲ層	-	-	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰褐色・灰色砂粒			
10	土師器	杯 口縁部	Ⅲ層	-	-	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ	橙	橙	3mm以下の赤褐色・灰白色粒			
11	土師器	杯 口縁部～体部	Ⅲ層	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	1mm以下の灰白色・黒色光沢粒			
12	土師器	杯 底部	Ⅳ層	-	5.8	-	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	橙	橙	微細灰白色粒			
13	土師器	杯 体部～底部	Ⅳ層	-	5.1	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	橙	橙	3mm以下の茶褐色粒 1mm以下の黒褐色粒 微細光沢粒			
14	土師器	杯 体部～底部	Ⅳ層	-	5.2	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm前後の茶褐色粒 1mm前後の灰褐色粒			
15	土師器	杯 体部～底部	Ⅲ層	-	6.1	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙	1mm前後の赤褐色・灰褐色粒			
16	土師器	杯 口縁部～底部	Ⅳ層	13.0	6.2	4.5	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	にぶい黄橙 にぶい橙	にぶい黄橙 にぶい橙	2mm以下の茶色・灰色粒			
17	土師器	杯 口縁部～底部	Ⅲ層	14.4	6.7	4.9	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	橙	橙	2mm以下の茶褐色粒 1mm以下の黒褐色粒 微細光沢粒			
18	土師器	杯 口縁部～体部	Ⅳ層	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	1mm前後の褐色粒			
19	土師器	杯 口縁部～底部	Ⅳ層	14.1	6.8	4.5	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の黒色・灰黄色粒 4mm以下の灰褐色粒			
20	土師器	杯 口縁部～底部	Ⅳ層	12.7	6.3	4.5	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	橙	橙	1mm以下の灰白色・褐色粒	墨書「寿」		
21	土師器	杯 口縁部～体部	Ⅳ層	13.3	-	-	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	橙	1mm前後の褐色・乳白色粒			
22	土師器	杯 口縁部～体部	Ⅲ層	13.4	-	-	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	4mm以下の黒褐色粒 1mm前後の茶褐色粒			
23	土師器	杯 体部～底部	Ⅲ層	-	5.9	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	浅黄	にぶい黄橙	2mm以下の茶褐色粒 無色透明光沢粒			
24	土師器	杯 体部～底部	Ⅳ層	-	5.8	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	橙 にぶい黄橙	橙 にぶい黄橙	1mm前後の赤褐色粒			
25	土師器	杯 体部～底部	Ⅳ層	-	5.5	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	3mm大の褐色粒 黒色・褐色微細粒			
26	土師器	杯 体部～底部	Ⅲ層	-	6.0	-	回転ナデ ナデ ヘラ切り	回転ナデ	橙	橙	2mm以下の茶褐色・黒色粒			
27	土師器	杯 体部～底部	Ⅳ層	-	7.1	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	橙	橙	1～2mm前後の赤褐色・褐灰色粒			
28	土師器	杯 体部～底部	Ⅳ層	-	7.5	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰白色・黒色粒			
29	土師器	杯 体部～底部	Ⅳ層	-	6.0	-	回転ナデ ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の茶褐色・黒色粒			
30	土師器	杯 体部～底部	Ⅲ層	-	6.8	-	回転ナデ ヘラ切り (風化気味)	回転ナデ ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～2mm前後の灰褐色・黒色粒 透明光沢粒			
31	土師器	杯 口縁部～底部	Ⅳ層	13.3	6.3	5.1	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm前後の赤褐色粒			
32	土師器	杯 口縁部～底部	Ⅲ層	13.5	6.2	4.6	回転ナデ ヨコナデ ヘラ切り	回転ナデ	橙	にぶい黄橙	4mm以下の灰白色・赤褐色粒			
33	土師器	杯 口縁部～体部	Ⅳ層	14.2	-	-	回転ナデ	回転ナデ	橙 にぶい黄橙	橙	8mm大の赤褐色粒 2mm以下の灰白色粒 透明粒			
34	土師器	杯 口縁部	Ⅲ層	-	-	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ	黄褐	にぶい黄褐	1mm以下の灰黄褐色粒			
35	土師器	杯 口縁部	Ⅲ層	-	-	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm大の灰色砂粒			
36	土師器	杯 口縁部～体部	Ⅳ層	-	-	-	回転ナデ (風化気味)	回転ナデ	橙	橙	1mm以下の灰白色砂粒			
37	土師器	杯 口縁部	Ⅲ層	-	-	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ	橙	橙	2mm以下の褐色・灰白色粒			
38	土師器	杯 体部～底部	Ⅲ層	-	6.4	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm前後の褐灰色粒 1mm前後の褐色粒			
39	土師器	杯 体部～底部	Ⅳ層	-	5.4	-	回転ナデ ヘラ切りのあと工具によるナデ	回転ナデ ナデ	橙	橙	1mm以下の灰色・茶色粒			
40	土師器	杯 口縁部～底部	Ⅲ層	13.0	6.5	4.6	回転ナデ (風化気味) ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	橙 浅黄橙	橙	微細黒色粒			
41	土師器	杯 口縁部～底部	Ⅲ層	13.9	7.8	4.5	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ ナデ	橙	橙	1mm以下の微細灰白色・褐色粒			
42	土師器	杯 口縁部～底部	Ⅳ層	13.4	6.1	4.2	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ (やや風化気味)	橙	橙	3mm以下の灰色・褐色粒 2mm以下の透明光沢粒			
43	土師器	杯 口縁部	Ⅲ層	-	-	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	浅黄	1～2mmの褐色粒 4mm大の褐色砂粒			
44	土師器	杯 口縁部～体部	Ⅲ層	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	1mm以下の褐色・赤色粒			
45	土師器	杯 口縁部～体部	Ⅳ層	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm前後の赤褐色粒			
46	土師器	杯 体部～底部	Ⅲ層	-	5.7	-	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰褐色粒			
47	土師器	杯 体部～底部	Ⅳ層	-	6.4	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	橙	橙	1mm前後の赤褐色粒			
48	土師器	杯 体部～底部	Ⅲ層	13.6	-	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	浅黄 灰黄	浅黄橙	1mm前後の赤褐色粒			
49	土師器	杯 体部～底部	Ⅳ層	-	7.7	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	浅黄	浅黄	1.5mm以下の褐色・灰褐色粒	円盤高台状		
50	土師器	杯 体部～底部	Ⅳ層	-	6.7	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	橙	橙	1mm以下の灰色粒	円盤高台状		
51	土師器	杯 体部～底部	Ⅳ層	-	7.6	-	回転ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	にぶい橙	橙	1mm以下の灰白色・黒色粒	円盤高台状		

第4表 宇都第3遺跡 出土遺物観察表2

遺物番号	種別	器種・部位	層位置	法量 (cm)			面		色		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外	内	外	内		
52	土師器	坏 体部~底部	IV層	-	8.1	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	橙	橙	1mm以下の褐色・赤褐色粒	
53	土師器	高台付塊 口縁部~底部	IV層	14.8	8.7	5.6	回転ナデ 放射状の工具圧痕	回転ナデ ナデ	にぶい橙 灰褐	にぶい橙	微細光沢粒	
54	土師器	高台付塊 口縁部~底部	III層	14.1	7.0	6.9	回転ナデ (風化気味)	回転ナデ ナデ	橙	橙	4mm以下の褐色粒 6mm以下の透明粒	
55	土師器	高台付塊 口縁部~体部	IV層	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	4mm以下の灰白色・灰色粒	
56	土師器	高台付塊 底部	IV層	-	8.1	-	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	3mm以下の赤褐色粒	
57	土師器	高台付塊 体部~底部	IV層	-	9.1	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ	橙	橙	1mm以下の黒色・赤褐色粒	
58	土師器	坏 口縁部~体部	IV層	15.0	-	-	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細光沢粒	
59	土師器	高台付塊 底部	IV層	-	7.4	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ	橙	橙	1mm前後の茶褐色・灰褐色粒	
60	土師器	高台付塊 底部	IV層	-	9.1	-	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	2mm以下の灰白色・褐色粒	
61	土師器	高台付塊 体部~底部	IV層	-	7.9	-	回転ナデ 黒変	回転ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	1mm以下の褐色・灰色粒	
62	土師器	高台付塊 体部~底部	IV層	-	8.2	-	回転ナデ 放射状の工具圧痕	回転ナデ	明黄褐	明黄褐	2mm以下の赤褐色・灰色粒	
63	土師器	高台付塊 体部~底部	III層	-	7.0	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	4mm以下の茶褐色・黒褐色粒 微細光沢粒	
64	土師器	高台付塊 体部~底部	IV層	-	6.8	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ	橙 にぶい黄	橙 にぶい黄	2mm以下の茶褐色・黒褐色粒 微細光沢粒	
65	土師器	高台付塊 体部~底部	IV層	-	6.6	-	回転ナデ ナデ ヘラ切り	回転ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の褐色砂粒	
66	土師器	高台付塊 底部	IV層	-	7.5	-	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の褐色・白灰色粒	
67	土師器	高台付塊 体部~底部	IV層	-	8.1	-	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	乳白色微細粒	
68	土師器	高台付塊 体部~底部	III層	-	6.6	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ	灰黄	灰黄	2mm以下の灰色・白色粒 1mm以下のにぶい黄褐色粒	
69	土師器	高台付塊 体部~底部	IV層	-	8.1	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ	橙 にぶい黄	橙 にぶい黄	1mm以下の茶褐色・黒褐色粒 微細光沢粒	
70	土師器	高台付塊 体部~底部	IV層	-	6.9	-	回転ナデ ナデ ヘラ切りのあとナデ	回転ナデ	橙 にぶい黄褐	にぶい黄橙	1mm前後の褐灰色粒	
71	土師器	高台付塊 体部~底部	IV層	-	7.1	-	回転ナデ	回転ナデ ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の赤褐色粒 1mm大の褐灰色粒	
72	土師器	高台付塊 体部~底部	IV層	-	7.8	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ	橙	にぶい黄褐	2mm以下の茶褐色・灰褐色粒	
73	土師器	高台付塊 体部~底部	IV層	-	8.7	-	回転ナデ	回転ナデ	灰黄	灰黄	1mm前後の灰褐色粒	
74	土師器	高台付塊 口縁部~底部	IV層	13.3	7.0	6.6	回転ナデ ナデ	回転ナデ ミガキ (黒化処理)	にぶい黄橙	黒	2mm以下の灰白色・褐色粒 微細光沢粒	黒色土器 (内黒)
75	土師器	高台付塊 口縁部~体部	IV層	14.1	-	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ ミガキ (黒化処理)	灰黄	黒	5mm以下の褐色粒	黒色土器 (内黒)
76	土師器	高台付塊 体部~底部	IV層	-	5.8	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ ミガキ (黒化処理)	橙	黒	2mm大の赤褐色粒 1mm以下の灰褐色粒	黒色土器 (内黒)
77	土師器	高台付塊 体部~底部	IV層	-	7.8	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ ミガキ (黒化処理)	にぶい橙 灰黄	黒	2mm以下の茶褐色・灰褐色粒	黒色土器 (内黒)
78	土師器	高台付塊 底部	III層	-	7.5	-	回転ナデ ナデ ヘラ切り	回転ナデ ミガキ (黒化処理)	にぶい橙	黒	1mm以下の黒色・灰色・褐色粒	黒色土器 (内黒)
79	土師器	甕 口縁部	IV層	20.5	-	-	粗い工具ナデ	ナデ 斜方向にケズリ	橙 黄褐	灰 にぶい黄 暗灰黄	5mm以下の褐色粒・褐灰色粒 1mm前後の灰白色・透明粒	
80	土師器	甕 口縁部	IV層	24.9	-	-	ヨコナデ 煤付着	横方向のナデ 斜方向にケズリ	黄褐	にぶい黄橙	3mm以下の茶褐色粒 1mm以下の灰白色光沢粒	
81	土師器	甕 口縁部	III層	-	-	-	ナデ ヨコナデ	ケズリのあと横方向のナデ	橙	橙	2mm以下の褐色・灰白色 微細透明光沢粒	
82	土師器	甕 口縁部	III層	-	-	-	ナデ	ケズリのあと横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	10mm以下の茶褐色・灰褐色粒 2mm以下の透明光沢粒	
83	土師器	甕 口縁部~胴部	III層	-	-	-	ヨコナデ ナデ	風化が著しく調整不明	にぶい橙	にぶい橙 黄 灰	1mm以下の褐色・乳白色粒	
84	土師器	甕 口縁部~胴部	IV層	15.9	-	-	工具ナデ ナデ 煤付着	ヨコナデ 煤付着 斜方向のケズリ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	4mm以下の褐色・灰白色粒	
85	土師器	甕 口縁部~胴部	IV層	16.6	-	-	横方向のハケメ ナデ 煤付着	ナデ 斜方向のケズリ 煤付着	にぶい橙	にぶい橙 灰黄褐	5mm前後の黒褐色・褐色粒	
86	土師器	甕 口縁部~胴部	IV層	24.6	-	-	横方向のハケメ ナデ 煤付着	ヨコナデ 粗いナデ 煤付着	にぶい黄橙 橙	にぶい黄橙 にぶい橙	1mm前後の褐色・灰色粒	
87	土師器	甕 胴部	IV層	-	-	-	工具ナデ ナデ 煤付着	ナデ 煤付着	にぶい黄橙 褐灰	にぶい黄橙 褐灰	5mm前後の茶褐色粒 1mm前後の黒褐色粒	
88	土師器	甕 口縁部	IV層	25.5	-	-	横方向のハケメ ナデ 煤付着	ナデ ケズリのあとナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の透明光沢粒	
89	土師器	甕 口縁部	IV層	-	-	-	ハケメ ナデ	ナデ 斜め方向のケズリ	橙	橙	1mm前後の茶褐色・黒褐色粒	
90	土師器	甕 口縁部~胴部	IV層	24.2	-	-	ナデ	横方向のナデ ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の褐色粒	
91	土師器	甕 口縁部	III層	-	-	-	ヨコナデ 煤付着	ヨコナデ ナデ 煤付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の茶褐色・黒褐色粒	
92	土師器	甕 口縁部	IV層	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の赤褐色・灰褐色粒 3mm以下の黒色・透明粒	
93	土師器	甕 口縁部	III層	-	-	-	ナデ 煤付着	ヨコナデ 斜方向のケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm前後の茶褐色粒 1mm前後の黒褐色粒	
94	土師器	甕 口縁部	IV層	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の褐色・灰白色粒 1mm以下の黒色・透明粒	
95	土師器	甕 口縁部	IV層	-	-	-	ハケメ ナデ	工具ナデ 粗いケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm大の灰褐色・黒褐色粒 3mm以下の乳白色・灰褐色粒	
96	土師器	甕 口縁部~胴部	IV層	25.7	-	-	ナデ 縦横方向のハケメ	指おさえ 横方向のナデ	橙 灰黄褐	橙	1mm~5mm以下の褐灰色・灰褐色・ 赤褐色粒	
97	土師器	甕 口縁部~胴部	III層	23.8	-	-	ヨコナデ 縦方向のナデ	ヨコナデ 粗いケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	6mm以下の灰黄褐色粒 4mm以下の黒褐色・灰白色粒	
98	土師器	甕 口縁部~胴部	III層	25.2	-	-	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下のにぶい赤褐色粒 2mm以下の黒色粒	
99	土師器	甕 口縁部~胴部	IV層	29.9	-	-	ヨコナデ ナデ 縦方向のハケメ	粗いナデ	橙 灰黄褐	橙 灰黄褐	5mm以下の褐色・灰色粒	
100	土師器	甕 口縁部~胴部	IV層	25.0	-	-	縦方向のハケメ ナデ	ナデ 煤付着 斜め方向の粗いケズリ	橙 明黄褐	橙 にぶい黄橙	5mm以下の灰色・褐色・乳白色粒 黒色透明粒	
101	土師器	甕 口縁部~胴部	IV層	22.9	-	-	ナデ 煤付着	ナデ 指おさえ 粗いナデ 煤付着	明赤褐 にぶい褐	明赤褐 橙	5mm以下の褐色・灰色粒	
102	土師器	甕 口縁部~胴部	IV層	-	-	-	縦方向のハケメ ナデ 煤付着	ナデ ケズリ	橙	にぶい橙 にぶい黄橙	5mm以下の褐色・灰色粒	

第5表 宇都第3遺跡 出土遺物観察表3

遺物番号	種別	器種・部位	層位置	法量 (cm)			外 面		内 面		色 調		胎 土 の 特 徴	備 考
				口径	底径	器高	外	内	外 面	内 面				
103	土師器	甕口縁部	IV層	30.6	-	-	ナデ ヨコナデ	ナデ 粗いケズリ	にぶい褐	灰黄 にぶい黄橙	4mm以下の灰褐色・灰白粒 微細透明光沢粒			
104	土師器	甕口縁部	IV層	-	-	-	ナデ	ナデ ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の褐色粒			
105	土師器	甕頭部付近	IV層	-	-	-	格子目タタキ	横方向のナデ 指おさえ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下のにぶい赤褐色粒 2mm以下の黒色粒	87と同一個体		
106	土師器	甕胴部	IV層	-	-	-	格子目タタキ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下のにぶい赤褐色粒 2mm以下の黒色粒	86と同一個体		
107	土師器	布痕土器口縁部～胴部	IV層	12.7	-	-	指おさえ ナデ	布目痕	にぶい橙	にぶい橙	3mm以下の灰褐色粒 2mm以下の乳白色粒			
108	土師器	布痕土器口縁部～底部	IV層	11.4	-	7.2	指おさえ ナデ	布目痕	にぶい橙	にぶい橙	3mm以下の灰褐色粒 2mm以下の灰色粒			
109	土師器	布痕土器口縁部～胴部	IV層	11.7	-	-	指おさえ ナデ	布目痕	橙	橙	8mm大の褐色・赤褐色粒 1mm前後の灰白色・黒褐色粒			
110	土師器	布痕土器口縁部～胴部	IV層	11.2	-	-	粗いナデ ナデ	布目痕	橙 にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の灰褐色・乳白色粒 5mm以下の黒褐色粒			
111	土師器	布痕土器口縁部～胴部	IV層	-	-	-	粗いナデ ナデ	布目痕	橙 にぶい橙	橙	1mm以下の灰色・にぶい褐色粒			
112	土師器	布痕土器口縁部～胴部	IV層	-	-	-	指おさえ ナデ	布目痕	にぶい橙	橙	3mm大の黒褐色粒 1mm前後の灰白色・黒色光沢粒			
113	土師器	布痕土器口縁部～胴部	IV層	-	-	-	ナデ	布目痕	橙	橙	6mm前後の茶褐色粒 1mm以下の黒褐色粒			
114	土師器	布痕土器口縁部～胴部	IV層	-	-	-	ナデ	布目痕	橙	橙	9mm前後の茶褐色粒 2mm以下の茶褐色・灰色粒			
115	須恵器	甕口縁部～底部	IV層	11.7	6.5	4.2	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	浅黄 灰オリーブ	浅黄 灰	精良			
116	須恵器	甕口縁部～底部	IV層	12.4	6.2	4.5	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	灰	灰	精良			
117	須恵器	甕口縁部～底部	IV層	13.4	5.7	4.6	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	灰	灰	精良			
118	須恵器	甕口縁部～体部	IV層	13.8	-	-	回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰オリーブ	灰	精良			
119	須恵器	甕口縁部～底部	IV層	14.7	7.1	6.7	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ 自然釉	灰オリーブ 灰	灰 にぶい黄	精良			
120	須恵器	甕底部	IV層	-	6.0	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	灰	灰	精良			
121	須恵器	甕体部～底部	III層	-	6.5	-	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	灰	灰	精良			
122	須恵器	高台付塊口縁部～底部	III層	12.7	7.4	6.4	回転ナデ	回転ナデ	灰	灰白	精良			
123	須恵器	高台付塊?口縁部～体部	III層	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐 黄灰	にぶい褐	精良			
124	須恵器	甕口縁部～頸部	IV層	10.7	-	-	格子目タタキ ナデ 自然釉	ナデ ナデ	灰オリーブ	灰褐	精良			
125	須恵器	甕頸部～胴部	III層	-	-	-	格子目タタキ ナデ 自然釉	ナデ 指おさえ	灰オリーブ	灰褐	精良			
126	須恵器	甕口縁部～胴部	IV層	11.3	-	-	格子目タタキ ヨコナデ 自然釉	ヨコナデ 当て具痕 (同心円か)	浅黄 黒褐	灰 暗褐	精良			
127	須恵器	甕口縁部～胴部	IV層	-	-	-	格子目タタキ ナデ 自然釉	ヨコナデ 当て具痕 (同心円) ナデ	灰	にぶい赤褐	精良			
128	須恵器	甕口縁部～頸部	IV層	-	-	-	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	灰 にぶい赤褐	にぶい赤褐	精良			
129	須恵器	甕頸部～胴部	III層	18.0	-	-	格子目タタキ ヨコナデ	ヨコナデ 当て具痕 (同心円)	灰	灰 灰褐	精良			
130	須恵器	甕口縁部～胴部	IV層	16.0	-	-	平行タタキ ヨコナデ 自然釉	ヨコナデ 当て具痕 (同心円)	灰褐 浅黄	灰褐	精良			
131	須恵器	甕口縁部～頸部	III層	-	-	-	ヨコナデ 自然釉	ヨコナデ	褐灰 黄橙	褐灰 黄橙	精良			
132	須恵器	甕底部	IV層	-	-	-	平行タタキ 自然釉	ナデ 指おさえ	浅黄 暗灰黄	暗灰黄	精良			
133	須恵器	甕口縁部	III層	11.6	-	-	回転ナデ 自然釉	回転ナデ	灰	灰	精良			
134	須恵器	甕口縁部	III層	12.2	-	-	回転ナデ 自然釉	回転ナデ	灰オリーブ	灰白	精良			
135	須恵器	甕口縁部～頸部	III層	31.2	-	-	ヨコナデ 自然釉	ヨコナデ	灰オリーブ	灰白	微細黒色粒			
136	須恵器	甕胴部	IV層	-	-	-	平行タタキ 自然釉	ナデ 指おさえ	灰 暗灰黄	暗灰黄	精良			
137	須恵器	甕口縁部～頸部	IV層	-	16.3	-	格子目タタキ 自然釉	ナデ 指おさえ	灰 オリーブ黒	灰オリーブ	精良			
138	須恵器	甕口縁部～頸部	IV層	-	7.8	-	粗いナデ 自然釉	ナデ	灰 灰オリーブ	灰	精良			
139	須恵器	甕胴部～底部	III層	-	12.9	-	平行タタキ 自然釉	指おさえ ナデ	褐灰 暗灰黄	暗灰黄	精良			
140	須恵器	甕胴部～底部	III層	-	14.3	-	格子目タタキ ヨコナデ 自然釉	ナデ	浅黄 暗赤褐	暗灰黄 黄灰	精良			
141	須恵器	甕胴部～底部	IV層	-	-	-	回転ナデ 自然釉	回転ナデ	灰 暗灰黄	灰	微細白色粒			
142	須恵器	甕底部	III層	-	16.4	-	回転ナデ ナデ 自然釉	回転ナデ ナデ	灰 暗灰黄	灰	精良			
143	須恵器	甕口縁部～頸部	IV層	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	灰 にぶい黄	黄灰	精良			
164	弥生土器	甕口縁部～胴部	IV層	-	-	-	無刻目突帯 ハケ目 ヨコナデ	ナデ 指おさえ	橙 黒褐色	橙 黒褐色	3mm前後の茶褐色・黒褐色粒			
165	弥生土器	甕口縁部～胴部	IV層	-	-	-	ハケ目 ヨコナデ	ナデ	にぶい黄褐	橙	1mm以下の灰色粒			
166	弥生土器	甕底部	IV層	-	8.1	-	ナデ 指おさえ	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄	黄灰	半透明微細粒 3mm以下の褐灰色・黒色粒			
167	弥生土器	甕底部	IV層	-	6.8	-	ナデ 縦方向の粗いナデ	ナデ	にぶい褐	黄灰	1mm以下の灰褐色・乳白色粒			
168	土師器	甕頸部	IV層	-	-	-	刻目突帯 ナデ ヨコナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	5mm以下の暗灰黄色 3mm以下のにぶい黄褐色粒			
171	陶器	天目茶碗口縁部	III層	-	-	-	施釉	施釉	黒	黒	精良		瀬戸系	
172	陶器	掬鉢口縁部～胴部	III層	-	-	-	横方向のナデ 回転ナデ 指おさえ	一単位が8条の条線	にぶい赤褐 暗褐	赤褐 暗灰黄	精良		備前	

第5節 宇都第3遺跡のまとめ

都城盆地を取り囲むように連なる鰐塚・霧島山系の裾野には、緩やかな傾斜をもつ低丘陵地帯や河岸段丘が広がっている。そこには各時代を通して数多くの遺跡が存在することが明らかになっており、小鷲巣川流域の河岸段丘にほど近い丘陵裾部に位置する宇都第3遺跡もこのような地形的環境に立地した遺跡の一つである。調査の結果、同遺跡からは都城盆地の大規模な荘園開発が始まる11世紀第2四半期以前の平安時代中期から後期を中心とした土師器・須恵器などの遺物が多量に出土したほか、掘立柱建物跡や道状遺構などの遺構も検出することができた。

そこで本節では、遺構・遺物をもとに当地域における該期の様相を考えるとともに、わずかではあるが遺構・遺物を確認した弥生時代、古墳時代、中世についても若干の考察を加えまとめたい。

1 古代

宇都第3遺跡の周辺では、宇都第1遺跡、同第2遺跡など平安期の遺物を包蔵すると考えられる遺跡の存在が、表面採集等により確認されていた。しかし、これまでに発掘による調査事例がなく、その実態は明らかになっていなかった。したがって、今回の調査で確認できた平安期の遺構・遺物の存在は、当地域において該期に集落が展開した可能性を示唆するものになると考えられる。

(1) 遺構

霧島御池軽石(Kr-M)の漸移層に相当する第IV層上面でその大半を検出した古代の遺構は、掘立柱建物跡4棟、道状遺構1条、溝状遺構3条、土坑2基、ピット197基であった。このうち掘立柱建物跡を構成する柱穴を含む197基のピットについては、総数の約93%に相当する184基が第5図に示すように1号道状遺構(SG1)より南側に遍在していた。このようにピットを検出した範囲に顕著な偏倚が見られた一つの要因として、この遺構との関係が少なからず影響していたことは確かであろう。そこで、ここではこの道状遺構を中心に取り上げ、地形図や地表面観察から読みとれる遺跡周辺の地形との関係も考慮しながら遺跡の広がりについて考えてみたい。

検出された1号道状遺構は、調査区内で大きく曲がりその方向を変えていたことやその大きな曲がり付近に分岐点が存在したことが確認できた。それでは、進行方向を直角近くまで変えるこの大きな曲がりや、新たな方向の選択を可能にするこの分岐はいかなる意図をもっていたのだろうか。その意図を少しでも明らかにしようとするとき、第2図に示した宇都第3遺跡周辺地形図から読みとれる事実や現地踏査の成果が一つの手掛かりになると考えられる。

宇都第3遺跡の周辺には地形図から読みとれるように、今回の調査区の東側には丘陵の裾部まで平坦な地形が広がっていることが分かる。面積としてはおよそ9,500㎡を有し、現況では杉林及び竹林となっている。杉や竹がかなり密生しているため丘陵の裾部まで見通すことはできないが、踏査の結果、地形図が示すとおりほとんど起伏のない平坦な地形であることを確認することができた。また、平安期の地形や遺物包含層が後世の大きな改変を受けずに残存していたことも発掘調査により確認できた。該期にこの空間がどのように利用されていたかについて、これらの事実だけで言及することは現段階ではその材料に乏しい。しかし、丘陵裾部から小鷲巣川により形成された河岸段丘面に広がるこの平坦面が、周囲よりもレベル的に明らかに優越し、治水等の観点からも居住空間としての条件を十分に兼ね備えていることは確かである。

したがって、今回の調査区を含むこの広い平坦面は、4棟の掘立柱建物跡や同時に出土した多量の遺物の存在から、耕作等の生産の場と考えるよりも居住空間として活用されていたとその性格付けをするのが妥当であり、平坦面のほぼ中央に向かって延びる分岐は、この広い空間との連絡を意図したものと考えられる。また、遺物の分布も東側ほど密になる傾向が認められたことから、掘立柱建物跡等の遺構を包括する集落の本体は調査区より東側に展開していたと推測できる。

調査区内で大きく曲がるこの遺構は、西方向への推定ルートは検出面までが深いため判然としなかったが、北方向への推定ルートについては同遺構の形状を反映していると考えられる浅い溝状の地形が小鷲巣川の方に続いていることが地表面観察により確認できた。また、この浅い溝状の地形は、現在の地境とほぼ同じ方向を保っており、機能を停止したこの遺構が区画的な性格だけを保持し続けてきた可能性を想起させる。

(2) 遺 構

大半の遺物は遺構を検出した範囲と同様、1号道状遺構の南側で集中して出土した。種別としては土師器・須恵器の日常雑器が中心である。

土師器

出土した遺物の中で数量的に最も優位を占める。確認できた器種としては皿・坏・高台付碗・甕の4器種である。その中で坏・高台付碗・甕の3器種の占める割合が高く、出土遺物総数のおよそ75%を占める。また、割合が高かった3器種について全体に占める個々の割合を比較すると、坏（約36.4%）、高台付碗（約18.2%）、甕（約19.6%）となる。

坏はその特徴をもとにI類からV類に類別したが、II類に属する特徴をもつものが個体数としては多く認められた。その反対に、相対的に小型で器高が高く、底径と口径の差が他と比べて小さいという特徴をもつI類や円盤高台状の底部をもつV類に属するものは少なかった。このうちI類に属する個体の比較的大きな破片は、第IV層中の下位から出土する傾向が見られたことから時期的にはやや古い様相を呈していると考えられる。また、底部に円盤状の張り出しが顕著なV類は、後続する円盤高台をもつ坏の前段階に位置付けられ、想定できる時代幅としては9世紀後半から10世紀前半が考えられる。

高台付碗は底部片が多く、口縁部から底部までの器形を図上復元できる遺物が少なかった。そのため、器形を類推することが難しく、底部の特徴を中心に細分した類別となった。特徴的な遺物としては、底部外面に工具による放射状圧痕が残る53・62や、口径が大きく体部が直線的に外方に開き、高い高台をもつII類に属する一群があげられる。時期幅としては坏と同様に9世紀後半から10世紀前半を想定している。

墨書土器としては、体部に「尗」の文字が正位で墨書された20の坏が1点のみであるが確認された。県内で墨書土器がまとまって出土した遺跡としては宮崎市大字浮田の余り田遺跡⁽¹⁾があげられるが、宇都第3遺跡で出土した遺物は、この遺跡から出土した遺物と大きな時期差がなくほぼ同時期の遺跡であると考えられる。余り田遺跡からは約150点の墨書土器が出土しており、墨書、刻書、線刻などにより文字や記号が記されている。これらの文字の中には、「日」と「万」を密着させて一文字として表現した合わせ文字が多く見られる。今回、宇都第3遺跡で確認できた「十」と「万」の合わせ文字は余り田遺跡や県内のその他の遺跡から出土した墨書土器には確認されていないが、「万」はいろいろな文字との組み合わせでよく用いられる文字であり、今後県内各地で調査が進むにつれて類例も増えてくるものと考えられる。

甕は坏に次いで出土量が多かった。比較的大きめの口縁部及び胴部の破片がその大半を占めており、推定径を含めて口径の計測値を得られた14の個体から算出した口径の平均値は約23.95cmである。また、個々の口径について比較すると、口径が16cm前後、25cm前後、30cm前後に分かれており大きく3つのグループに類別できるようである。第1のグループとしては、84・85に代表される小型の甕である。ともに成形及び調整が丁寧で、外器面に多量の煤が付着しているという共通点が認められる。第2のグループには計測値を得た14個体中9個体が属しており、口径に限っては宇都第3遺跡で出土した土師器甕の平均的な法量を示すと考えられる。第3のグループは99・103の2個体のみであり、ともに外反傾向が強く、水平方向に開く口縁部に特徴をもつ。これらは、Ⅶ類に属するものである。

黒色土器・布痕土器

黒色土器はすべて内面のみ黒化処理を施した黒色土器A類である。内器面にミガキが施されているが、風化等によりその単位は不明瞭であり判別しがたいものが多かった。

布痕土器は軟焼成および二次焼成による劣化等の特性から、布目の痕跡がすでに磨滅してしまったものも多いと考えられ、実際には確認した以上の個体数が想定できる。定形化された器形をもつ型作りの土器であり、口縁部から底部付近まで器形を復元することができた107・108・109の3個体についてそれぞれの容積を求めると約386cc(107)、約197cc(108)、約183cc(109)であった。107は残り2つの個体と比べると約2倍の容積があり、少なくとも2つのタイプが存在したことが考えられる。

須恵器

坏・高台付碗・甕・壺の4器種を確認したが、土師器と比べてその個体数は少ない。これは土師器の年代として想定した9世紀後半から10世紀前半という時期が、須恵器の生産が徐々に衰退していく時期に相当していることもその一因として考えられる。また、坏・高台付碗の個体数はさほど多くはなく、器形的にも土師器の器形に類するものが多かったことから、ここでは一定量の遺物を確認できた甕・壺を中心に取り上げる。

甕はその器形に見られる特徴をもとにⅠ類からⅢ類に分類した。調整としては外器面に格子目タタキ痕・平行タタキ痕、内器面には同心円及び放射状の当て具痕が認められた。器形としては、胴部中位より少し上に最大径をもち、底部と胴部の境が曖昧な該期の須恵器甕の特徴を有している。また、129のように成形前に粘土の捏ね方が足りないことが原因で残留した空気が焼成により膨張したためにできる膨らみや破裂痕が認められるものもある。

壺は133・134のように口縁部の断面形が逆「く」の字を呈し受け口状になるものが認められた。この受け口状の口縁部は九州南部特有のものであり、底部が平底となる136から140の胴部片はこの口縁部をもつ壺のものと考えられる。また、このタイプの壺の一群に特徴的なこととして、甕と同じく焼成により生じた膨らみや破裂痕が多いことが指摘できる。また、この膨らみや破裂痕による器表面の変形や損傷は、甕よりも顕著に認められ一個体で確認できる箇所も多い。当遺跡周辺では須恵器窯の存在は確認されておらず、また県内でもその数は限られていることから、焼成不良品等の生産地消費という見方は現状では考えられない。したがって、常用として支障のない品質さえ保持していれば製品として各地で消費されたことも十分考えられる。

鉄製品

163の鉄製の鎌は、余り田遺跡でも同じ形状のものが出土しており、その大きさを比較しても大差がないことから、該期の鎌としては標準的な規格であると考えられる。

2 弥生時代・古墳時代

弥生時代の遺物は数点しか確認できなかった。時期について言及できるものとしては165・166の2点のみであり、いずれも弥生時代中期に属するものである。また、調査区内では遺構を確認することができなかったが、段丘上の微高地という該期の集落が展開する条件は兼ね備えており、これらの遺物を包括する遺構が周辺に存在する可能性を指摘しておきたい。

古墳時代についても遺物を確認したのみであるが、丘陵の間を北流してきた小鷲巣川がその両岸に成した段丘面で該期の土師器が数多く表面採集されている。また、第2図の周辺地形図で現在畑地として利用されているこの一帯を実際に歩いてみても、多数の土師器の細片が耕作土中に混入していた。これらのことから古墳時代の遺跡はこの段丘面を中心に展開している可能性も考えられる。

3 中世

宇都第3遺跡が所在する小鷲巣集落の「鷲巣」という地名は享禄元年(1528)の新納氏と伊東氏の合戦に由来するという伝承があるが、庄内地理志⁽²⁾等の史料から判断すると少なくとも14世紀前半には同地名は存在していたものと考えられる。

今回検出された中世の遺構は、調査区内を東西に横断する4号溝状遺構のみであった。部分的な検出となったため遺構の延長方向及び全体の規模等は不明であるが、桜島文明軽石(Sz-3)に埋没した状態で検出されたことから、同遺構は文明年間の同軽石の降下によりその機能を停止したのと考えられる。桜島文明軽石は、「白ボラ」「文明ボラ」等の通称で呼ばれ、良好な堆積層が都城地方の広範囲に存在していることが知られているとともに、自然科学分析や文献史料をもとにした降下年代の特定のための資料の蓄積も進んでおり、遺構年代を推定する際の重要な手掛かりとなっている。

なお、確認できた遺物は第Ⅲ層中の上位で出土した陶器2点のみに止まった。ともに14、15世紀代の陶器であるが、土師器皿や坏などは小片の類も出土しなかったことから、中世の遺構・遺物を包蔵していた文化層が後世の耕作等により消失している可能性も考えられる。

今回確認された中世の遺構・遺物は、当地における該期の様相を考える上で十分な材料とは言えない。しかし、遺跡周辺には中世から続く神社や廃絶した寺院跡などがあつたり、既存道を挟んだ調査区北側の竹林には数基の苔生した五輪塔も残っていたりすることから、確認できた遺構・遺物を包括する集落が形成されていたことも十分に考えられ、今後の調査等による実態の解明が待たれるところである。

[註]

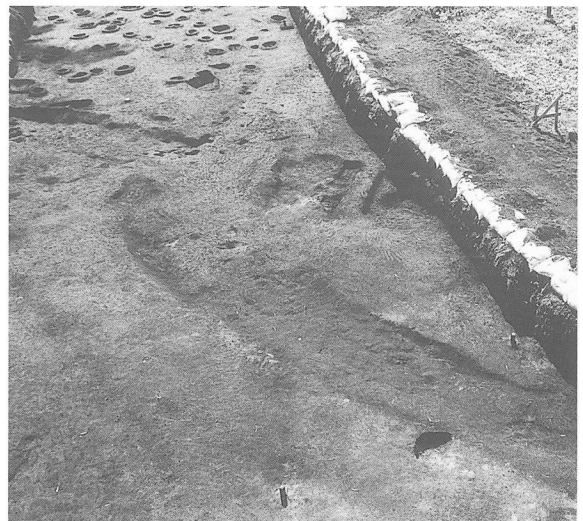
- (1) 宮崎県埋蔵文化財センター 『余り田遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第1集 1999
- (2) 都城市 都城市史編纂委員会 『都城市史 史料編 近世2』 2002



宇都第3遺跡 全景（南西丘陵斜面から）

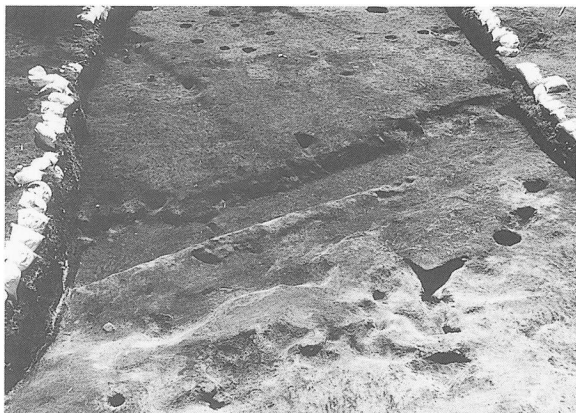


宇都第3遺跡 1号道状遺構検出状況（南東から）



宇都第3遺跡 1号道状遺構完掘状況（北東から）

宇都第3遺跡 図版2



宇都第3遺跡 1号溝状遺構完掘状況（北東から）



宇都第3遺跡 1号溝状遺構埋土状況（東から）



宇都第3遺跡 2号溝状遺構完掘状況（北から）



宇都第3遺跡 2号溝状遺構埋土状況（南西から）



宇都第3遺跡 3号道状遺構完掘状況（東から）



宇都第3遺跡 3号溝状遺構埋土状況（南西から）



宇都第3遺跡 1号土坑完掘状況（北東から）



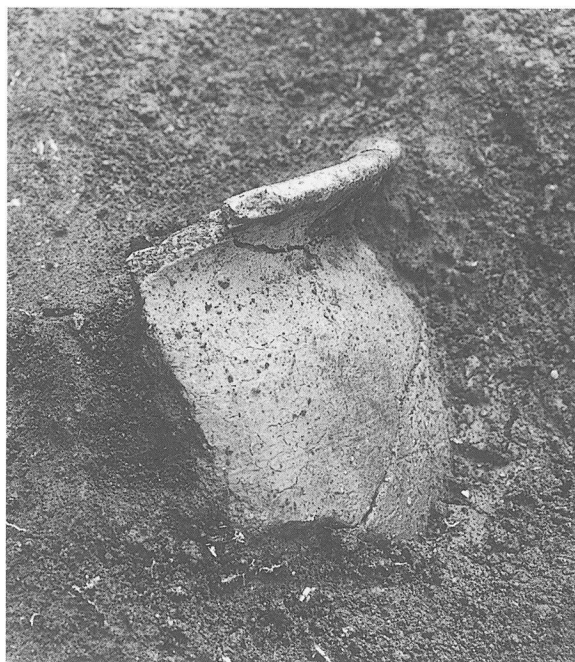
宇都第3遺跡 2号土坑完掘状況（北西から）



宇都第3遺跡 遺物出土状況1 (F2グリッド, 西から)



宇都第3遺跡 遺物出土状況2 (遺物番号127)



宇都第3遺跡 遺物出土状況3 (遺物番号96)



宇都第3遺跡 遺物出土状況4 (遺物番号162)



宇都第3遺跡 遺物出土状況5 (遺物番号126)



宇都第3遺跡 遺物出土状況6 (遺物番号129)

宇都第3遺跡 図版4



宇都第3遺跡 土師器（皿，遺物番号1）



宇都第3遺跡 土師器（坏Ⅰ類，遺物番号5）



宇都第3遺跡 土師器（坏Ⅰ類，遺物番号6）



宇都第3遺跡 土師器（坏Ⅱ類，遺物番号16）



宇都第3遺跡 土師器（坏Ⅱ類，遺物番号17）



宇都第3遺跡 土師器（坏Ⅱ類，遺物番号19）



宇都第3遺跡 土師器（坏Ⅱ類，遺物番号20）



宇都第3遺跡 土師器（坏Ⅲ類，遺物番号31）



宇都第3遺跡 土師器 (坏Ⅲ類, 遺物番号32)



宇都第3遺跡 土師器 (坏Ⅳ類, 遺物番号40)



宇都第3遺跡 土師器 (坏Ⅳ類, 遺物番号41)



宇都第3遺跡 土師器 (坏Ⅳ類, 遺物番号42)



宇都第3遺跡 土師器 (坏Ⅴ類, 遺物番号49)



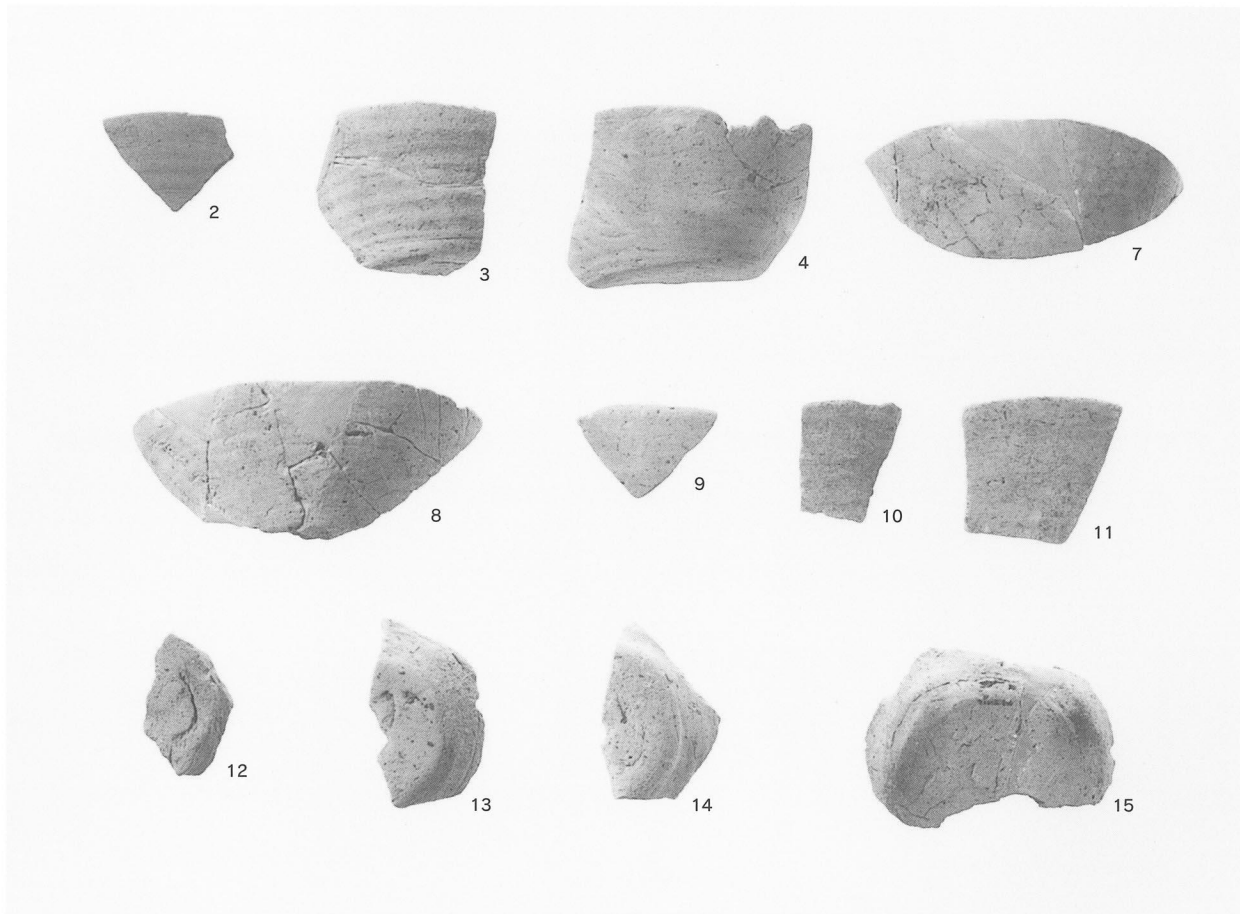
宇都第3遺跡 土師器 (坏Ⅴ類, 遺物番号50)



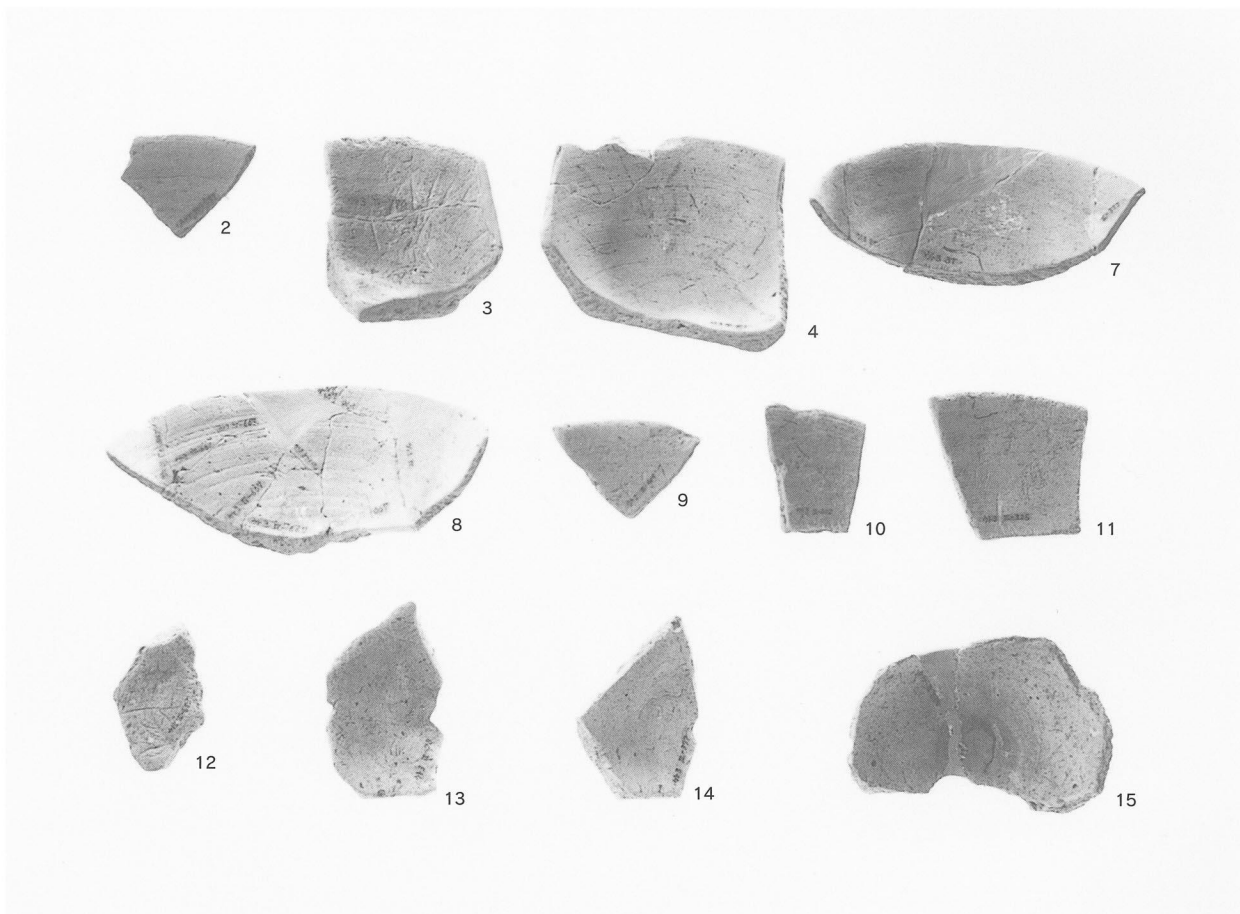
宇都第3遺跡 土師器 (高台付碗Ⅰ類, 遺物番号53)



宇都第3遺跡 土師器 (高台付碗Ⅱ類, 遺物番号53)



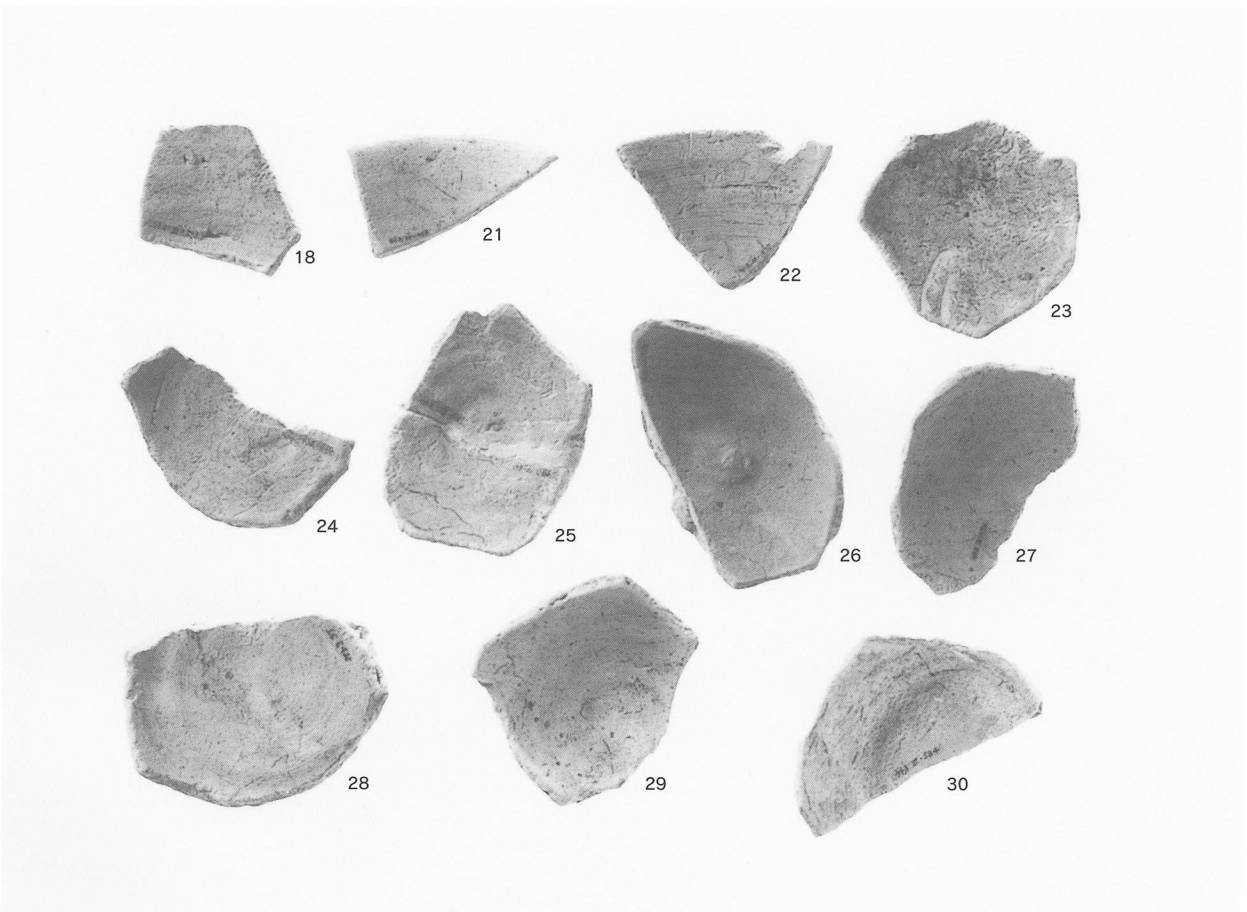
宇都第3遺跡 土師器（皿，坏Ⅰ類，外面）



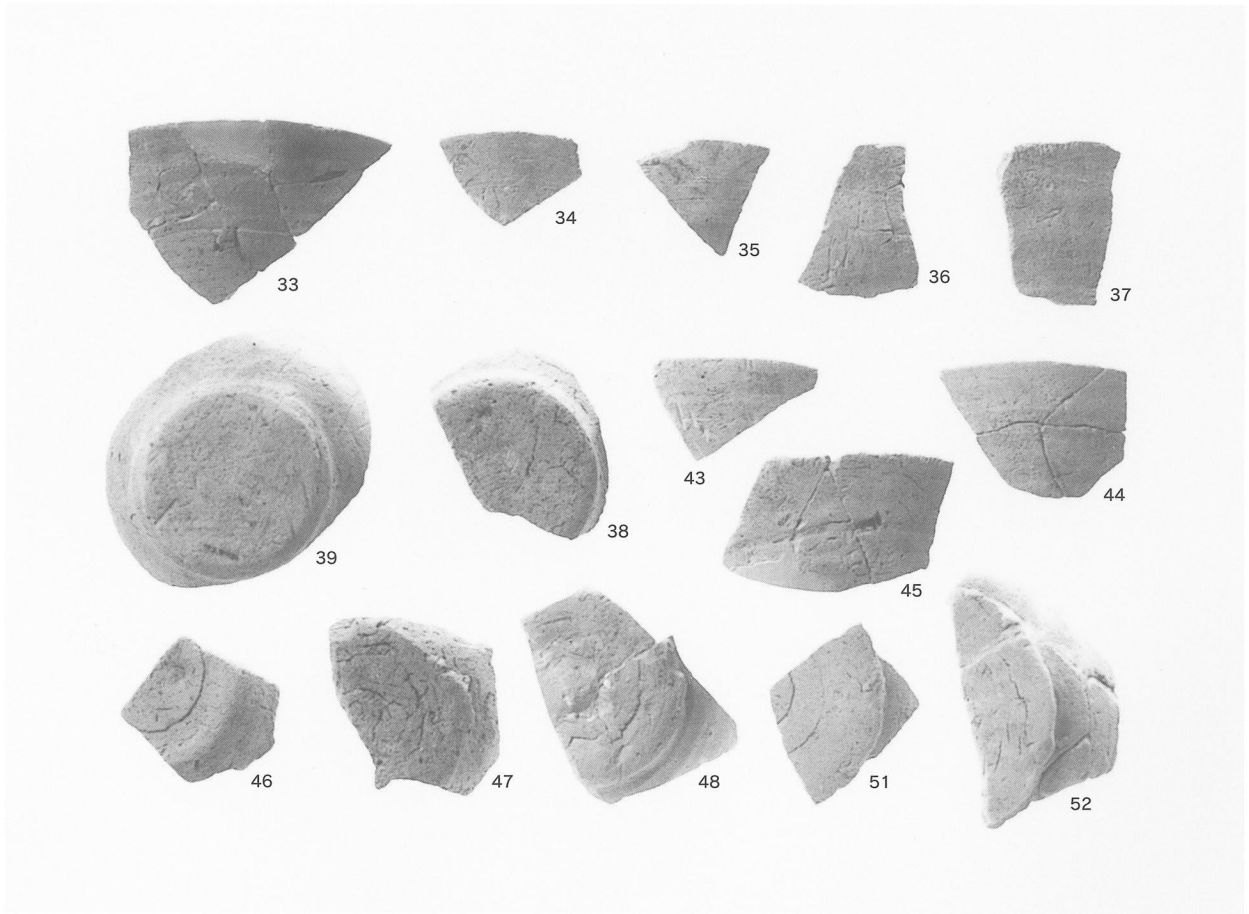
宇都第3遺跡 土師器（皿，坏Ⅰ類，内面）



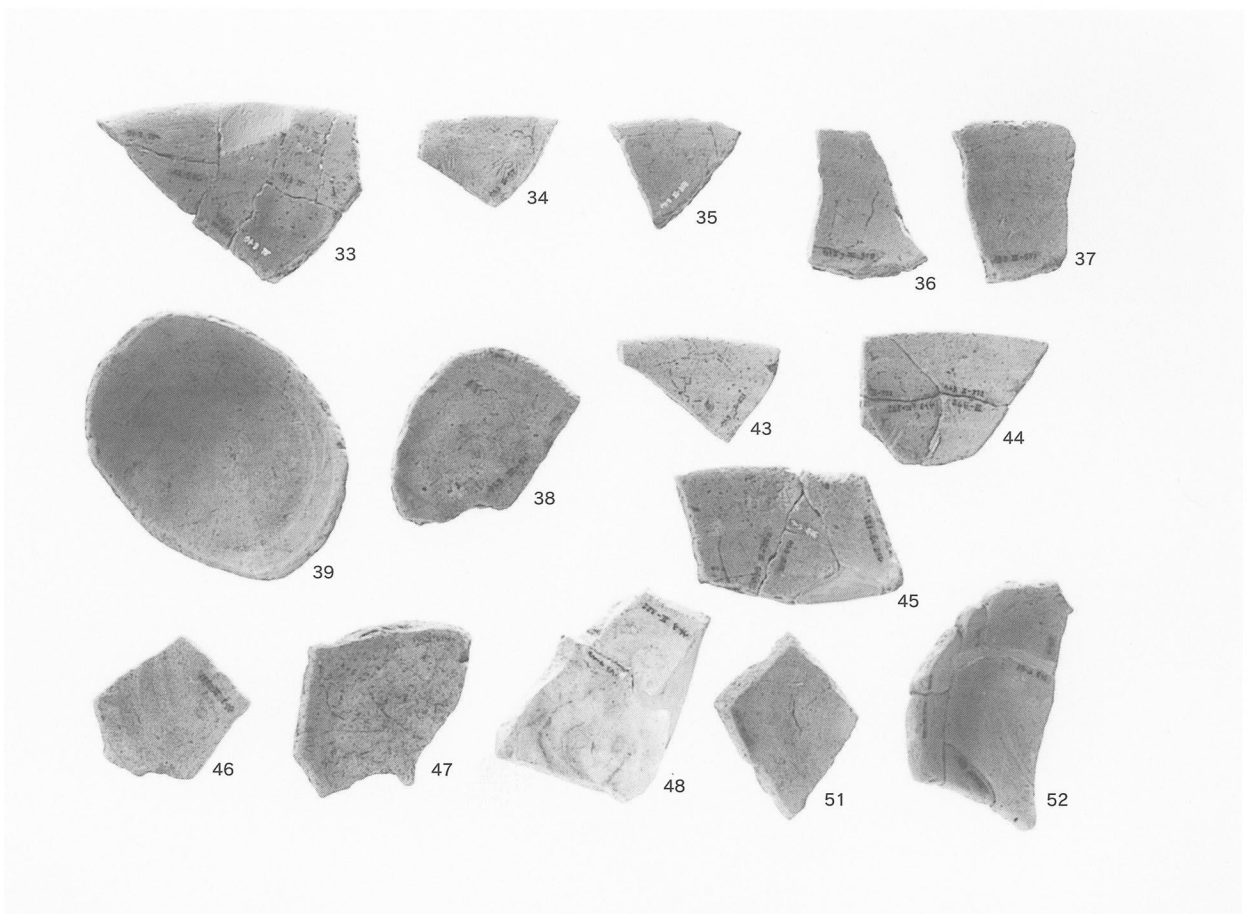
宇都第3遺跡 土師器 (坏Ⅱ類, 外面)



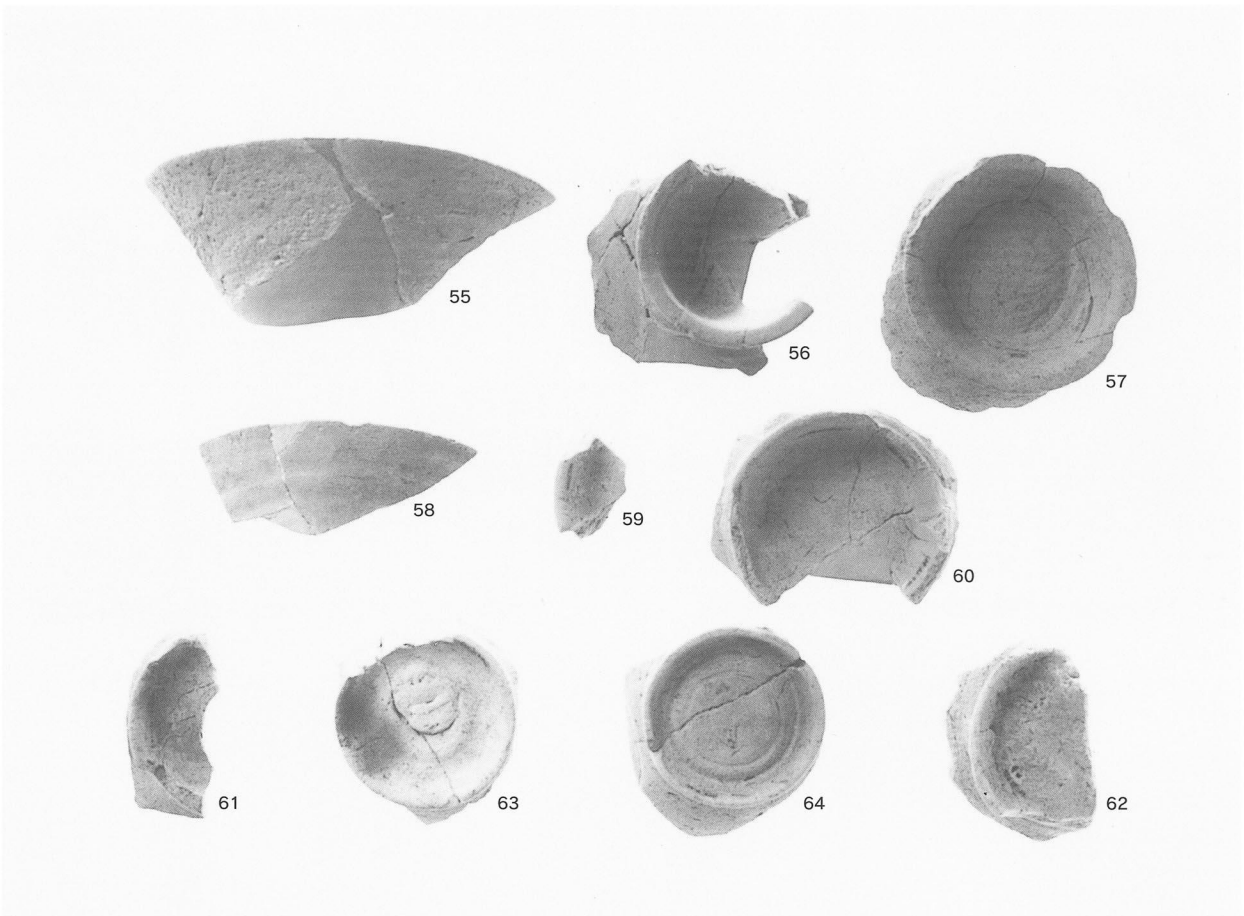
宇都第3遺跡 土師器 (坏Ⅱ類, 内面)



宇都第3遺跡 土師器 (坏Ⅲ～Ⅴ類, 外面)



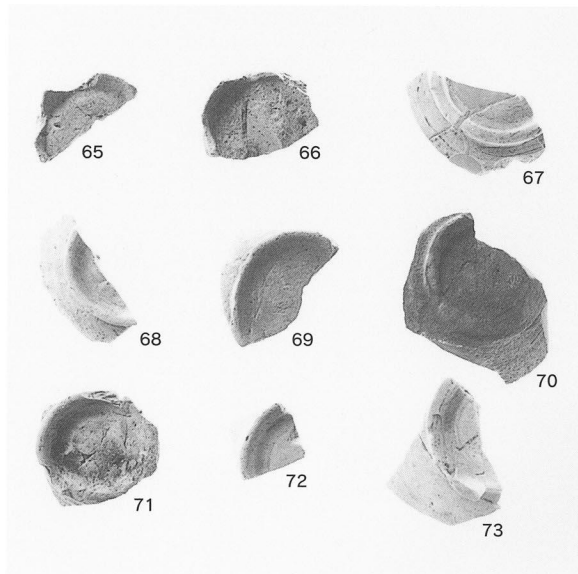
宇都第3遺跡 土師器 (坏Ⅲ～Ⅴ類, 内面)



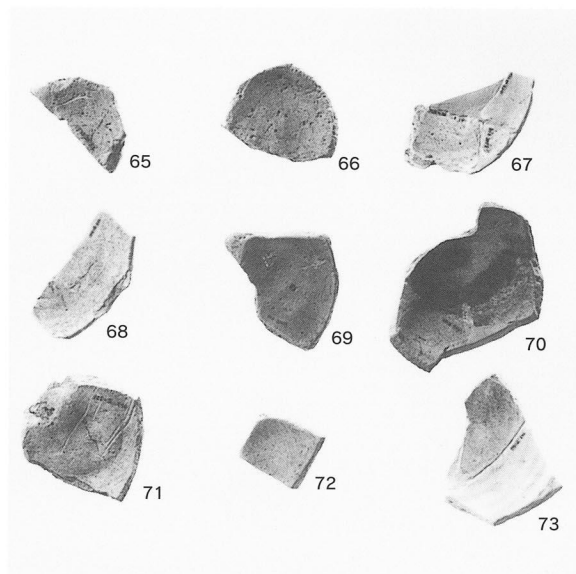
宇都第3遺跡 土師器（高台付碗Ⅱ～Ⅳ類，外面）



宇都第3遺跡 土師器（高台付碗Ⅱ～Ⅳ類，内面）



宇都第3遺跡 土師器 (高台付碗V~VIII類, 外面)



宇都第3遺跡 土師器 (高台付碗V~VIII類, 内面)



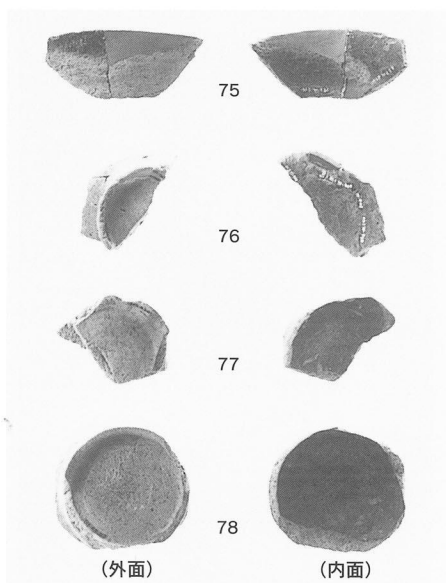
宇都第3遺跡 墨書土器 (「方」, 遺物番号20)



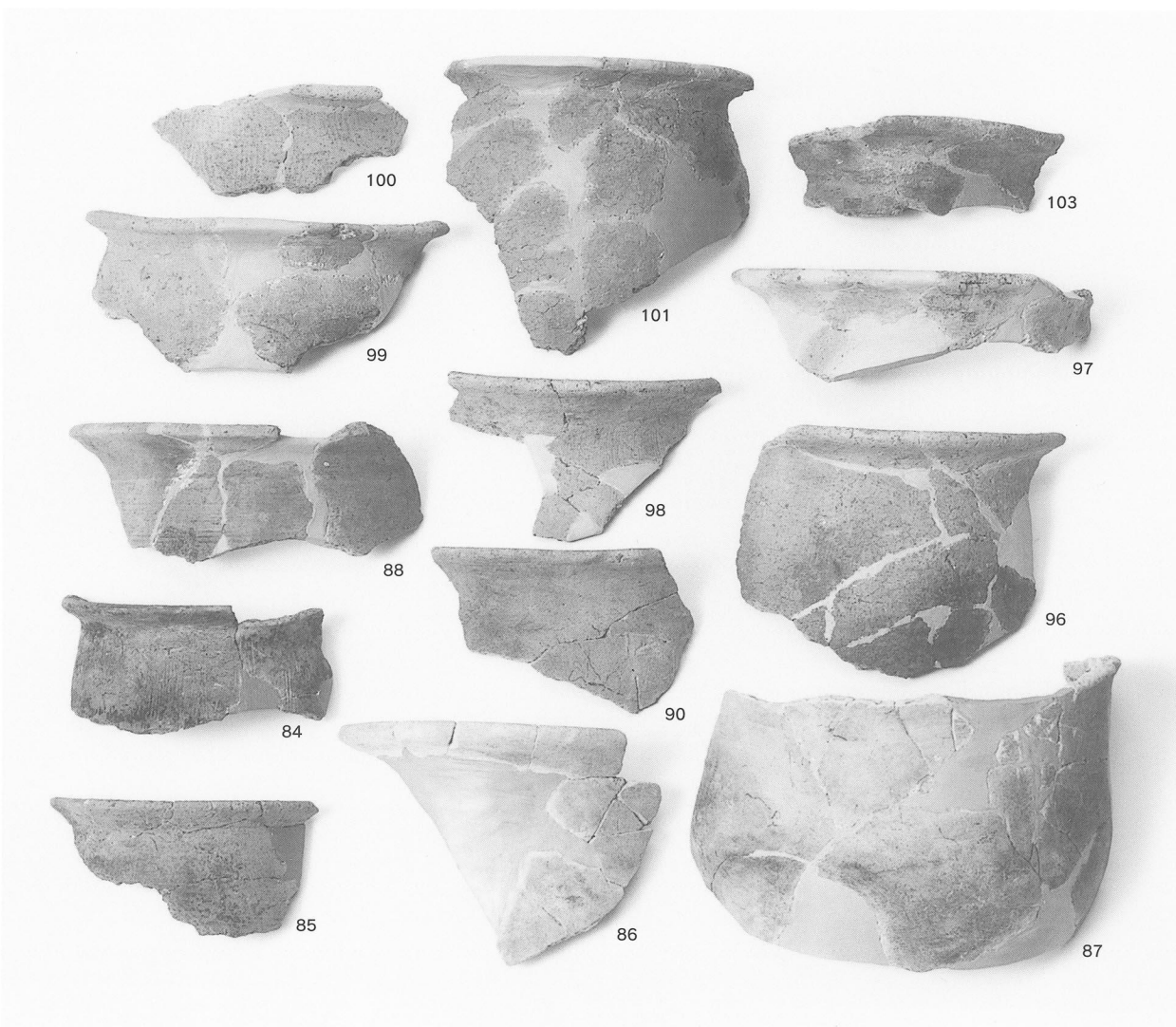
宇都第3遺跡 高台付碗の底部内面調整 (遺物番号 左: 53, 右: 62)



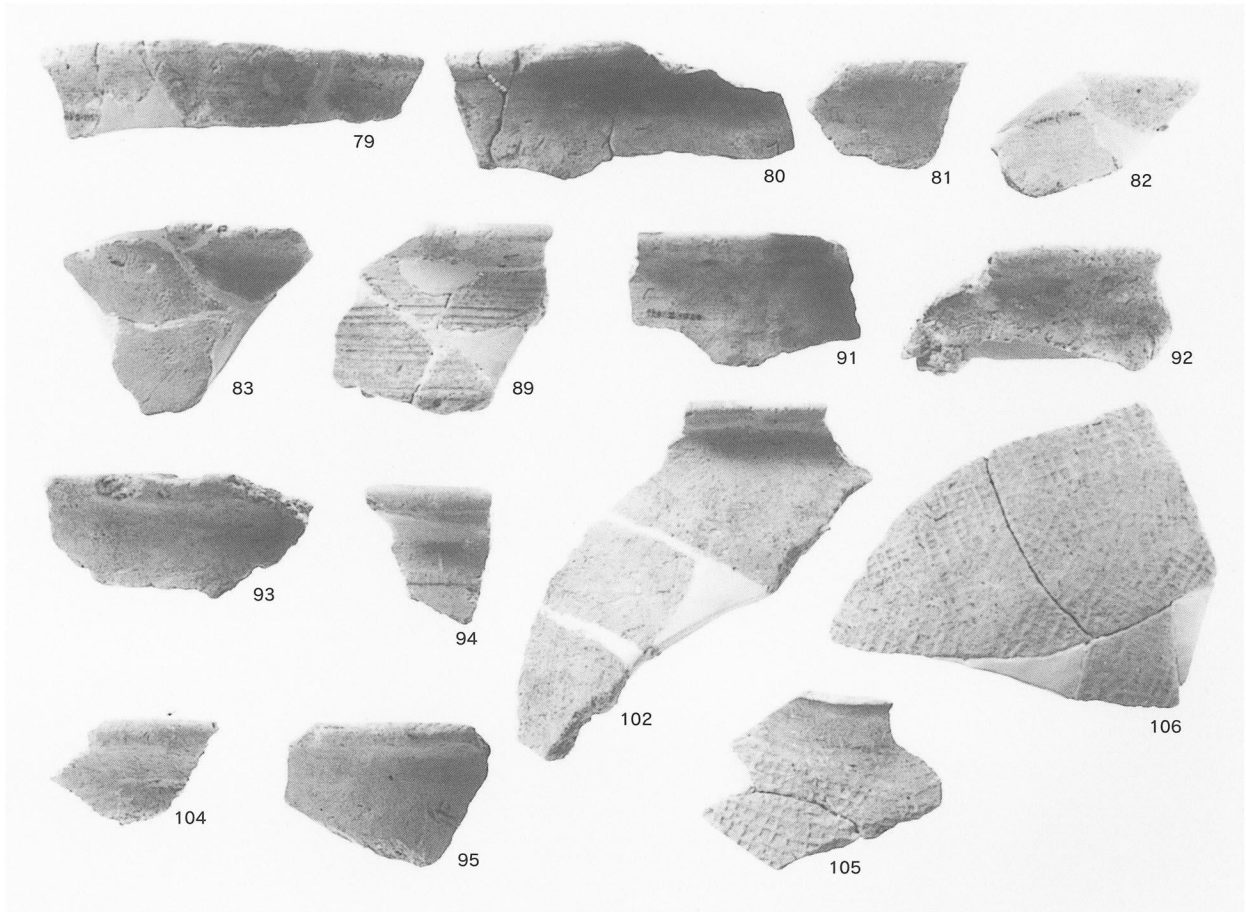
宇都第3遺跡 黒色土器1 (遺物番号: 74)



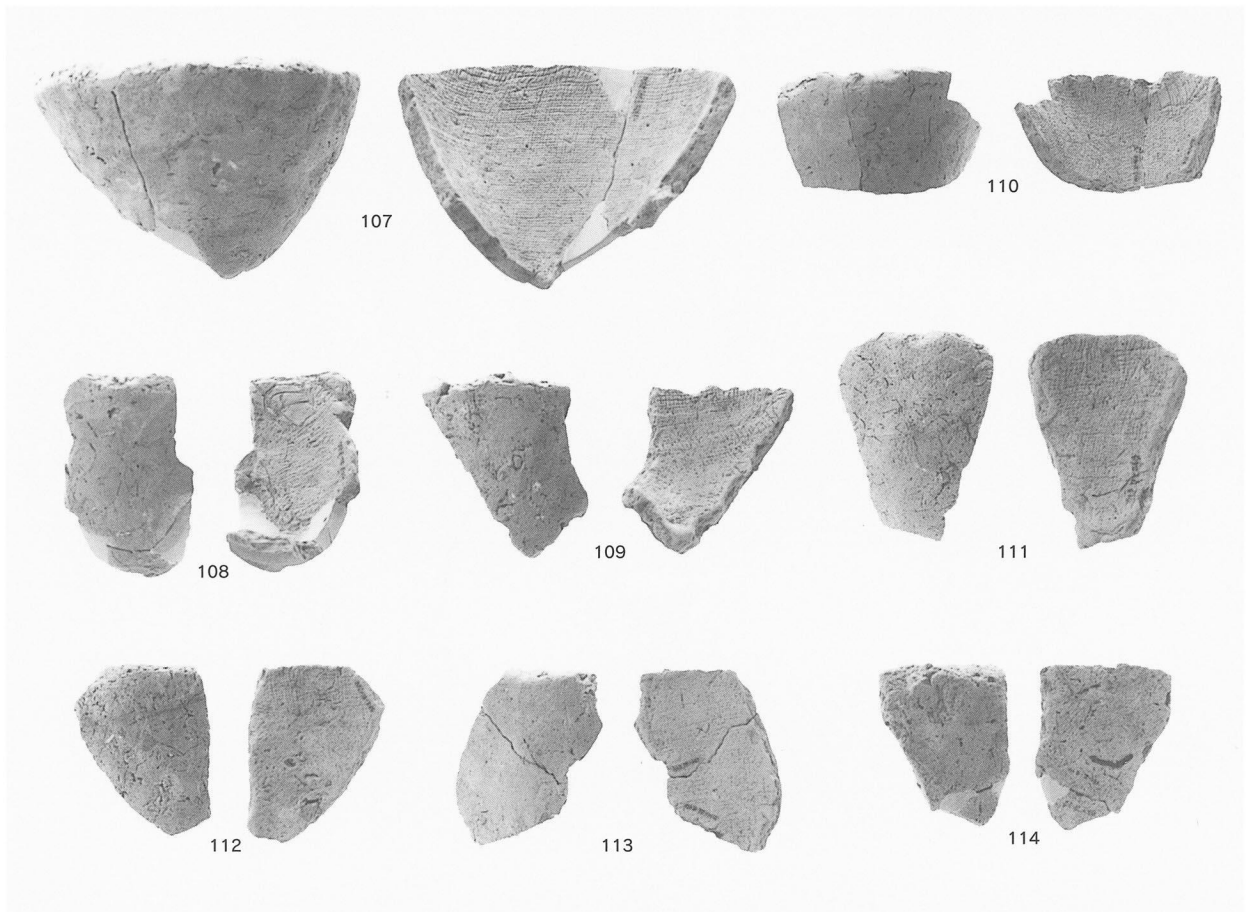
宇都第3遺跡 黒色土器2



宇都第3遺跡 土師器甕1



宇都第3遺跡 土師器甕2



宇都第3遺跡 布痕土器 (左：外面，右：内面)



宇都第3遺跡 須恵器 (坏, 遺物番号115)



宇都第3遺跡 須恵器 (坏, 遺物番号116)



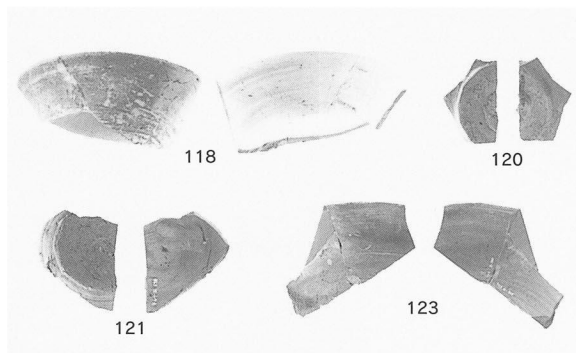
宇都第3遺跡 須恵器 (坏, 遺物番号117)



宇都第3遺跡 須恵器 (坏, 遺物番号119)



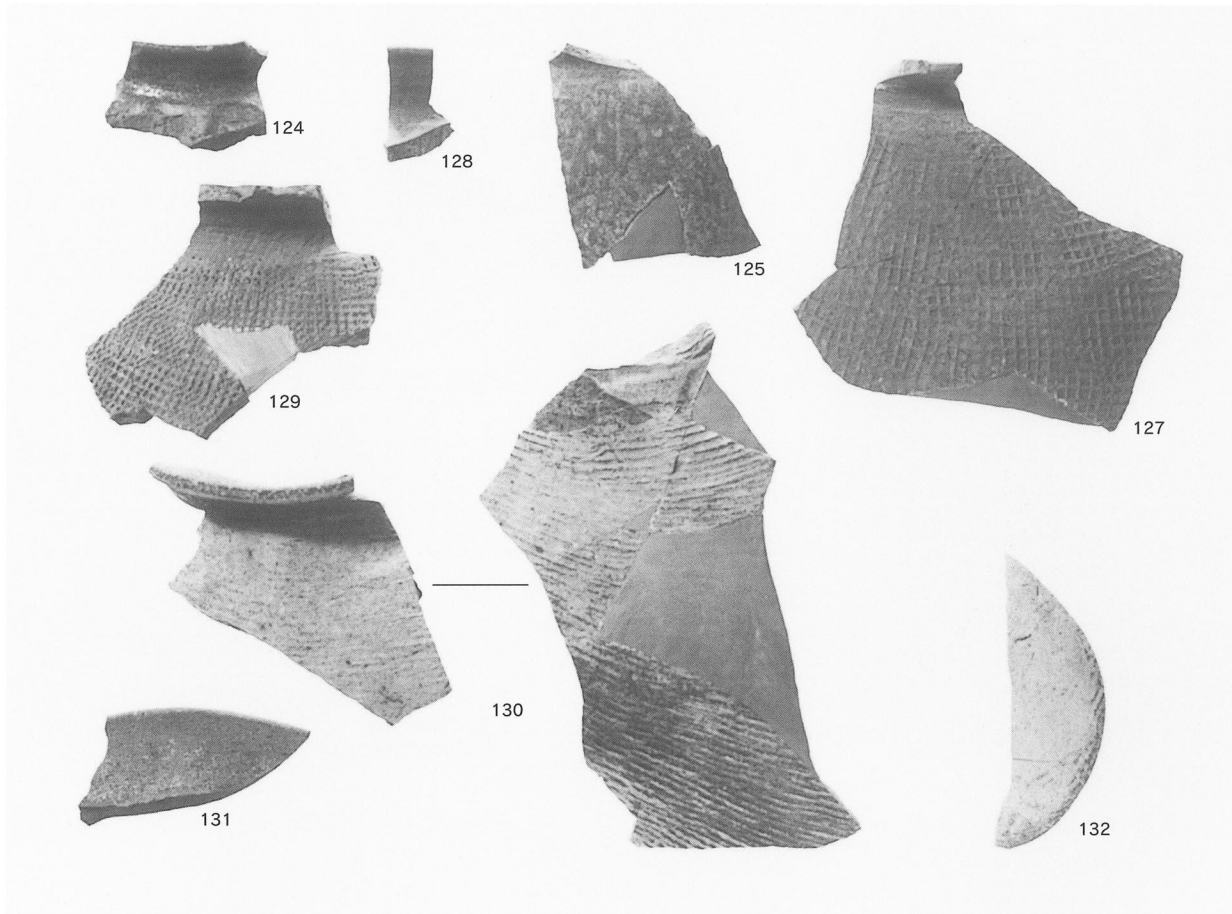
宇都第3遺跡 須恵器 (高台付碗, 遺物番号122)



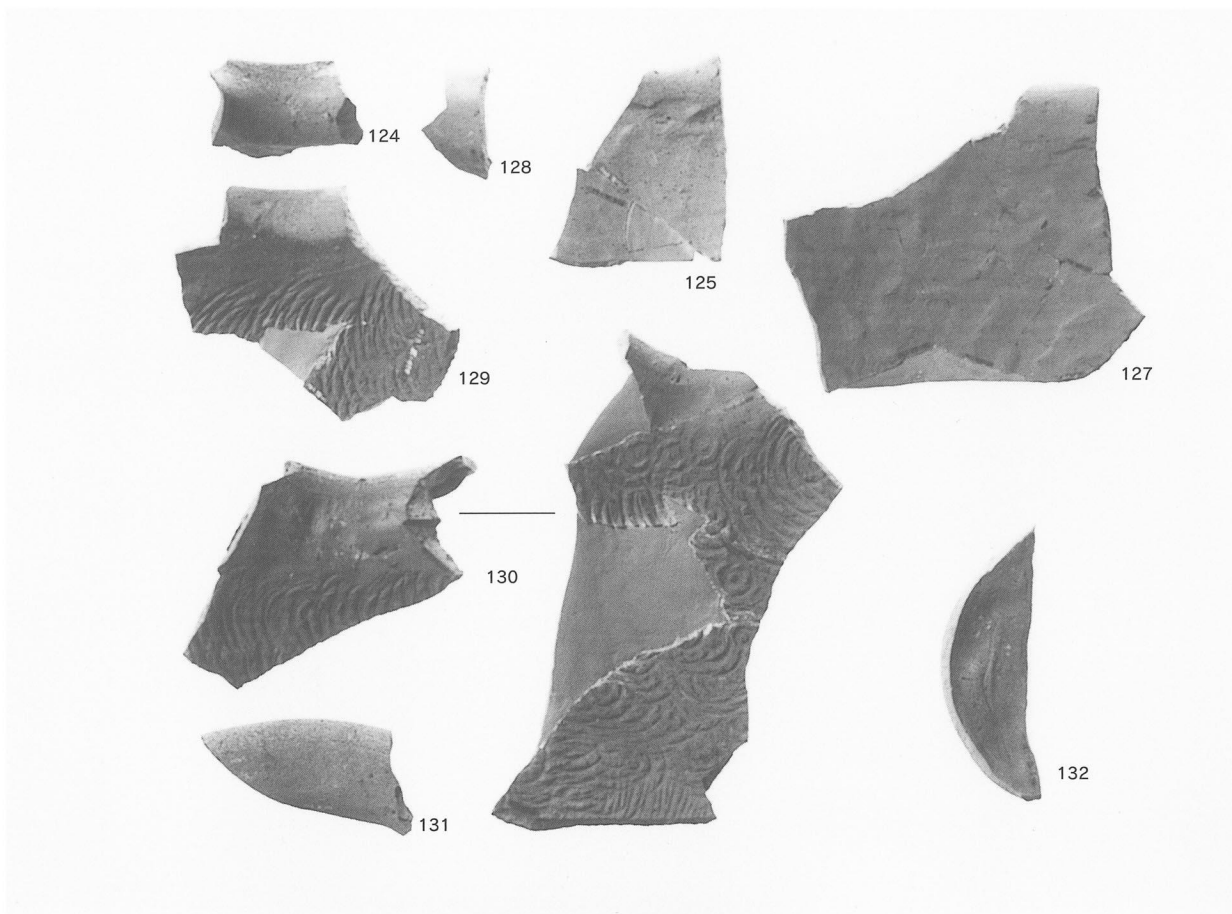
宇都第3遺跡 須恵器 (坏, 左:外面, 右:内面)



宇都第3遺跡 須恵器 (甕, 遺物番号126)



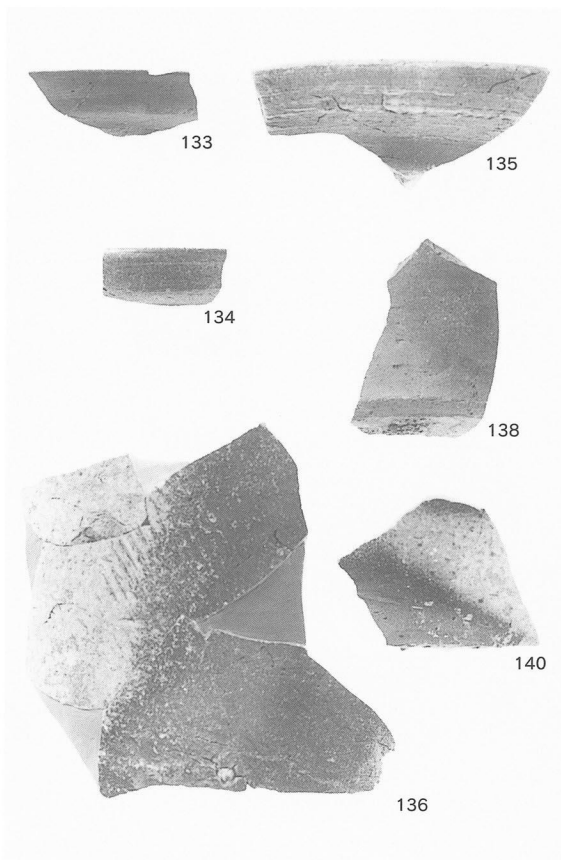
宇都第3遺跡 須恵器 (甕, 外面)



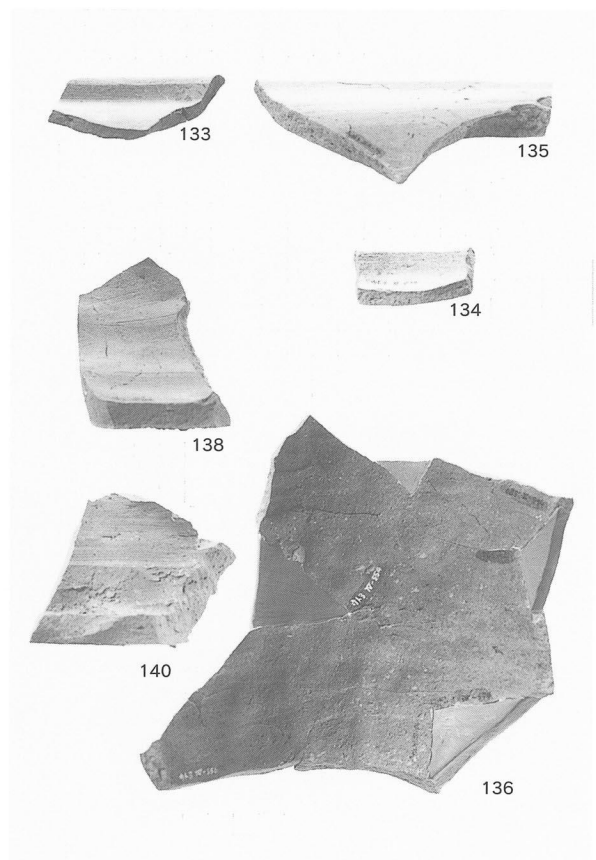
宇都第3遺跡 須恵器 (甕, 内面)



宇都第3遺跡 須恵器 (壺, 遺物番号137・139・141・143)



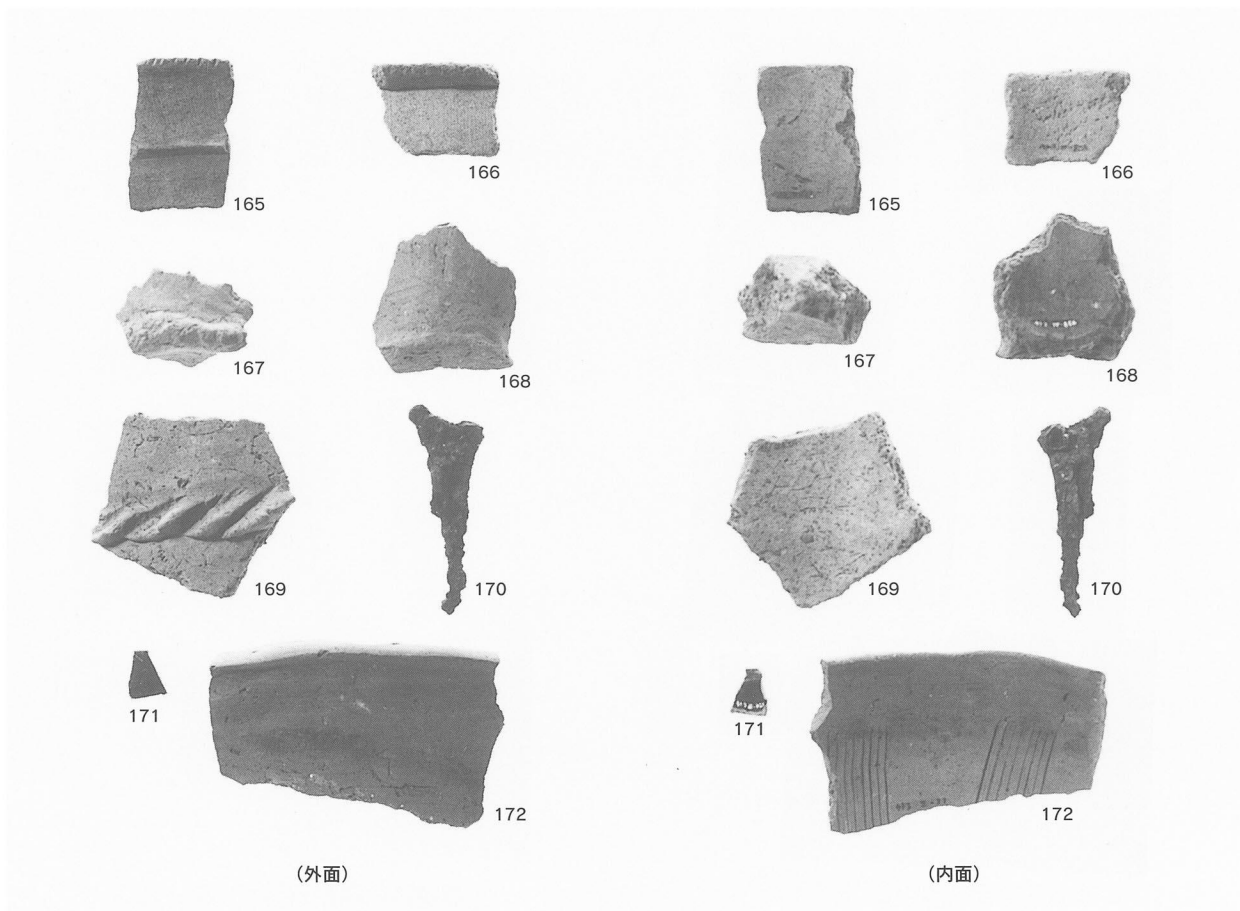
宇都第3遺跡 須恵器 (壺, 外面)



宇都第3遺跡 須恵器 (壺, 内面)



宇都第3遺跡 土製品・金属製品



宇都第3遺跡 その他の時代の遺物 (弥生土器・古墳時代の土師器・鉄鏃・中世陶器)

第Ⅲ章 横市中原遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と環境

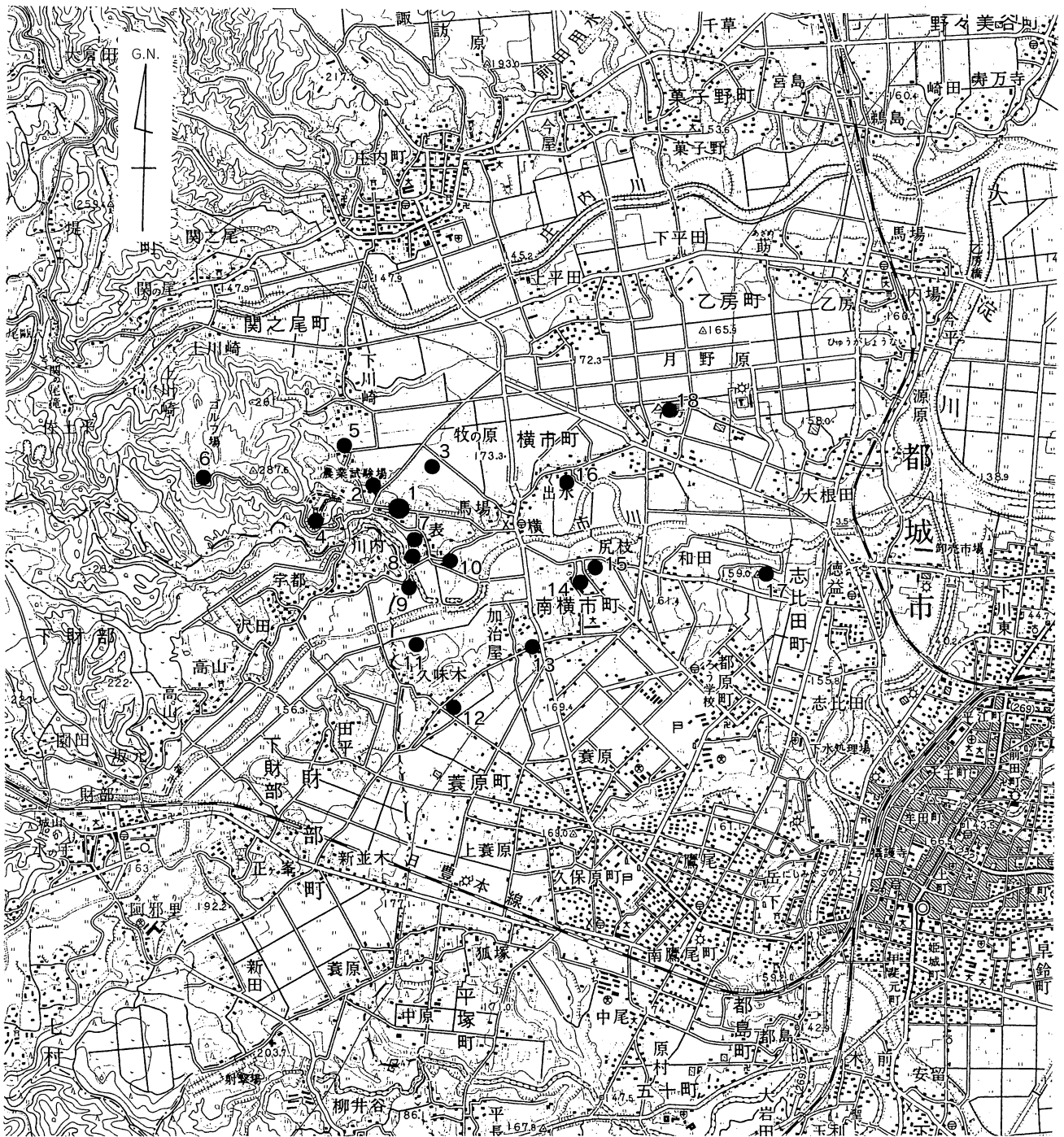
横市中原遺跡は宮崎県都城市横市町6423番地1他に所在する。都城市は、宮崎県の南西部に位置し、東の鱈塚山系や北西の霧島山系をはじめとする山々に囲まれた都城盆地の中央部に位置する。当遺跡は都城市街地から北西に約5.3 km、鹿児島県曾於郡財部町との県境近くにあり、大淀川支流である横市川と庄内川によって南北に挟まれた、標高約180m前後の月野原台地南部に立地している。

当遺跡の周辺には、縄文時代から中世にかけて数多くの遺跡が確認されている。以下、当遺跡を中心として周辺の遺跡を概観してみる（第1図）。

当遺跡に隣接する母智丘原第2遺跡は、古墳時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑などが確認されており、縄文時代後期の土器も出土している。その北東約0.5 kmの牧の原第2遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡や中世の畝状遺構などが確認され、縄文後期から弥生時代にかけての土器や古墳時代や古代の土師器が出土している。母智丘山頂部の母智丘原第1遺跡は、弥生時代中期後半ごろの土器が出土しており、また、山頂部付近では輝石安山岩が採集可能である。北西約0.7 kmには縄文時代中期から後期の遺物を有する竪穴住居跡や近世の溝状遺構などが確認された上牧第2遺跡がある。西約1.5 kmの丘陵上にある丸山遺跡は、縄文早期の集石遺構が検出され、縄文早期の土器が出土している。横市川左岸の低位段丘から低地にかけては中世の水田遺構が確認された畑田遺跡、母智丘谷遺跡、鶴喰遺跡がある。鶴喰遺跡では、縄文時代後期の竪穴住居跡が多数確認されている。鶴喰遺跡の北西部には中世城郭跡である新宮城跡がある。当遺跡対岸の蓑原台地北端の舌状部に立地する中尾山・馬渡遺跡では縄文時代晩期の土坑群、平安時代の掘立柱建物跡とそれに伴う多量の遺物が出土している。特に縄文時代晩期の組織痕土器や平安時代の墨書土器、越州窯系青磁、緑釉陶器の出土が注目される。中尾山・馬渡遺跡の南～東部では縄文時代晩期の水田跡が確認された坂元A遺跡や縄文時代後期の竪穴住居跡と遺物が出土している池原遺跡や加治屋遺跡がある。当遺跡の南東約1.6 kmの蓑原台地北端にある田谷・尻枝遺跡では、縄文時代早期と中期の陥し穴が確認されている。当遺跡の約1.4 km東の横市川北側の低位段丘面上には陥穴遺跡があり、縄文時代晩期から弥生時代前期の集落跡や近世までの水田跡が確認されており、擦切石庖丁の出土が注目される。東南東約2.3 kmの横市川右岸の中位河岸段丘上にある正坂原遺跡は古代末から中世にかけての集落跡が確認されている。

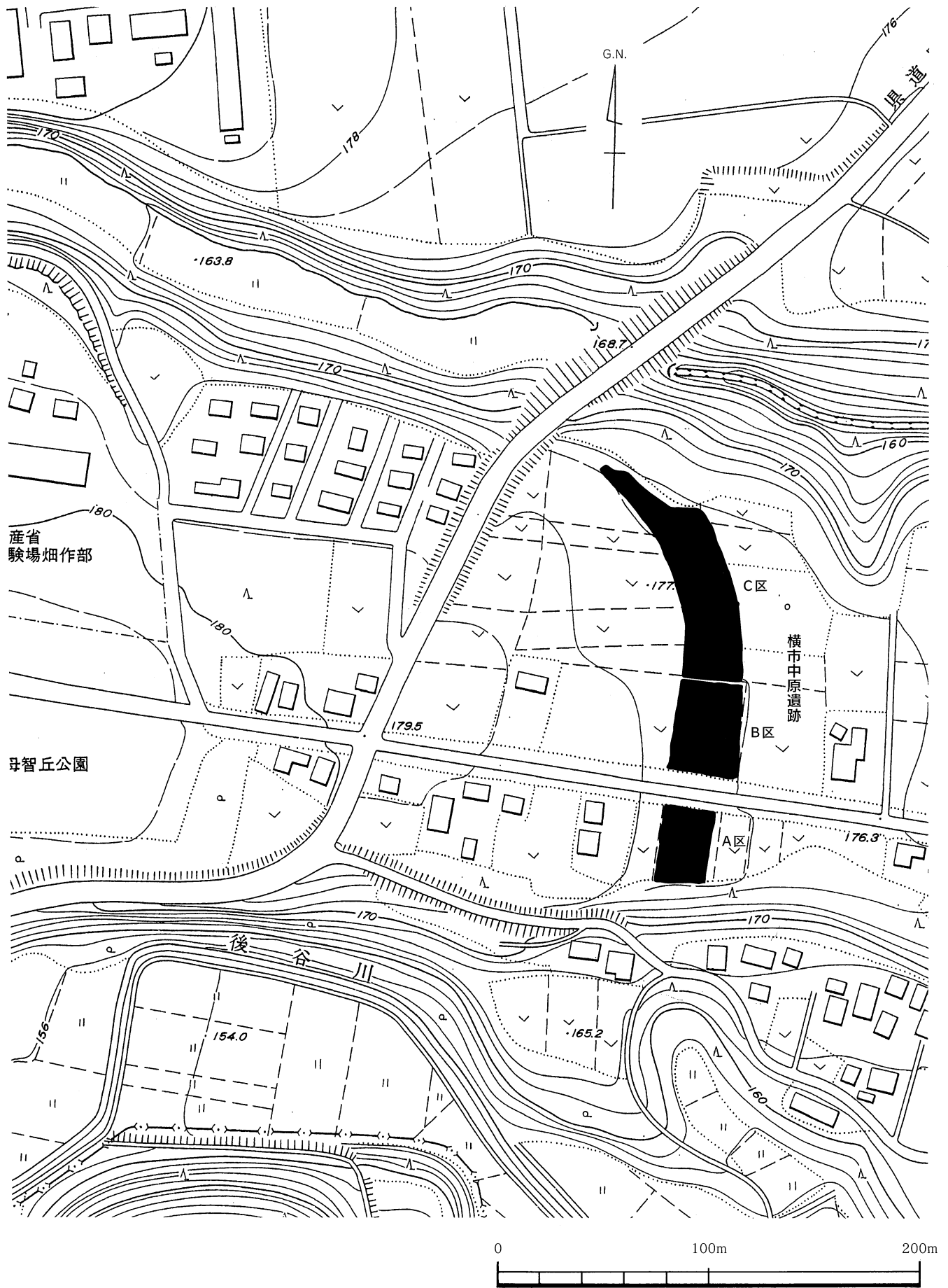
【参考文献】

- | | | |
|--|--------------|------|
| 「都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内中央部）」『都城市文化財調査報告書第5集』 | 都城市教育委員会 | 1986 |
| 「牧の原第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第19集』 | 宮崎県埋蔵文化財センター | 1999 |
| 「上牧第2遺跡 母智丘原第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第18集』 | 宮崎県埋蔵文化財センター | 1999 |
| 「梅北佐土原遺跡 中尾遺跡 蓑原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第42集』 | 宮崎県埋蔵文化財センター | 2001 |
| 「母智丘谷遺跡 畑田遺跡 嫁坂遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第63集』 | 宮崎県埋蔵文化財センター | 2002 |
| 「横市地区遺跡群」『都城市文化財調査報告書第58集』 | 都城市教育委員会 | 2002 |



- | | | |
|-------------|--------------|-------------|
| 1. 横市中原遺跡 | 7. 新宮城跡 | 13. 加治屋遺跡 |
| 2. 母智丘原第2遺跡 | 8. 畑田遺跡 | 14. 田谷・尻枝遺跡 |
| 3. 牧の原第2遺跡 | 9. 母智丘谷遺跡 | 15. 胡摩段遺跡 |
| 4. 母智丘原第1遺跡 | 10. 鶴喰遺跡 | 16. 肱穴遺跡 |
| 5. 上牧第2遺跡 | 11. 中尾山・馬渡遺跡 | 17. 正坂原遺跡 |
| 6. 丸山遺跡 | 12. 池原遺跡 | 18. 月野原第2遺跡 |

第1図 横市中原遺跡及び周辺の遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 横市中原遺跡周辺地形図 (S = 1 / 2,500)



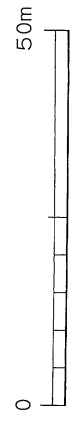
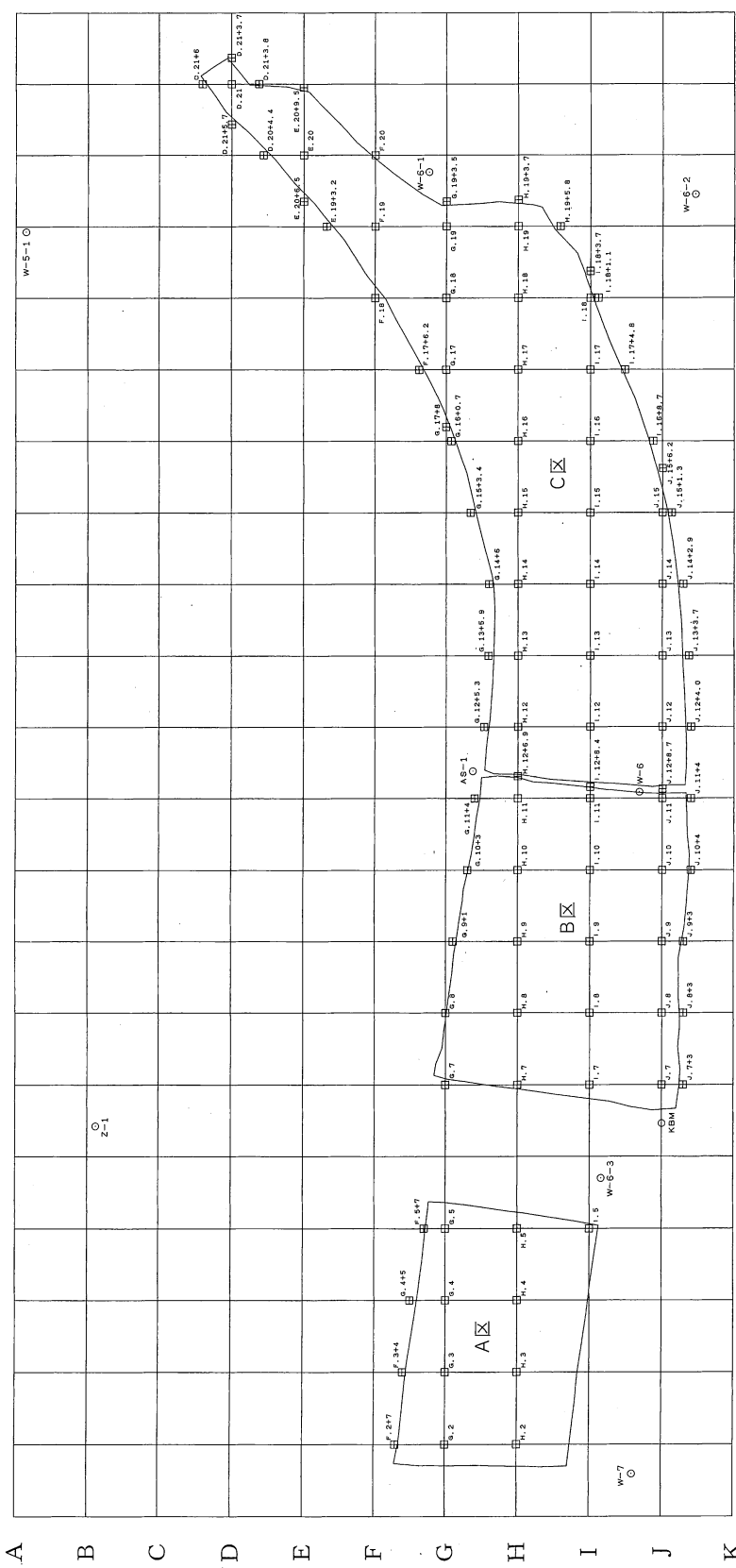
X = -138800

X = -138850

X = -138900

X = -138950

Y=1700
Y=1750
Y=1800



第3図 横市中原遺跡グリッド点配置図 (S=1/1,000)

第2節 調査の経過

調査対象面積は約4,400㎡である。調査区は母智丘桜並木道を南北に挟み、全長が200m以上あり、細長いため、全体を南から「A」・「B」・「C」の3区に分けて調査を進めることにした（第2～3図）。

A区は平成14年11月18日から調査に入り、まず、重機でトレンチを3か所設定し、土層の堆積状況を確認した。その結果、第II層の桜島文明軽石（15世紀後半噴出）の堆積は非常に不安定であることや中世の包含層は、後世の耕作によりほとんど削平及び攪乱を受けていることが判明した。調査では、重機により表土及び黒色土を除去し、その後、人力による除去そして精査作業を行い、褐色土層（第V層）を露出させた。その結果、調査区北側を中心に縄文土器が多量に出土したが、第V層での明確な遺構の確認はできなかった。その後、御池軽石（第VII層御池ボラ）面まで掘り下げ、遺構検出を行い、A区全域では竪穴住居跡、土坑、溝状遺構、その他多数のピットが検出された。平成15年1月28日に第VII層上面での遺構検出状況の空中写真撮影を実施し、また、検出された遺構の実測及び写真撮影などを行い平成15年2月14日にA区の調査を終了した。

B区は平成14年11月19日から調査に入り、A区と同様に重機でトレンチを3か所設定し、土層の堆積状況を確認した。その結果、桜島文明軽石は堆積しておらず、その下層の黒色土層も耕作の影響をかなり受けていることが判明した。土層の堆積確認後、調査はA区と同時並行して実施した。まず、重機により表土及び黒色土を除去し、褐色土層（第V層）上面から人力によって除去し、精査作業を行った。しかし、第V層上面では明確な遺構検出ができなかったため、順次第V層から第VII層の掘り下げを行い、御池軽石面での遺構検出を行った。その結果、B区全域では土坑と多数のピットが検出された。検出された遺構の実測及び写真撮影などを行い、平成15年1月28日に第VII層での遺構完掘状況の空中写真撮影をA区と同時に実施し、B区の調査を終了した。

C区は平成15年1月21日から人力でトレンチを7か所設定し、土層の堆積状況を確認した。その結果、B区に隣接する箇所では耕作の影響を受けており、包含層は攪乱されていることが判明した。西側では土層が良好に堆積しており、A区同様に第V層から遺物が出土した。北側では第II層から（桜島文明軽石層）から小溝状遺構が確認された。調査では、土層の堆積状況の結果を踏まえて、北側では重機で表土を除去した段階で小溝状遺構の検出を行い、桜島文明軽石が堆積していない部分については第V層上面まで重機で掘り下げた。B区に隣接する箇所では第VII層上面まで重機による掘り下げを行い、遺構の検出を行った。西側では第V層まで重機による掘り下げを行った結果、広い範囲で遺物が多量に出土した。しかし、明確な遺構検出ができなかったため、第VII層上面まで人力で掘り下げ、遺構検出を行った。その結果、C区全域では竪穴住居跡、土坑、その他多数のピットを検出したが、A・B区同様に掘立柱建物跡と思われるようなピットは検出されなかった。平成15年2月28日に第VII層での遺構検出状況の空中写真撮影を実施し、検出された各遺構の実測及び写真撮影などを行いC区の調査を終了し、平成15年3月18日に現地調査のすべてを終了した。

第3節 基本層序

横市中原遺跡の基本層序を第4図に示した。第I層は表土で、最近まで耕作土（畑）として利用されていた。第II層は、灰白色軽石粒の堆積層である。この軽石は、桜島文明軽石（桜島起源—15世紀後半

噴出)層であると考えられる。僅かにC区の北西部で堆積が認められる。小溝状遺構の検出面である。第Ⅲ層は、黒色土層(クロニガ)である。しまりがあり、粘性がやや強い。この層も僅かにC区の北西部で堆積が認められる。第Ⅳ層はややしまりのある黒色土層で古代の遺物包含層である。A・B区では耕作のためほとんど消失している。第Ⅴ層は御池軽石を全体に含む暗褐色土層であり、しまりはやや弱い。縄文時代後期～古墳時代の遺物包含層であると考えられる。B区では耕作のため、ほとんど消失している。第Ⅵ層は御池軽石を全体に含む黒褐色土層である。下層になるほど御池軽石粒が多く混在し、しまりが強くなる。第Ⅶ層は約4,200年前に霧島火山御池火口より噴出した火山灰の御池降下軽石層で硬くしまっているが、くずれやすい。御池ボラともいう。調査区全体に約1～1.3mほど堆積しており、遺構検出面である。第Ⅷ層は、細粒の黒色土で、しまりが強くやや軟らかい。第Ⅸ層は黄褐色土層で約6,300年前に鬼界カルデラより噴出した鬼界アカホヤ火山灰層である。調査においては、この鬼界アカホヤ火山灰層までトレンチ調査法によって掘り下げ、遺構・遺物の確認を行った。

Ⅰ	第Ⅰ層 表土(現在の耕作土である。砂質でしまりは弱い。層厚は30～40cm。)
Ⅱ	第Ⅱ層 灰白色軽石層(15世紀に後半に噴出した桜島文明軽石層である。しまりは弱く、くずれやすい。層厚は5～10cm。)
Ⅲ	第Ⅲ層 黒色土層(クロニガと呼ばれる層でしまりがあり粘性がやや強い。層厚は2～4cm。)
Ⅳ	第Ⅳ層 黒色土層(細粒の黒色土でありややしまっている。層厚は5～10cm。)
Ⅴ	第Ⅴ層 暗褐色土層(直径1～5mm程度の御池軽石を全体に含み、しまりはやや弱い。層厚は10～25cm。)
Ⅵ	第Ⅵ層 黒褐色土層(直径1～5mm程度の御池軽石を全体に含み、下層になるほど御池ボラ粒が多量に含まれ、しまりが強くなる。層厚は15～30cm。)
Ⅶ	第Ⅶ層 明黄褐色土層(霧島火山御池火口から噴出した御池軽石層である。硬くしまっているがくずれやすい。層厚は1.0～1.3m程度。)
Ⅷ	第Ⅷ層 黒色土層(細粒の黒色土。しまりがあり、軟らかい。層厚は30cm程度。)
Ⅸ	第Ⅸ層 黄褐色土層(アカホヤ火山灰層である。細粒で粘性が少しあり、軟らかい。層厚は不詳。)

第4図 基本層序柱状図

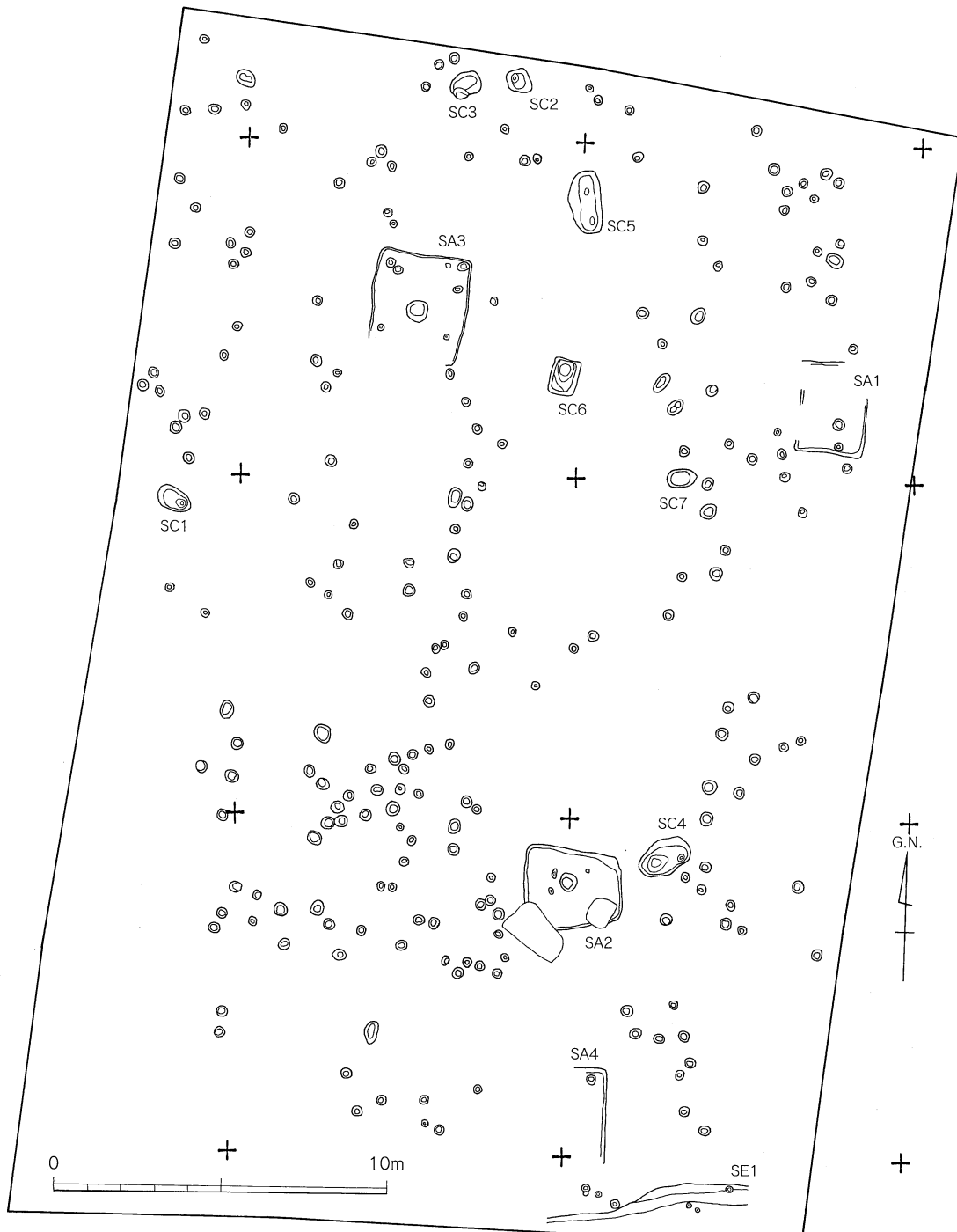
第4節 調査の記録

1 遺構

(1) A区の遺構 (第5図)

A区の調査対象面積は約830㎡である。A区は、調査対象区の南端に位置し、標高は176.6m～176.9m、南向きの斜面をもつ舌状台地の縁辺部に位置する。御池軽石面(第Ⅶ層)での遺構検出を行った結果、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての竪穴住居跡(SA)4軒、土坑(SC)7基、南側の台地縁辺部分に沿う形で時期不明の溝状遺構(SE)1条、その他調査区全体に多数のピットを検出した。

以下、遺構ごとにその特徴と出土遺物について記述する。



第5図 横市中原遺跡 A区 遺構分布図 (S = 1/200)

縄文時代

竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（SA1、第6図）

SA1は調査区の北部東側、H4グリッドの第Ⅶ層上面で検出した。主軸方位はN-7°-Eを指す。ほぼ床面だけの検出となったが、平面プランは僅かに残存する壁面から規模が長軸約2.66m、短軸約2.0mで方形を呈するものと思われる。検出面からの床面までの深さは約0.08mを測る。床面は全体的に平坦で硬化している。住居の埋土は、御池軽石を混入する黒色土である。住居南西部に直径約0.36mの柱穴を1基検出した。底面からの深さは約0.37mを測る。

遺物は縄文土器片が床面から数点出土した。

2号竪穴住居跡（SA2、第6図）

SA2は調査区南側、G2・H2グリッドの第Ⅶ層上面で検出した。主軸方位はN-2°-Eを指す。平面プランは、規模が長軸約2.92m、短軸約2.28mで隅丸方形を呈するものと思われる。検出面からの床面までの深さは約0.20mで床面は西側に若干傾斜する。住居の埋土は、御池軽石を混入する黒褐色土を主体とし、人為的な乱れはあまり認められないことから自然堆積したものと考えられる。住居中央部には直径約0.5mの焼土坑を配し、床面からの深さは約0.44mを測る。土坑内から土器片がまとまって出土した。この土坑埋土を水洗したところ、炭化した種子、輝石安山岩の破片を得ることができた。焼土坑のまわりに直径約0.20~0.32m、床面からの深さ約0.18mの柱穴を2基検出した。

出土遺物は第9図に示している。1は深鉢の胴部で胴上半部と思われる。内外面とも縦方向のナデである。外面にはススが付着している。126は深鉢の口縁部から胴部である。外面はミガキでススが付着している。内面はナデで、口縁部付近は黒変している。石器は203の敲石1点のみである。両端部には敲打痕が見られる。利用石材は砂岩である。

3号竪穴住居跡（SA3、第7図）

SA3は調査区の北側、G4グリッドの第Ⅶ層上面で検出した。主軸方位はN-9°-Eを指す。住居跡南側が少し消失している。平面プランは、規模が長軸推定約3.14m、短軸約2.92mで方形を呈するものと思われる。検出面からの床面までの深さは約0.18mを測る。床面は全体的に平坦で硬化している。住居の埋土は、御池軽石を混入する黒褐色土を主体とし、乱れはあまり認められないことからある程度自然堆積したものと考えられる。柱穴は4基検出した。中央に直径0.64m、床面からの深さ約0.32mの土坑を配する住居跡である。

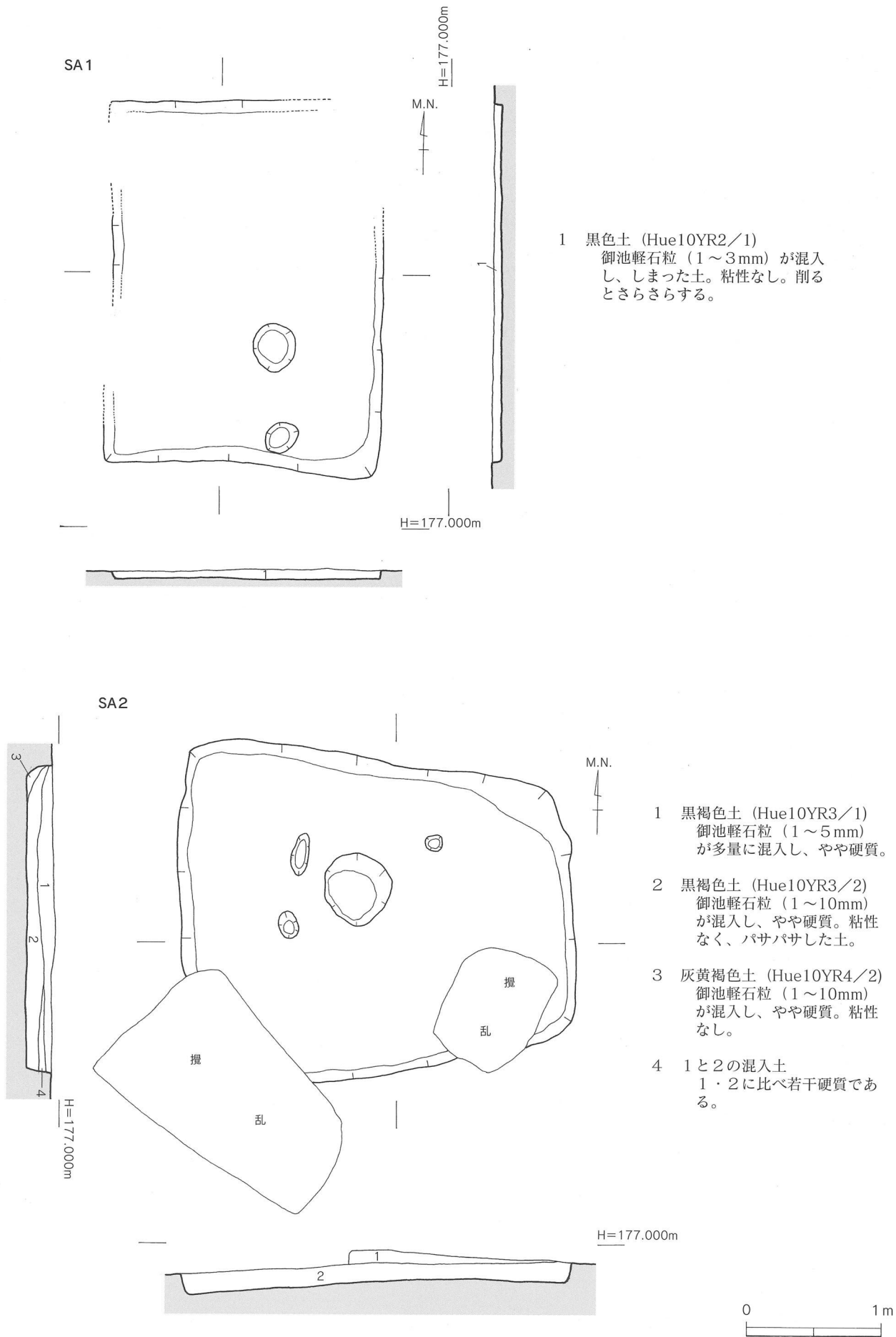
遺物は縄文土器片が床面から数点出土した。

土坑

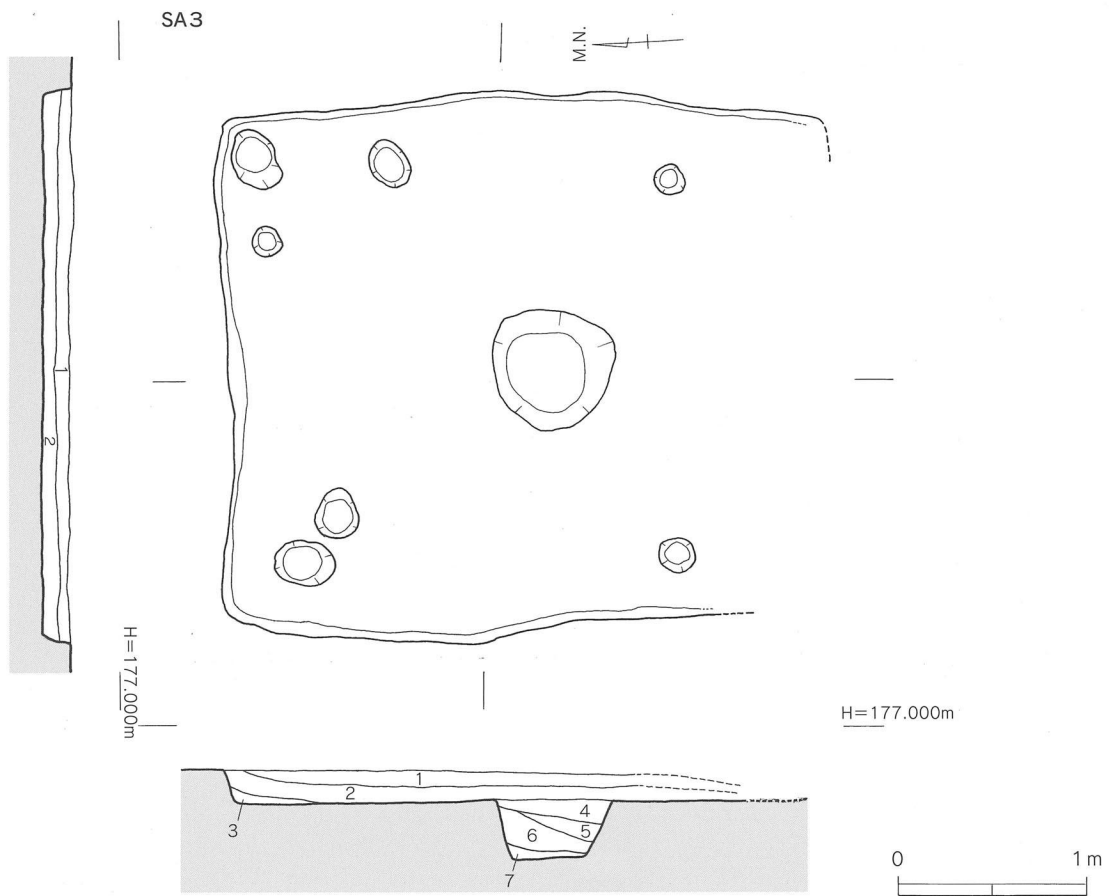
樹木の根穴との区別が難しい点もあるが、埋土がレンズ状に自然堆積しているものを土坑とした。SC4とSC6では縄文土器が出土したが、他の土坑は縄文土器は出土していない。しかし、埋土状況がSC4やSC6と似ているため、すべて縄文時代の土坑として捉えた。

SC1（第8図）

SC1は調査区の西側、F3グリッドの第Ⅶ層上面で検出した。平面プランは長軸約1.06m、短軸約0.64mの楕円形を呈し、検出面から最深部までは約0.44mを測る。検出面から底面に向かって、北西側に1段のテラスをつくり、南東部の最深部に至る。埋土は御池軽石混黒褐色土や御池軽石混黒色土がレ



第6図 横市中原遺跡 A区 SA1およびSA2実測図 (S=1/40)



- | | |
|----------------------|--|
| 1 黒色土 (Hue10YR2/1) | 御池軽石粒 (1~3mm) が均一に混入。しまりはなく、サラサラした土。 |
| 2 黒褐色土 (Hue10YR3/1) | 御池軽石粒 (1~3mm) がわずかに混入。ややしまりあり。 |
| 3 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) | 御池軽石粒 (1~3mm) が混入。しまりがあり、サラサラしている。 |
| 4 黒褐色土 (Hue10YR3/1) | 御池軽石粒 (1~3mm) がわずかに混入。2に比べ若干軟質。炭化物は含まない。しまりあり。 |
| 5 黒褐色土 (Hue7.5YR3/1) | 御池軽石粒 (1~5mm) が混入。若干軟質でしまりなし。粘性あり。炭化物は含まない。 |
| 6 黒褐色土 (Hue7.5YR3/1) | 御池軽石粒 (1~10mm) が混入。若干軟質。炭化物は含まない。 |
| 7 黒色土 (Hue10YR2/1) | 御池軽石粒 (1~10mm) が混入。非常にしまっている。炭化物は含まない。 |

第7図 横市中原遺跡 A区 SA3実測図 (S=1/40)

レンズ状に堆積している。用途については不明である。

SC2 (第8図)

SC2は調査区の北側、G5グリッドの第Ⅶ層上面で検出した。平面プランは長軸約0.82m、短軸約0.68mの不定円形を呈し、検出面から最深部までは約0.36mを測る。北西側に検出面からの深さ約0.60mのピットが穿たれている。埋土は御池軽石混黒褐色土や御池軽石混黒色土や灰黄褐色土がレンズ状に堆積している。用途については不明である。

SC3 (第8図)

SC3は調査区の北側、SC2の西約0.8mに隣接し、G5グリッドの第Ⅶ層上面で検出した。平面プランは長軸約0.88m、短軸約0.68mの楕円形を呈し、検出面から最深部までは約0.28mを測る。南西部に樹木の根穴らしきピットが見られる。埋土は御池軽石混黒褐色土や御池軽石混黒色土がレンズ状に堆積している。用途については不明である。

SC4 (第8図)

SC4は調査区の東側、SA2の東約0.5mに隣接し、H2グリッドの第Ⅶ層上面で検出した。平面プランは長軸約1.60m、短軸約1.06mの楕円形を呈し、検出面から最深部までは約0.84mを測る。検出面から底面に向かって南西側と北東側にそれぞれ1段のテラスをつくり最深部に至る。東側には検出面から深さ約0.36mのピットが穿たれている。埋土は御池軽石混黒褐色土や御池軽石混黒色土がレンズ状に堆積している。用途については不明である。

出土遺物は第9図に示している。2は深鉢の胴部である。内面は貝殻条痕、外面は板状工具によるナデが施されており、外面はススが付着している。西側ピットの床面よりやや浮いた状態で出土した。

SC5 (第8図)

SC5は調査区の北側、SC2の南東約2.8mに隣接し、G4・H4グリッドの第Ⅶ層上面で検出した。平面プランは長軸約1.86m、短軸約0.96mの隅丸長方形を呈し、検出面から最深部までは約0.26mを測る。北側と南側ではそれぞれ検出面からの深さ約0.42mと0.36mのピットを検出している。埋土は御池軽石混黒褐色土や御池軽石混黒色土が堆積している。用途については不明である。

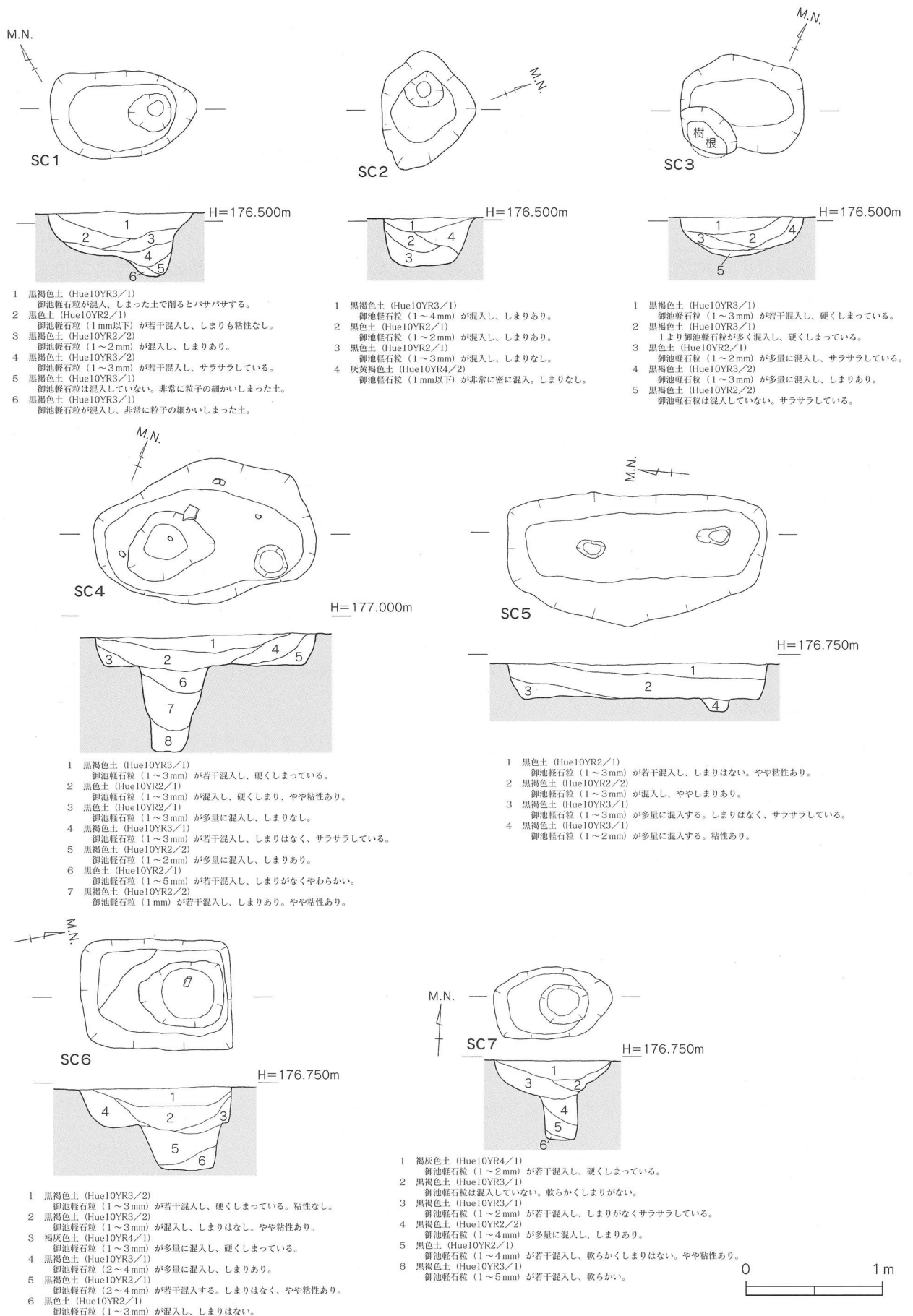
SC6 (第8図)

SC6は調査区の北側、SA3の東約3mに隣接し、G4グリッドの第Ⅶ層上面で検出した。平面プランは長軸約1.08m、短軸約0.80mの隅丸長方形を呈し、検出面から最深部までは約0.60mを測る。南側に1段のテラスをつくり最深部に至る。テラスまでの深さは約0.28mを測る。埋土は御池軽石混黒褐色土や御池軽石混黒色土や御池軽石混褐灰色土がレンズ状に堆積している。用途については不明である。

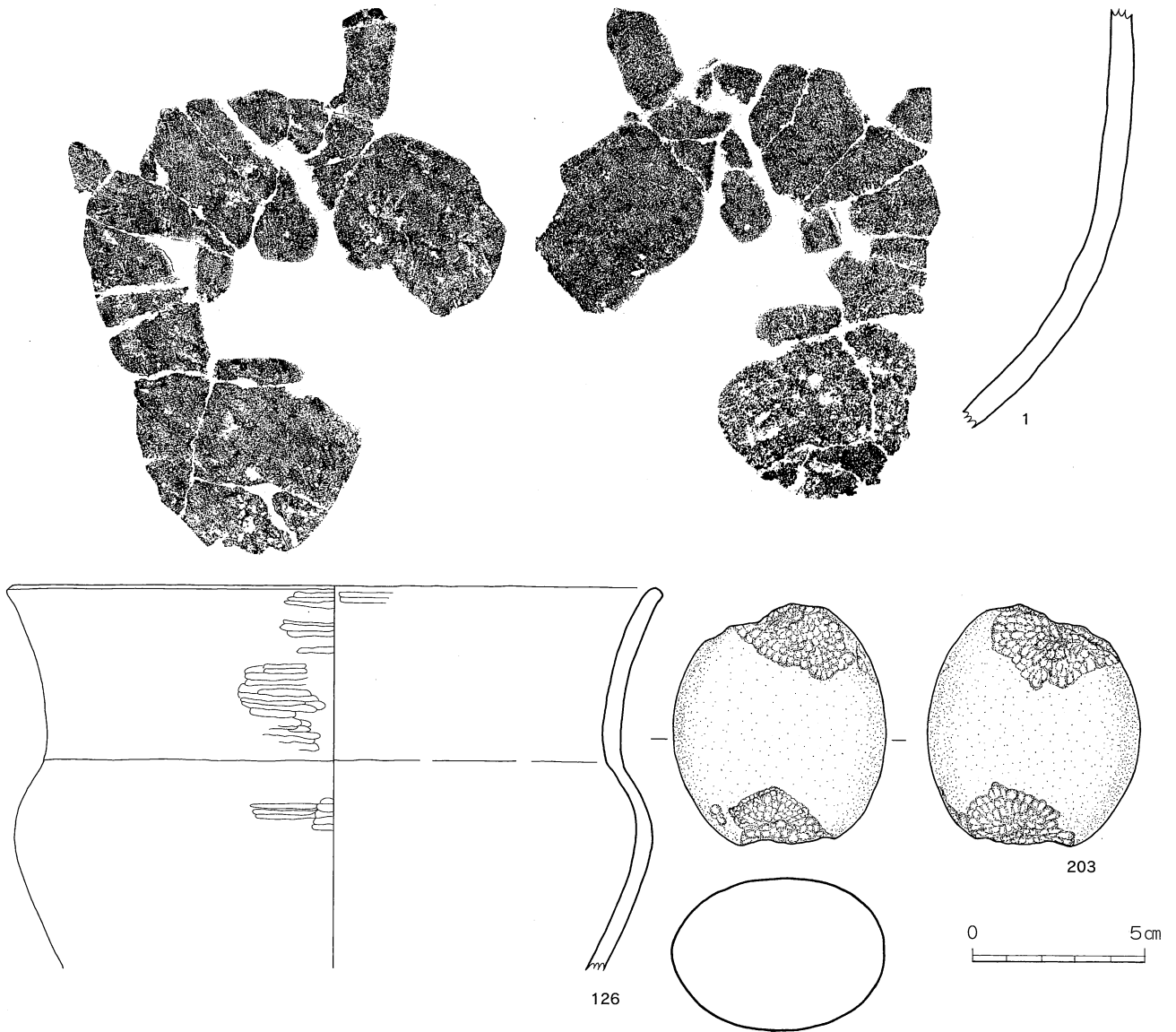
出土遺物は第9図に示している。3は粗製浅鉢の底部で、外面は網布圧痕が見られる。網布は緯糸が細く目も密である。内面は丁寧なナデにより調整を行っている。北側ピットの床面よりやや浮いた状態で出土した。

SC7 (第8図)

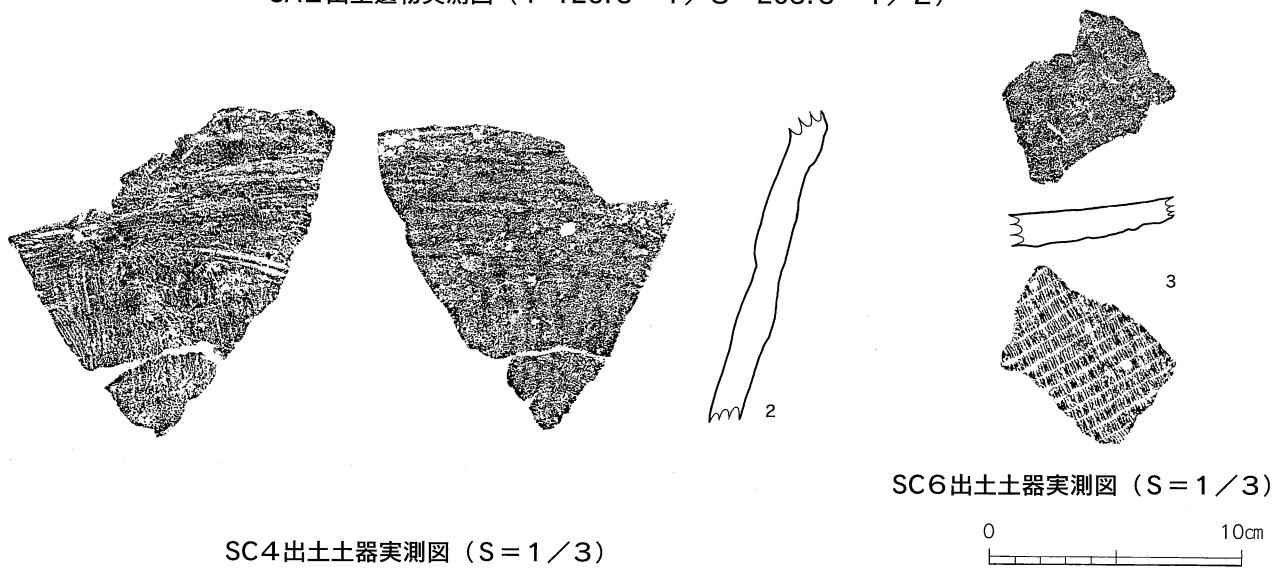
SC7は調査区の東側、H3・H4グリッドの第Ⅶ層上面で検出した。平面プランは長軸約0.86m、短軸約0.52mの楕円形を呈し、中央部に長軸約0.24mのピットが穿たれ、検出面から最深部までは約0.58mを測る。埋土は御池軽石混黒褐色土や御池軽石混黒色土や御池軽石混褐灰色土がレンズ状に堆積している。用途については不明である。



第8図 横市中原遺跡 A区 SC1・2・3・4・5・6・7実測図 (S=1/40)



SA2出土遺物実測図 (1・126.S = 1/3 203.S = 1/2)



SC4出土土器実測図 (S = 1/3)

SC6出土土器実測図 (S = 1/3)

第9図 横市中原遺跡 A区 SA2・SC4・SC6出土遺物実測図 (S = 1/3 203はS = 1/2)

弥生時代

竪穴住居跡

4号竪穴住居跡（S A 4、第10図）

S A 4は調査区南側、H 1・H 2グリッドの第Ⅶ層上面で検出した。住居の過半は消失しているが、平面プランは僅かに残存する壁面から規模約一辺3 m×3 m以上の方形を呈するものと思われる。検出面から床面までの深さは約0.32 mを測る。床面は全体的に平坦で硬化している。住居の隅に直径約0.28 m、床面からの深さ約0.16 mの柱穴を1か所検出した。住居の埋土は、御池軽石を混入する黒褐色土と黒色土が自然堆積したものと考えられる。住居床面の埋土を分別したところ、輝石安山岩の破片、炭化物を得ることができた。遺物は弥生時代の甕や壺などが床面もしくは床面よりやや浮いた状態で出土しているため、弥生時代の竪穴住居跡であると推測される。

出土遺物は第10図に示している。127は壺の口縁部から胴部である。口縁部が外反し、胴部が膨らむものである。外面はナデを施し、胴部上部には4条の沈線文を施している。内面はヘラ状工具によるナデを施している。128は頸部から胴部にかけての壺形土器の小片である。外面は横方向のミガキを施し、頸部には刻目貼付突帯を持つものである。内面は斜め方向のミガキが施されている。129は壺の底部である。外面は横方向のミガキ、内面はナデが施されている。130は甕の口縁部から胴部である。外面は横方向のナデが施されており、口縁部には貼付突帯の上に連続押圧刻みと胴部屈曲部には刻目貼付突帯を持つものである。内面はナデが施されている。石器は204の磨石1点のみである。ほとんど欠損しているが、平面形態は円形を呈すると思われる。両面に擦り痕、側縁にはわずかに敲打痕も見られる。石材は砂岩である。

時期不明の遺構

ここで記述する遺構については、遺構形態や埋土状況からみてある程度時期の推定は可能であるが、決定要因となる遺物の出土状況がないこと、遺物が出土していても流れ込みの可能性があることから時期不明の遺構としている。

遺構は、第Ⅶ層上面で検出した溝状遺構1条、ピット群である。

溝状遺構

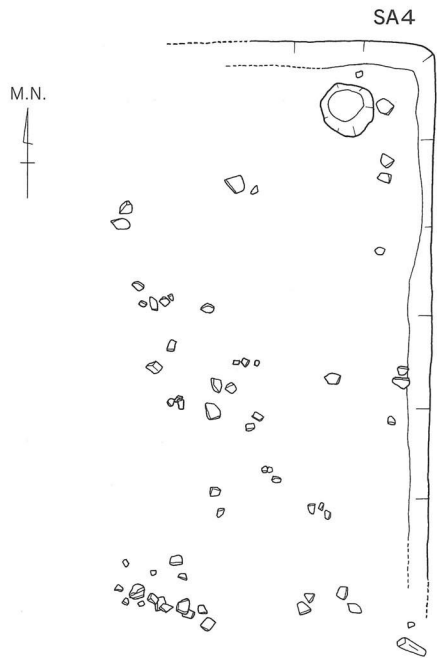
S E 1（第11図）

S E 1は調査区南側の台地縁辺部分に沿う形でG 1・H 1の第Ⅶ層上面で検出した。東から西に向かって延びていると思われる。南側は遺構が浅くなるとともに削平を受けているため途中で消失する。東側はさらに延びるとと思われる。検出した範囲での検出面から最深部までは約0.58 mを測る。

出土遺物は第11図に示している。205は磨製石斧の刃部破片で、砂岩製である。

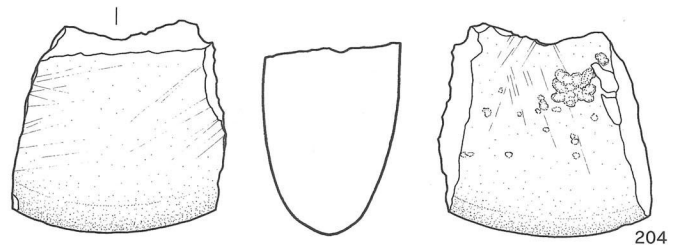
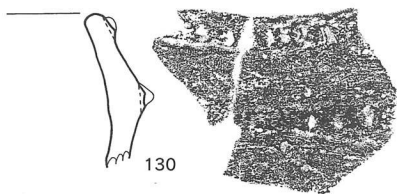
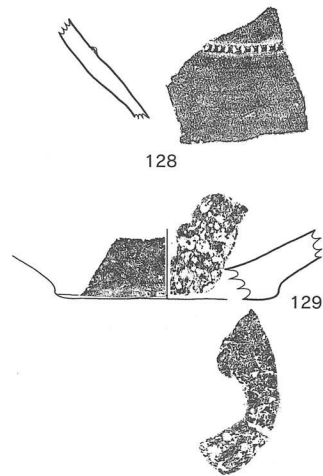
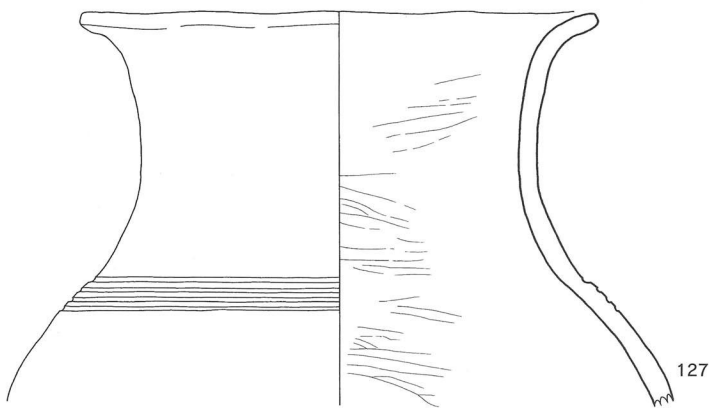
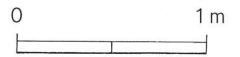
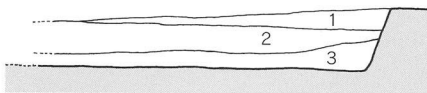
ピット群（第5図）

調査区内で多数のピットを検出した。埋土は御池軽石混暗褐色土と御池軽石混黒褐色土の2種類に分けられる。大きさにはかなりのばらつきがあり、掘立柱建物跡の柱穴としてまとまるものは確認できなかった。こうしたピット群の性格はよく解らず、ピットによっては、壁面や底面は歪みあるいは凹凸が著しいものも見られ、調査区周辺には杉などの大木が広く生育していることから、樹木の根穴の可能性も考えられる。

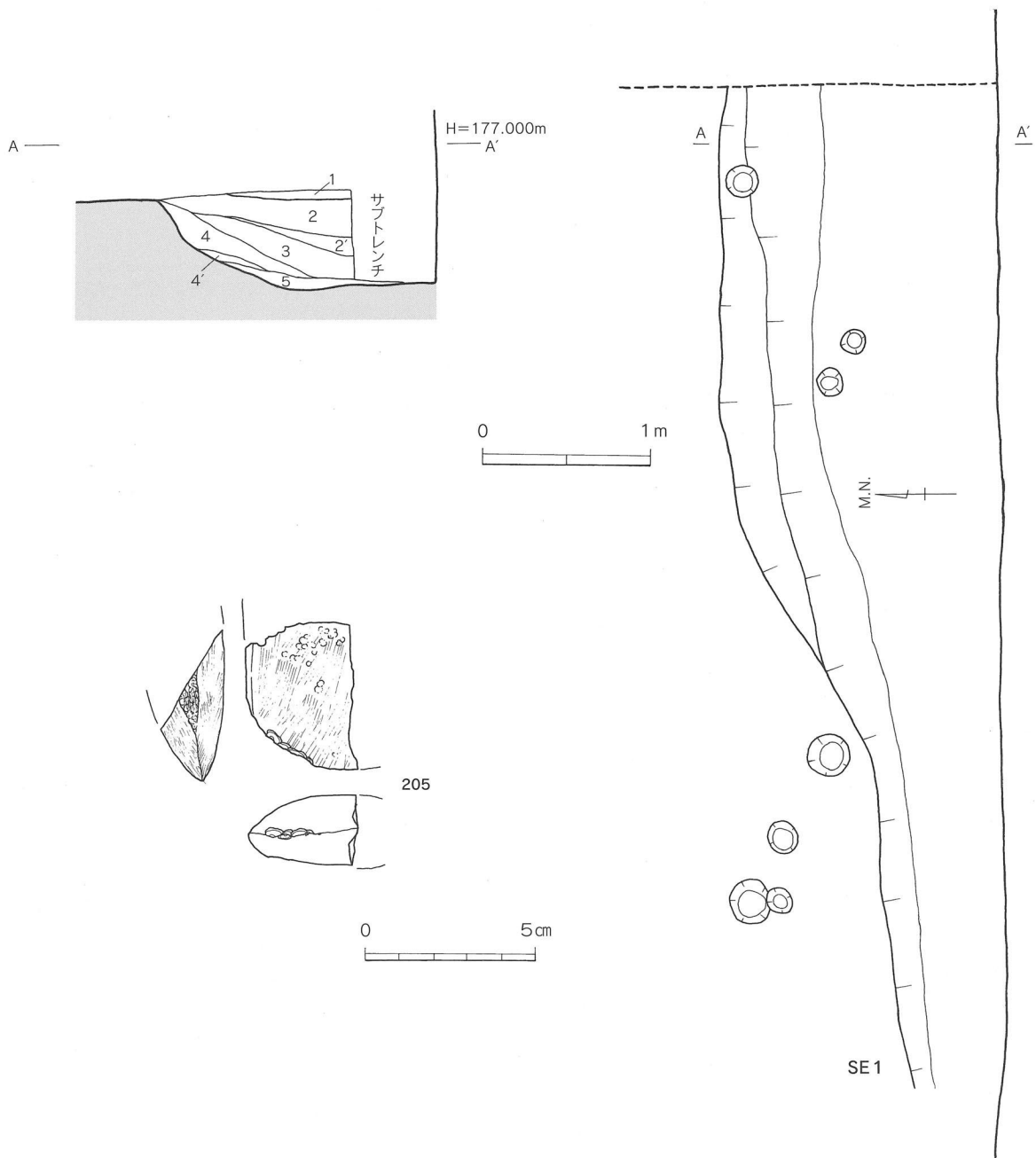


- 1 黒褐色土 (Hue10YR3/1)
御池軽石粒 (1~3mm) がわずかに混入。粘性及びし
まりはなく、やわらかい。
- 2 黒色土 (Hue10YR2/1)
御池軽石粒 (1~8mm) が混入。ややしまりはあり。
削るとサラサラしている。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR2/2)
御池軽石粒 (1~8mm) が混入。ややしまりあり。

H=177.000m



第10図 横市中原遺跡 A区 SA4実測図 (S=1/40)
および出土遺物実測図 (S=1/3 204はS=1/2)



- 1 桜島文明軽石
- 2 黒褐色土 (Hue10YR3/1)
- 2' 黒褐色土 (Hue10YR3/1)
- 3 黒褐色土 (Hue10YR3/1)
- 4 黒褐色土 (Hue10YR3/2)
- 4' 黒褐色土 (Hue10YR3/2)
- 5 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2)

上部に桜島文明軽石が若干混入する。全体的に御池軽石粒 (1~3mm) が混入し、やや軟質である。ブロック状に削れる。

2より御池軽石粒が多く混入する。

やや軟質で全体的に御池軽石粒 (1~3mm) が混入し。削ると粒子が細かい。粘性はない。

やや硬質で3より御池軽石粒が多く混入する。

4より御池軽石粒が多く混入する。

やや硬質で、御池軽石粒 (1~3mm) を全体的に混入する。やや粘性あり。

第11図 横市中原遺跡 A区 SE1実測図・土層断面図 (S=1/40) および出土石器実測図 (S=1/2)

(2) B区の遺構 (第12図)

B区の調査対象面積は約1,350㎡である。B区は調査対象区の中央に位置し、標高は176.6m～177.0mで、東向きにゆるやかに傾斜している。ゴボウの耕作のためのトレンチャーが数10cmおきに深さ1mも入り込んで御池軽石層まで達するという攪乱の激しい状況が見られ、遺構の検出が困難であった。まず、暗褐色土層(第V層)面での遺構検出を行った結果、土坑1基を検出した。また、その後、御池軽石層(第VII層)上面での遺構検出を行った結果、土坑2基と多数のピットを検出した。A区同様、明確に掘立柱建物跡と思われるようなピットは検出されなかった。

以下、遺構ごとにその特徴と出土遺物について記述する。

古墳時代

土坑

SC1 (第13図)

SC1は調査区の南側、I7グリッドの第V層上面で検出した。平面プランは、長軸約1.48m、短軸約1.24mの円形を呈し、検出面から床面までは約1.28mを測る。床面中央部には床面からの深さ約0.12mのピットが穿たれている。埋土は御池軽石混黒褐色土や御池軽石混暗褐色土や御池軽石混黄褐色土が自然堆積している。SC2が第V層からの掘り込みであることから、第V層から検出したSC1は古墳時代の土坑に帰属すると思われる。用途については不明である。土坑内から遺物は出土していない。

SC2 (第13図)

SC2は調査区の南側、H7グリッドの第VII層上面で検出した。第V・VI層上面で遺物が出土し、平面プランを検出しようとしたが難しく、その後、掘り下げた結果、第VII層上面で確認することができた。平面プランは、ゴボウトレンチャーによる攪乱が南北に走っているため、全体を明確に検出することはできなかったが、長軸推定約1.06m、短軸約1.04mの円形を呈し、検出面から最深部までは、約0.11mを測る。この土坑に伴う古墳時代の甕などが検出面の上層である第V層で出土していることから第V層からの掘り込みであると考えられる。用途については不明である。

出土遺物は第13図に示している。132は甕の口縁部から胴部である。外面は口縁部に横ナデ、胴部にナデが施され、一部黒変している。頸部に刻目突帯を持ち、口縁部は緩く外反している。工具による刻目痕がはっきり残っている。内面はナデが施され、指頭痕が見られる。133も甕の口縁部から胴部である。口縁部が外反し、胴部が若干膨らんでいる。外面は粗なナデを施す。内面は口縁部を横ナデ後ナデ、胴部はハケ目を施し、黒く変色している。

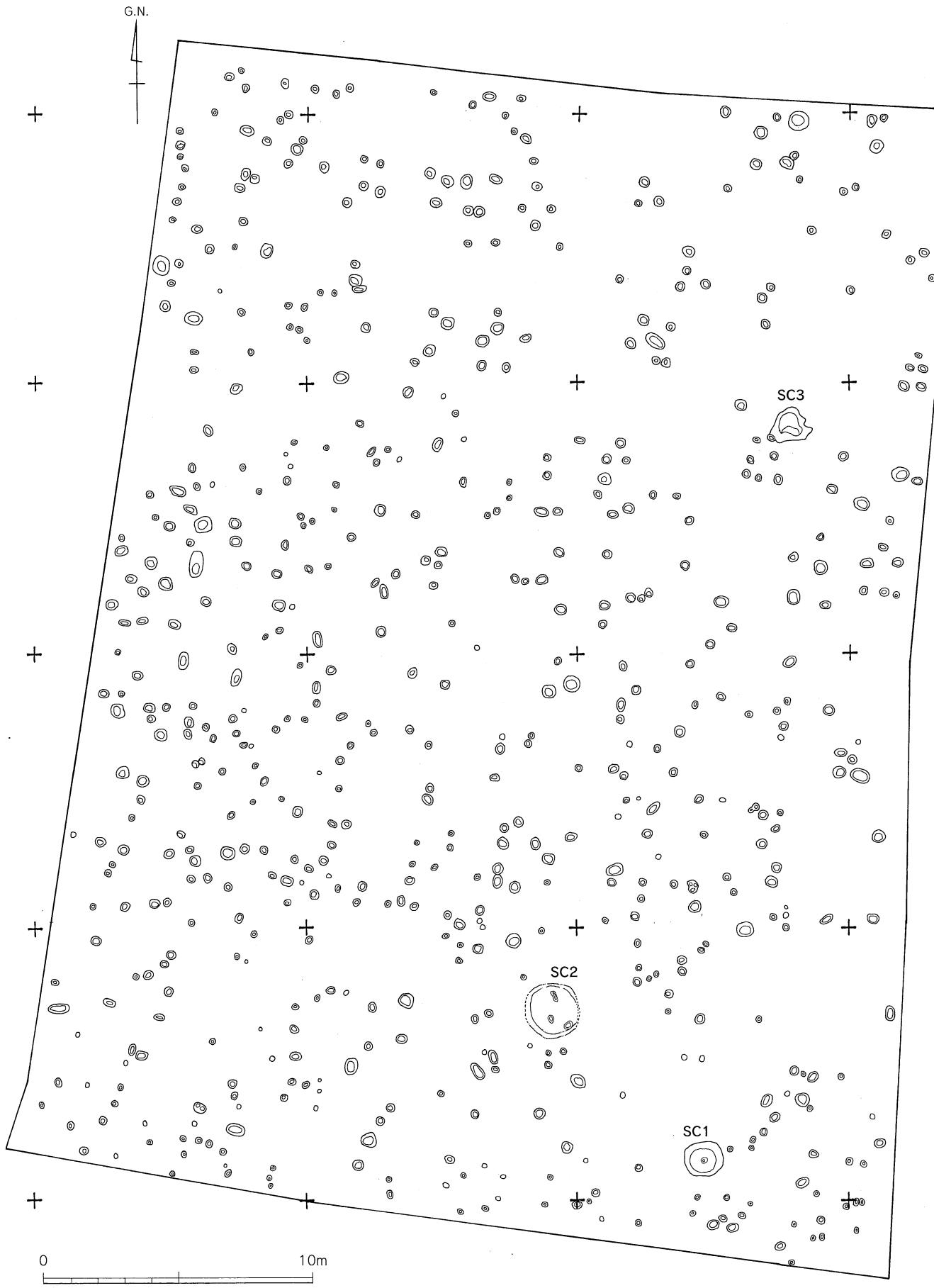
SC3 (第13図)

SC3は調査区の東側、I9グリッドの第VII層上面で検出した。平面プランは、長軸約1.48m、短軸約1.22mの不整形を呈し、検出面から最深部までは、約0.38mを測る。南西部外側にピットを検出したが、SC3に伴うピットかどうかは不明である。SC2の埋土と近似しており、古墳時代の土坑に帰属すると思われる。用途については不明である。遺物は出土していない。

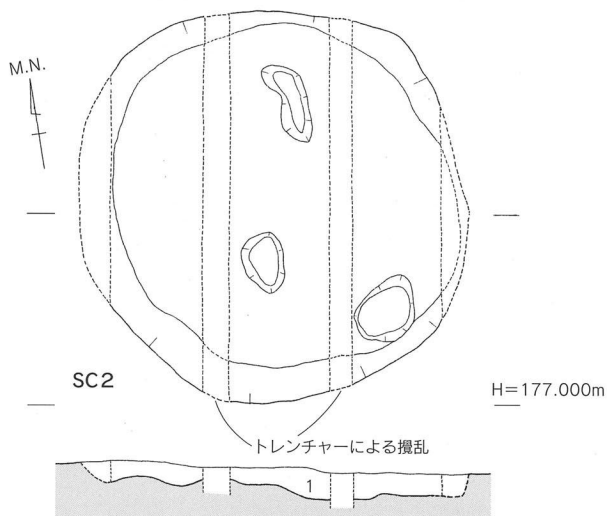
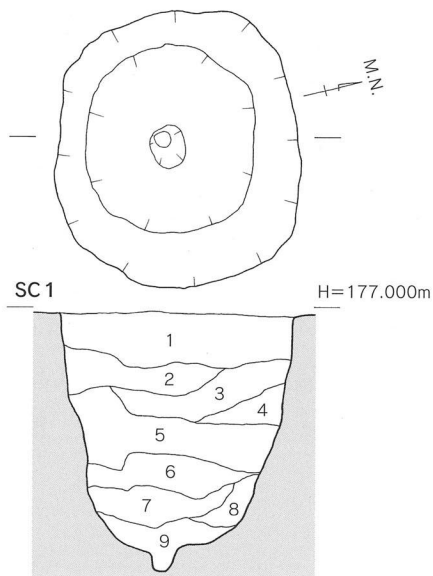
時期不明の遺構

ピット群 (第12図)

調査区内で、A区同様、土坑の他に時期不明の多数のピットを検出した。埋土は御池軽石混暗褐色土と御池軽石混黒褐色土の2種類に分けられる。大きさにはかなりのばらつきがあり、掘立柱建物跡の柱

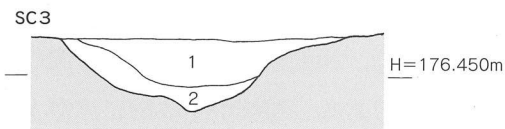
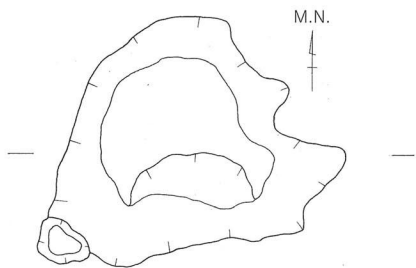
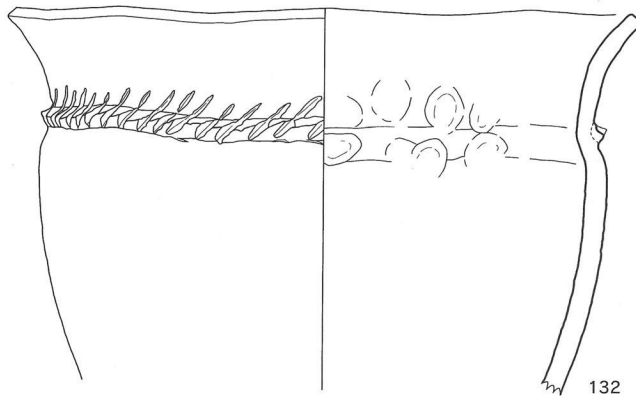


第12図 横市中原遺跡 B区 遺構分布図 (1/200)



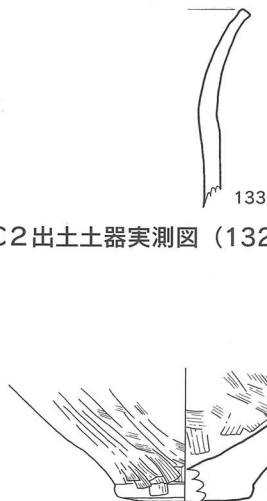
- 1 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
御池軽石粒を多量に混入し、硬くしまっている。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR3/2)
御池軽石粒を多量に混入し、ややしまりあり。
- 3 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)
1と非常に似ているが、しまりがない。
- 4 黒褐色土 (Hue10YR3/1)
御池軽石粒を多量に混入し、しまりがない。
- 5 黒褐色土 (Hue10YR3/1)
4と同じであるが、暗褐色ブロックを含む。
- 6 黄褐色土 (Hue10YR5/6)
御池軽石粒を多量に混入し、サラサラしている。
- 7 黄褐色土 (Hue10YR5/6)
6と同じであるが、暗褐色ブロック (5~10mm)を含む。しまりなし。
- 8 黄褐色土 (Hue10YR5/6)
御池軽石粒を多量に混入し、ややしまりあり。
- 9 黒褐色土 (Hue10YR3/2)
御池軽石粒を多量に混入。粘性・しまりともあり。

1 黒褐色土 (Hue7.5YR3/1)
御池軽石粒 (1~8mm) を多量に混入し、しまりあり。やや粘性あり。

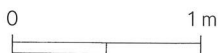


- 1 黒褐色土 (Hue10YR2/2)
御池軽石粒 (1~3mm) を多量に混入し、ややしまりあり。
- 2 黒褐色土 (Hue7.5YR3/1)
御池軽石粒 (1~3mm) を多量に混入し、ややしまりあり。やや粘性あり。

SC2出土土器実測図 (132・133、S=1/3)



B区第V層出土土器実測図 (S=1/3)



第13図 横市中原遺跡 B区 SC1・2・3実測図 (S=1/40) および
SC2出土土器・第V層出土土器実測図 (S=1/3)

穴としてまとまるものは確認できなかった。ピットによっては、壁面や底面は歪みあるいは凹凸が著しいものも見られ、樹木の根穴の可能性も考えられる。

(3) C区の遺構 (第14図)

C区の調査対象面積は約2,220㎡である。C区は調査対象区の北端に位置し、標高は176.0m～177.0mで、東向きにゆるやかに傾斜している。調査区の長さは約100mであり、細長くなっている。北側部分の桜島文明軽石面(第Ⅱ層)で遺構検出を行った結果、小溝状遺構(畠跡?)を検出した。また、他の調査区部分については御池軽石面(第Ⅶ層)での遺構検出を行った結果、西側で古墳時代と思われる竪穴住居跡2軒を検出した。その他、時期不明の土坑6基と多数のピットを検出した。A・B区同様、明確に掘立柱建物跡と思われるようなピットは検出されなかった。

以下、遺構ごとにその特徴と出土遺物について記述する。

古墳時代の遺構

竪穴住居跡

1号竪穴住居跡(SA1、第15図)

SA1は調査区西端、F17・18グリッドの第Ⅶ層上面でプランの半分を検出した。平面プランは方形を呈するものと思われる。検出面から床面までの深さは約0.26mを測る。柱穴は4基検出した。柱穴の床面からの深さは約0.24m～0.32mである。また、住居中央部に直径約0.74mの焼土坑も検出した。焼土坑は掘り込みが非常に浅く、硬化はしていなかった。焼土坑の周りに数点の炭化物を検出した。この焼土坑と同レベルで床の硬化が認められ、その上の土と分層が可能であること、また、同レベル直上で土器が出土していることから、ここが住居の生活面であると推測される。つまり、SA1は住居のプランを掘り上げた後、土を敷いて(貼り床)を行った上で居住したものと思われる。

出土遺物は第17図に示している。134は底部が丸底の壺である。内外面ともナデを施している。135も同じく底部が丸底の壺である。外面は縦方向のナデを施し、工具痕がわずかに見られる。内面はナデを施している。136は甕の胴部から底部である。底部は平底になっている。外面は胴部がナデ、底部が工具によるナデを施している。内面はナデを施し、指頭痕が見られる。137は小型壺の胴部である。外面の一部に黒斑が見られる。

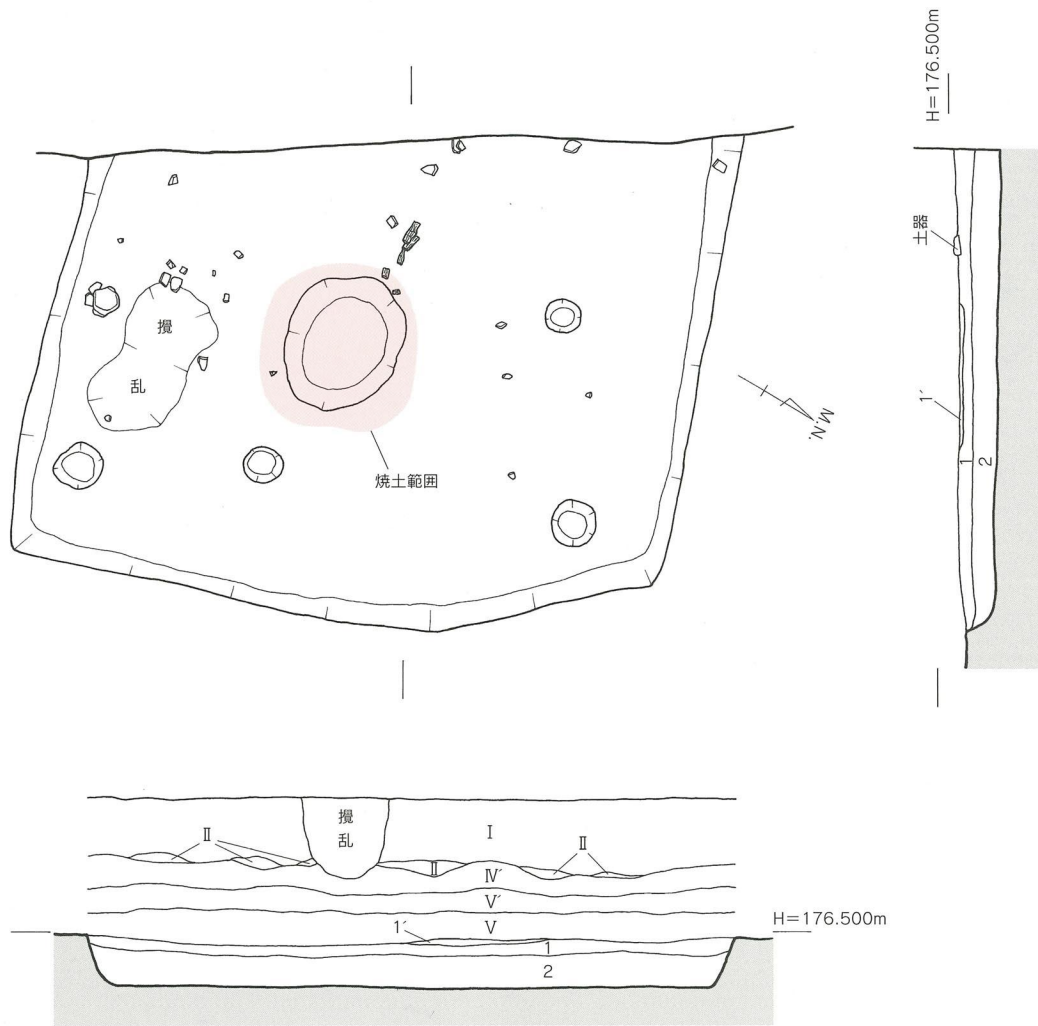
2号竪穴住居跡(SA2、第16図)

SA2は調査区のほぼ中央から西側、G15・G16・H15グリッドの第Ⅶ層上面で検出した。主軸方位はN-61°-Eを指す。長軸約5.02m、短軸約4.60mの方形を呈する。検出面から床面までの深さは約0.50mを測る。柱穴は2基検出した。柱穴の床面からの深さは約0.40mである。西側には検出面からの深さ約0.22mで床面の平坦なテラスが造られている。また、南側側辺にはいわゆる間仕切り壁も造られている。埋土は御池軽石混黒色土と御池軽石混黒褐色土である。遺物が全体的に床面よりやや浮いた状態で出土した。

出土遺物は第17図に示している。138は高坏の口縁部から脚部である。口縁部は緩く外反し、坏部は深さがあり、脚部の側面観はわずかに直線的である。外面はヘラ状工具によるナデを施し、口縁部に2条の工具痕が見られる。内面は横方向のミガキ、口縁部は横ナデを施し、黒変している。139は小型丸底壺の頸部から底部である。外面は横方向のミガキ後、縦方向のミガキを施し、一部ススが付着してい



第14図 横市中原遺跡 C区 遺構分布図 (S = 1/400)



SA1断面(南北)とC区西壁土層断面図

- I 基本層序第I層
- II 基本層序第II層
- IV' 基本層序第IV層であるが、中世の耕作の影響を受けていると思われる。軟質で粘性はない。サラサラしている。
- V' 基本層序第V層であるが、第V層の比べ若干軟質である。耕作の影響か？
- V 基本層序第V層
 - 1 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 御池軽石粒(1~2mm)を少量混入し、やや軟質。
 - 1' 黒色土 (Hue10YR2/1) 焼土。非常に軟質。
 - 2 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 非常に硬くしまっている。貼り床と思われる。

第15図 横市中原遺跡 C区 SA1実測図 (S=1/40)